柳生旅日記

講談名作文庫

カバー画　生頼範義
装　幀　平野甲賀

柳生旅日記

講談名作文庫

柳生旅日記

講談名作文庫 4

講談社
320

講談名作文庫

320円
0193-433040-2253 (0)

柳生旅日記

柳生旅日記

講談名作文庫

講談社

講談名作文庫

4

柳生旅日記

講談社

目次

敵はいつどこにいるかわからんぞ……九
慢心が嵩じてピントが狂ったか……一三
キ印とキ印の珍問答……二三
将軍家の密命くだる……三一
狂人を装って漫遊の旅……四一
知恵伊豆に餞別の無心……五〇
義によって助太刀いたす……五九
天竺へ供をいたせ……六五
独眼流片目はずしの正眼……六九
十兵衛さては食い逃げか……七七
八等身の美人剣客……八一
名前は宿へ置き忘れた……八七

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

覚禅坊が愕然……九五
坊主っ自分の引導は自分で渡せ……一〇三
侍姿の不思議な宿引き……一〇九
知らぬが仏、釈迦に説法……一一八
俄侍の名が鬼の清勝……一二四
エケチット極まるやつじゃ……一二九
鶴の一声に一同ギャフン……一三五
拾ったものを返すなどとは……一四〇
馬丁とはよくぞ見た……一四八
自慢の目玉は節穴同然……一五三
十兵衛贋狂人ぶりを発揮……一五七
十兵衛ギョギョッとする……一六一
待ちに待ったる時節到来……一六八
酒で釣りだす下郎の口……一七三
謀事は密をもって尊し……一七九
見栄と慾とにだまされる……一八七
思いぞ晴れる錦帯橋の仇討ち……一九二
えへんパッサリ天下無敵の豪傑じゃ……二〇一
お供はつらいねと、十兵衛先生……二〇六
槿花一朝、豪傑の夢……二一〇
見る目美し兄弟愛……二一六
一堂に会す四名人……二三一
月下に受けつぐ二刀流の奥義……二三七
美人が無うてなんの酒ぞや……二三一
罠にかかった可憐な小娘……二三五
汝等ごときはお手玉侍……二三九
武士の風下にも置けぬやつ……二四四
一髪よく大象をつなぐ……二五〇
お見事なる一番槍……二五五
降りかかる兵児の火の粉……二六〇

ここは冥土かそれとも娑婆か……二六七
振られたと降られたで、とんだ間違い……二七三
聞いてビックリ下郎の素性……二七九
よれよれ侍は吉岡兼房……二八三
八幡社前、三名人のリーグ戦……二八九
若隠居、柾木坂へ隠遁……二九九

さし絵　小山栄達

敵はいつどこにいるかわからんぞ

隻眼の小男ながら剣を取っては日本一、生まれながらの天才児とも申すべき、柳生十兵衛三巌先生の旅日記を申し上げます。

そもそも柳生三代と申しまして、柳生家には代々剣術の名人が出ましたが、柳生流という一派を編みだしましたのは、柳生但馬守宗巌、この方は武芸中興の祖ともたたえられまする、神陰流の開祖、上泉伊勢守先生の門人で、四天王の一人。四天王というのは、柳生但馬守、疋田文五郎、神後伊豆、丸女蔵人、龍虎といわれたのが塚原卜伝、磯端伴蔵、みな一流一派の祖ともなられた名人でございます。

但馬守宗巌は、神陰流より一派を編みだして新陰流、のちこれを柳生流、又は柳生新陰流などとも申しました。宗巌の子但馬守宗矩、これが又すこぶるの名人、徳川三代将軍家光公につかえて、一万石の大名に取りたてられ、将軍家御指南役、木挽町――（今の歌舞伎座のあたり）にお屋敷を賜わって、飛ぶ鳥を落とすような勢いでございます。

子供が四人ございまして、総領が十兵衛、次男を刑部、三男が又十郎、一番末が女でおうめ殿、これはのちに松平左近将監へ嫁ぎましたが、女でこそあれ三人力、武芸に秀でたあっぱれ女丈夫でございます。

しかるに次男の刑部友矩は夭折、三男の又十郎は柔弱、但馬守の楽しみはただただ総領の十兵衛三巌ばかり。習わずしてその極に至るというのはこの人、別に道場へ出て、武芸の稽古をするというのではないが、自然に備わるものと見えて、体に少しの隙もございませぬ。

すでに七八歳の時に、父の道場に有り合わす木剣を持ちだして、家臣のものが雑談などにふけっている油断を見すまし、ひそかにうしろに忍びよって、いきなり頭をポカンと打つ。打たれた者は驚いて振りかえると、腕白ざかりの若さまが無邪気に木剣を持って笑いながら立っている。怒ることも出来ませんからしかたなしに、

○「若さま、そんな無茶な事をなさっては困ります。さあここへお座りなさい」

となだめようとすると、

十「こりゃ武兵衛、その方はなぜ油断をしている。武士はいつどんな敵があるかも知れぬから、平素からその心掛けでいなければならぬと、お父上がいつも申されているではないか、いまわしが打ったのは木剣だからよいが、もし真剣であったらば、その方の首が落ちたろう」

とまことに子供にあわぬ言葉、武兵衛理の当然に、

武「へえー」とあきれて返す言葉もない。とすぐに木剣を取り直した十兵衛、そばにぼんやり見ていた、ほかの一人の横面をコツーリ……。

△「あっ、これは若さまどうも……」

と驚く顔をながめて、

十「喜助、その方はだいぶ腕前が上達したと、お父上のお話であったが、やはり油断があるな」

喜「そ、そりゃあ若さまごむりですよ、なんぼなんでもまさか、若さまがお打ちになろうとは思いませんから……」

十「それが油断ではないか、敵はいつどこにいるとは決まっていないぞ」

喜「へっ、恐れ入りました」と頭をさげたひょうしに、又もや一つコツン。

喜「あっ、こりゃあひどい、まるきり油断も隙もあったもんじゃない」と喜助のやつこぼすまいことか。十兵衛すましたもので、

十「そうじゃ、その油断も隙もなければ名人じゃとお父上がおおせられたぞ、これからのちはいつ打つかも知れぬによって油断するな」

と家来どもをたしなめるありさま。父但馬守もまことにすえたのもしく思っておられます。

かくて十兵衛成長するにつけ、腕前といい器量といい、実にあっぱれな人物、もう十八九歳から二十歳ごろになると、父但馬守と三本勝負をすれば、二本まで勝ちを得られるような腕前になりました。但馬守殿も胸中ことごとくご感心、わが子ながらあっぱれの達人、彼こそ天性の武芸者である。一度真の力をためして見たいと、おぼしめされておりました。

するとある夜のこと、十兵衛便所へまいり、手を浄めようと雨戸をあけまするに、広庭に忍んでいた、但馬守殿、手ごろの石を拾って十兵衛を目がけ、ぱっとばかりに投げつけました。

いくら十兵衛が名人でも闇夜の礫ましてや投げたのがこれまた名人の父但馬守、狙いはたがわず、はっしと十兵衛の右の眼にあたりました。但馬守殿、決して目を狙った訳ではありませんが、これこそまこと物のはずみ。

十兵衛「曲者っ」というと右の眼を傷つけましたのに、左の眼を押さえて、植え込みの中へ飛びこんでまいりました。驚かれた但馬守殿、

但「下がれっ父であるぞ、無礼をいたすなっ」
どっちが無礼だかわからない。
十「これは父上でござりまするか、いかなるおぼしめしをもって、かくは十兵衛の一眼を傷つけましたか」
但「その方、近ごろ武芸上達のため、慢心いたしたるとのこと、まことに捨ておく訳に相ならぬから、よってためして見たのじゃ」
十「ははっ、ご意見のためおためしになりましたか、恐れ入ります」
といったが、武芸者の親などというものは、まことに危険千万。さしずめ今日なら人民裁判でも開かれて、大いに吊しあげられるところでございましょう。但馬守殿も心中、
但「ああ許してくれ、あたら名人を不具者にした、決してその方を憎く思うてではないぞ」
と深く悔やまれたことでございました。
さるにても十兵衛、右の眼を傷つけられたのに、左の眼を用心して飛びだすというのは、これすなわち武芸の極意にいたっているからで、たいていの者は右の眼へなにか入ると、そのほうをいじっている。大掃除などにしても、
○「熊さんおまえさんせいが高いから、天井の掃除を一つ頼む」というから熊さん心得て、天井の掃除をしていると、熊「大変、大変」○「どうしたえ熊さん」熊「左の眼へごみが入ったのでどうも痛い、おお痛い」と、左の眼をこすっているうちに、右の眼へまた入る。熊「やあ、両方へ入った」といってもおっつかない。
十兵衛は、一眼はもういかんということが胸中にございますから、残された一眼をかこって、後に備えた次第でございます。このために十兵衛一眼を失しましたのは残念、しかし腕前はすすむばかりでございます。

慢心が嵩じてピントが狂ったか

ところがこの人はからずも、武芸熱心のために気が変になってまいりました。とかく人間はあまり物にこりすぎると、どうかすると常軌をはずすようなことがあります。十兵衛先生も発狂されたのではございますまいが、ちょいちょい常軌にはずれるところがあるから、父君但馬守はご心配なされ、閑静なところへおけば、また気の静まることもあろうと、ご領分大和柾木坂へ送って、静かに養生させることになりました。ところが十兵衛、ますます気が変になるばかりで、
十「こりゃだれぞおらぬか、まいれ」
御近習の長谷部金之助それへまいって、
金「ははっ、お召しでございますか」
十「金之助か、もそっと前へすすめ」
金「はっ、なんぞご用で」
十「予はその方にたずねたいことがある、日本で第一番の武芸者はだれか、その方存じおるか」
金「さようにござります、まず一流一派をとなえて、名を成すもの数多うござりまするが、ご

当家大殿さまは、将軍家御指南番、上さまのお手を取ってご教授なされるお方、まずもって大殿さまかと存じまする」

十「なに、父上か、父上も若いうちならともかく、老いては物の役にたたん、騏驎も老いては駑馬じゃ。血気さかん、真の実力ではだれをもって第一とする」

金「ははっ、それは若殿をもって第一かと存じまする」

十「うむ予か、予もそのように思うぞ。されば予の盛名を慕うて、毎日入門を願いにまいる者が大勢あるぞ。昨日もまいったが、そちは存ぜぬか」

金「一向に存じませぬ、どのような者がまいりましたか」

十「大きいやつが二人きおった、何者だとあい尋ねたところ、一人は鎮西八郎為朝、いま一人は和田合戦からゆくえの知れなくなった、朝比奈三郎義秀だ」

金之助、そーらそろそろ始まって来たぞ、と思いながら、

金「うっふ、して為朝、義秀の両人をいかがなされました」

十「立ち合ってつかわしたが、いやはや未熟千万な腕前、そのような腕前では、予を師匠とするにはあまりに未熟すぎる、よっていま一度江戸おもてへ立ちこえ、父上にご指南を乞い、相当使えるようにあいなってから、予のもとへまいれと添書をして、江戸おもてへつかわした」

金「これは恐れ入りました」

十「今朝もまた三人連れがまいったぞ」

金「へえーそれは何者でございまする」

十「三人とも日本人ではないな」

金「どこの人間で」十「唐人だ」

金「へえー何者でござりまする」

十「その方も名前は存じておろう、蜀の玄徳が関羽、張飛の両人を連れてまいり、早く曹操百万の軍勢を破りたいが、関羽、張飛両人とも、いまだ腕前未熟にして物の役に立たぬから、どうか右両人へ一本ご教授にあずかりたいと、わざわざ玄徳つきそいで頼みにきたが、予はただ一喝のもとに叱りつけてやった」

金「なんといってお叱りあそばした」

十「予の武術はなんじらごときに教えることまかりならん、早々立ち去れっ、ぐずぐずいたすにおいては三池典太光世の一刀をもって、なんじら三名の首をはねてくれるぞと叱りつけてやった」

金「ははあ、それからいかがなされました」

十「すると関羽が怒って青龍刀を振りまわしたから、その青龍刀を取りあげてな、髯を残らずそってやった。関羽のやつ、髯がなくては夜目が見えぬと泣いておったが、まるで猫のようなやつじゃのう。わっははは」

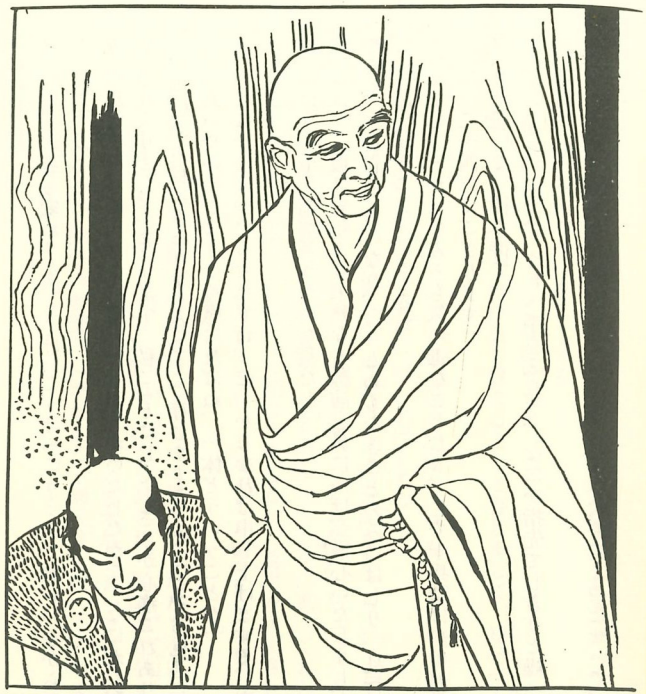
とうとうお話が、三国志へまで脱線するというありさま。

伝え聞かれるたびに、父君但馬守のご心痛はいやますばかり、

但「ああいかなれば予は、かく老年に及んで憂き目を見ることか、頼みに思う長男十兵衛は発狂し、次男刑部は早世、三男は性愚かにして放蕩懶惰、とうてい柳生の家をつぐことかなわず、子がなくて泣くというが、われは子供があって嘆きを見なければならぬとは、なんたる不幸であろう」

とふさいでおられます。したがって顔色もよろしくない。けれども勤めはおろそかにはできませんから、毎日登城の上、お役お勤めにあいなる。ある日のこと、将軍お稽古も相すみ、長廊下をさがって来ると、シーッ、シーッとお坊主の制止の声。但馬守ふとごらんになると、これぞ品川東海寺の沢庵禅師でございます。

そのころ僧侶で将軍とお膝組みの話ができ、老中の方々までを呼び捨てにされたのは、こ



の沢庵禅師と、かの天海僧正の二人ぎりでございました。それほど勢力のある坊さんですから、但馬守ははっとお廊下のかたわらによってひかえていると、禅師は麻の法衣に水晶の念珠を爪ぐりながら、但馬守の前を通ろうとしてふと目をつけられ、

沢「おお但馬、久しく会わなかったが、今日も上へお稽古か、おおきにご苦労じゃのう」

但「はっ、これは禅師におかせられまするか、うるわしき尊顔を拝し但馬恐悦に存じま

す」

沢「いや、お身も変わりがのうてけっこうけっこう……」といいながら但馬守の顔をつくづくとごらんになって、

沢「但馬、どうも顔色がよくないが、どうかいたしたかな。なにか心配ごとでもあるのか」

但「恐れ入りましてございます、私ごとにしていささか心痛これあり、それゆえ自然と面に現われ、禅師のお目にさわりましたことと存じまする、なにとぞお見逃しのほどを……」

沢「ああいやいやさような遠慮に及ばぬ、一体どういうことか」

但「これは恐れ入ったるおたずね、せっかくなれば申し上げまする。実は倅十兵衛のことにござります」

沢「ほほう、十兵衛がどうかいたしたか」

但「ははっ、彼は先年より未熟なる腕前を鼻にかけ、慢心いたしましたものか、近ごろではどうやら乱心の気味とあいなり、とりとめもなきことのみ口ばしり、乱行日々にあいつのります、これが心痛の種にございまする」

沢「うーむ、それはなんとも気の毒なことじゃ、して十兵衛は当年何歳にあいなるか」

但「はっ二十四歳にござります」

沢「まだ若いな、待て待て」

といいながら、法衣のうちへ手を入れて、なにか指先でしきりと繰っておられたが、

沢「但馬」但「はっ」

沢「これはただ慢心とばかりも有るまい、あまり武術にこったせいで、さように取りのぼせたのであろう。決して心配いたすな、わしがなおしてしんぜよう」

但「ありがたきしあわせに存じまする」

沢「いまどこにおるのじゃ、十兵衛は……」

但「閑静なところなれば、自然気も静まることと存じまして、知行所大和柾木坂へつかわしてござります」

沢「ああさようか、ではちょっと柾木坂まで出かけてなおしてやるから、心配するに及ばぬ」

但「はっ、なにぶんよろしくお願い申し上げまする」

平伏してふと顔を上げて見ると、禅師はもう四五間もあっちへ行っていらっしゃる。まことにのんきな坊さんもあったもので、交通の不便なその当時に、ちょっくらちょいと柾木坂まで行けるものじゃございません、それを隣家へでも出かけるように思っておられます。やがて将軍家拝謁をすませて、品川東海寺へお帰りに相なりましたが、食事をすまされると弟子の者に、

沢「わしはこれからちょっと大和まで行って来るから留守をたのむぞ」

弟「かしこまりました」

弟子もなれております、また始まったぐらいに思って、だれもなにご用でとたずねる者もございません。禅師はあいかわらず麻の柿色の法衣を召され、頸に頭陀袋をかけ、網代の笠にあかざの杖、草鞋ばきのすがたで、東海道を順路大和の柾木坂へおつきにあいなりました。申すまでもなく一万石のご陣屋、柳生の表御門にかかると、網代笠を取ってそのまま、ずいと門内へはいろうとするから、門番が、

門「こりゃ坊主待てい」

沢「ははあわしのことかな待てととめたのは」
門「うむ、見受けるところ怪しげな風体をいたし、当ご陣屋のご門を案内もなく通行いたさんとは無礼であろう、ぜんたいきさまは何者じゃ」
沢「ははははおまえには何者だかわからぬかな、かようにまるい頭で、身に法衣をまとっているからは、出家だということぐらい」
門「だまれ、坊主はわかっているが、何用あってどこからまいったのじゃ」
沢「なるほど来意を聞きたいのじゃな」
門「そうじゃ」
沢「ただ一言でわかるものを……いやなに、ほかではないが、この陣屋には十兵衛がまいっているはずじゃが、どうじゃいるかな」
門「ひかえろ、若殿をつかまえて十兵衛などと呼び捨てにするとはなんだ、無礼者めっ」
沢「これこれおまえのようにいばるものではない、十兵衛だから十兵衛と申すのじゃ、まさか九兵衛でも八兵衛でもあるまい」
門「おやっ、こやつつべこべとぬかす坊主じゃ、しからば若殿へ何用あってまいったか」
沢「十兵衛にぜひとも会わねばならぬ用があってまいったのじゃが、そう申して取り次いでくれ。近ごろ十兵衛わずかの剣術を鼻にかけて、大法螺を吹いているそうじゃ、それだによって禅家の雲水が、座禅の功力をもって、十兵衛の鼻を打ち挫き、狂ったピントを直してやろうと思ってまいったと、こう伝えてくれ」
門「ご同役」○「なんで」

門「類をもって集まるとはよくいったものだ、狂人の若殿の鼻を、座禅の功力をもって打ち挫きに来たから、取り次いでくれというきちがい坊主がまいったが、どうしよう」
○「それはおもしろい、狂人と狂人を突きあわせれば、きっとおもしろい芸当をやらかすに違いない、取り次いでやろう」
門「そんなことをしてはあの坊主お手討ちになるだろう」
○「なに、あんな乞食坊主、手討ちになったからとて、われわれの損になる訳でない、まあ拙者におまかせなされ……ああ坊主、いま取り次いでやるからしばらくそれにひかえておれ」
沢「なるべく早く頼むぞ」
○「なるほどこいつも恐ろしい見識の高い狂人坊主だな」
このことをお玄関へ取り次ぎますと、それから一応重役へ申し上げる。重役も驚いたがむやみに追い返して、あとでどんなお叱りを受けるかも知れぬと、十兵衛の部屋へ襖ごしに、
重「申し上げます」
十「なんじゃ、何者じゃ、許すまいれっ」
重「ははっ」
すーっと襖を押しあけると、薄暗くした一室に、十兵衛乱髪にて眼は血ばしり、垢じみたる衣服のまま、厳然とひかえております。

キ印とキ印の珍問答

重「恐れながら申し上げます、ただいまご門前へ、禅家の雲水と申する僧侶がまいりまして……」

みなまでいわせず、

十「ああさてはまいったか、おおかた予を訪ねて来るに相違ないと心得ておった。その坊主は武蔵坊弁慶であろう、予に武芸の指南を受けたいと申しておろうがな」

重「いえさようにはございません、恐れげもなく座禅の功力とやらをもって、若殿の鼻を打ちくじきにまいったと申します。よって門番の者ども、こやつ無礼なきちがい坊主、追い払わんといたしましたが、なんとしても動きません」

いや十兵衛聞いて怒ったの怒らないの、雷のような声を振りしぼり、

十「やあ無礼なるきちがい坊主、天下の名人たる予の鼻を打ちくじくなどとはにっくいやつ、許すことまかりならん、そやつ早々庭前へ引けっ、手討ちにいたしてくれる。取り逃がすにおいてはなんじも同罪であるぞっ」

重「ははっかしこまりたてまつる」

重役はふるえあがって御前をさがり、このよし門番へ伝える。

門「そーらいよいよ、キ印とキ印の芸当がはじまるぞ……ああ坊主、若殿さまのおおせだ、庭へまわれ」

沢「ははあ、そう来るだろうと思っていた、ご免よ」

と家来の者の案内で庭前へまわる。

家「そこへひかえておれっ」

沢「これこれここは庭ではないか、かようなところへ座れるものではない」

家来の止めるのもきき入れず、縁側へ腰をかけ草鞋をといて上がりこんでしまった。

家「こりゃ無礼者、さようなところへ上がりこんではあいならん、下りろ下りろ」

沢庵耳にもかけず、縁先にぴたり座禅を組んでいらっしゃる。威儀厳然とあたりを払い、なんとなく犯しがたいところがございますので、家来も気味悪く、たって引きおろそうともいたしません。ところへ正面の唐紙あらあらしく押しあけて、大刀をひっさげ、ずかずかと出てまいった十兵衛三巌。

十「こりゃ坊主はいかがいたした」

家「はっ、これへひかえておれと申すに、あのようにお縁側へ上がりこみ、なんと申してもきき入れません」

十「なにっ……やあおのれきちがい坊主、よくもこの十兵衛を捉えて、いろいろとののしりおったな」

このとき沢庵禅師、静かに十兵衛の姿をごらんになると、髪はぼうぼうと乱れ、衣類は垢によごれ、隼のごとき眼にはなんとなく淀みがあります。ははあこれはまこと、発狂いたしたと見え

るわいとおぼしめしたが、にっこりと笑みをふくんで、

沢「ははあ、そちが十兵衛か」

十「だまれ無礼者め、なんじわれの鼻を打ちくじくなどと申したそうじゃが、打ちくじけるものならくじいて見よ」

すでに太刀の柄に手をかけて、いざといわば斬って捨てん勢いでございます。

沢「ははははなかなか鼻息が荒いのう。しかし十兵衛、そちはいささか柳生流を使えるとはいいながら、あまり大言をはくな。そちほどの腕前は掃くほどあるぞ、この方の座禅功力というは天下無敵といいたいが、天が下ばかりではない、地獄の闇魔大王はじめ、視る眼、嗅ぐ鼻、牛頭馬頭をにらみ殺し、天上にては梵天帝釈、不動明王、摩利支尊天までも降参させることもあるのじゃ、たかが人間相手の柳生流ごときをいささか覚えて、天下の名人などとは、これ井の中の蛙、大海を知らずというものじゃ、天下無敵などとは、いやはや片腹いたい、わっはっははは」

腹をかかえて笑いころげる。驚いたのは様子いかにと、唐紙のすきまや垣根のかげから見ていた家来一同。

一同「おやおや若殿が珍しい狂人だと思っていたら、この坊主は若殿以上だ、上には上があるな」

とささやき合っております。十兵衛井の中の蛙といわれていよいよ憤り、

十「なにっ、この破れ坊主のくそ坊主、いわしておけば口から出ほうだいの雑言無礼、よしっ、その儀なればわれとここにおいて立ち合いに及べっ、さあ早く立てっ」

沢「騒ぐな騒ぐな、立ち合いが望みとあれば立ち合ってもつかわすが、それよりまえに十兵衛、

その方に一応たずねることがある」

十「なんじゃ、早く申せい」

沢「いまも申した通り、たかが人間相手の柳生流、それも一人一人なれば汝は勝てるだろうが、もし両人前後より向かったるときには、汝いかにしてそれをまぬかれるか、まずその返答をいたして見よ」

十「だまれ、前後に敵を受けたとてなにほどのことやあらん、まず前の敵を斬って、後ろの太刀のわが身に触るるまでに討ち取るは、造作もないことじゃ」

沢「やっ成るほどえらいえらい、して見ると汝は、豪傑じゃわい。したが十兵衛、もしやその倍の四人が、汝の前後左右より打ってまいったるそのときは、いかに防ぐか」

十「わずか四人ぐらいの敵がなんじゃ、わが柳生流水月の極意をもって斬り捨てくれるわ」

沢「おおおなかなかの豪傑じゃ。なれども十兵衛、四人の倍数八人が汝を取りかこみ、鋒をそろえて斬りつけきたらばなんとする」

十「八人とてなにほどやあらん、そのときこそは三光雷到の極意をもって八方に斬りふせん」

沢「強い強い、では八人の倍十六人ならいかがいたす」

十「柳生流天地人三巻の中の極意、木の葉隠れの術をもって斬り靡けるに、なんの造作があろうぞ」

沢「うむ、しからばそれの倍の三十二人ならば」

十「そのときこそは同じ三巻のうち、柴隠れの術をもって打ち取るわい」

沢「三十二人の倍、六十四人ならば」

十「六十四人とて恐るるところにあらず、そのときは同じ三巻のうち、真剣白刃取りの極意をもって、一人残さず打ち取るだけじゃ」

沢「その倍の百二十八人が、鉄砲あるいは弓矢、太刀、槍をもって汝を取りかこんだるその節には」

十「こやつだんだんふやしていくな、……たとえ百二十八人飛び道具をもって囲むとも、それを恐るる十兵衛ではないわ」

沢「うむ、しからばなんとするのじゃ」

十「そのときこそは柳生流の秘術をつくし、この三池典太光世の目釘のつづくかぎり、斬って斬りまくり、もしもかなわぬそのときには武門の習い、潔く斬り死にをとげるまで、なんぞ一命を惜しまんや」

沢「なんじゃと、かなわぬときには武門の習い斬り死にをする……わっはっはっ、さては十兵衛、汝は大言を払うにより、どれほどの腕前かと思えば、いやはや取るに足らざる弱虫め、きさまの豪傑は百二十八人で打ち止めか。やいこれ十兵衛よく聞けよ。百や二百は物の数ならず、まず計りごとを帷幕のうちにめぐらし、勝ちを千里の外に決する、これが兵法の極意じゃ。たとえ何十万が何百万、何千万といえどもおそれず怯まず、この方などはこれを即座にうちはらい、吹き飛ばして見せるわ。その方もう今日からは、うぬぼれ豪傑、ひとり名人の看板はおろして、百二十八人の豪傑と改名いたせ……」

あまりの大言に呆れ返った柳生の家来たち、

○「おのおの、あの坊主たいした心臓でござるな」△「まさにスーパーマンの心臓ではござらぬか」×「さすがの若殿も、吹き飛ばされそうでござるぞ」と驚きいっております。

十兵衛いよいよ鬢髪を逆だて、

十「おのれっいわしておけば悪口雑言、その舌の根をとめてくれん、さあ立ち合いに及べっ、勝負いたせっ」

沢「これ待て十兵衛、その方ややともすると刀に手をかけ、へっぴり腰で勝負を好むようじゃが、それは匹夫の勇、猪武者というものじゃ、豪傑名人の箔をはがすようで見苦しい。およそ名人達人というものは、むやみと勝負を好むものではない。今この方が極意悟道の歌を教えてつかわそう」

十「だまれっ、われも天下の名人、それしきのこと、汝に教わらずとも存じおるわい」

沢「なに、知っていると申すか。それはどういう歌じゃ、申して見よ」

十「むむ望みとあらば聞かしてつかわす。山川の流れに木の葉しずむとも、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

沢「いやいかなる歌かと存じたら、さような小さなことでは武芸の悟道にはならぬ」

十「しからば、さまざまと教えの道も多けれど撃ちこむときぞ真の一刀」

沢「ははは、あいかわらず小さい小さい、そんなことでは役に立たぬ。今この方が武芸の眼目とする悟道の歌を書いてつかわす、それがわかれば十兵衛、その上で仕合ってやる。これこれ陣笠ども、硯と料紙を持て」

沢庵禅師が料紙硯を取りよせて、さらさらと認めた一首の歌。

十「早くこっちへよこせ……、むむなに……たたずむな、行くなもどるな居すわるな、寝るな

起きるな知るも知らぬも……」

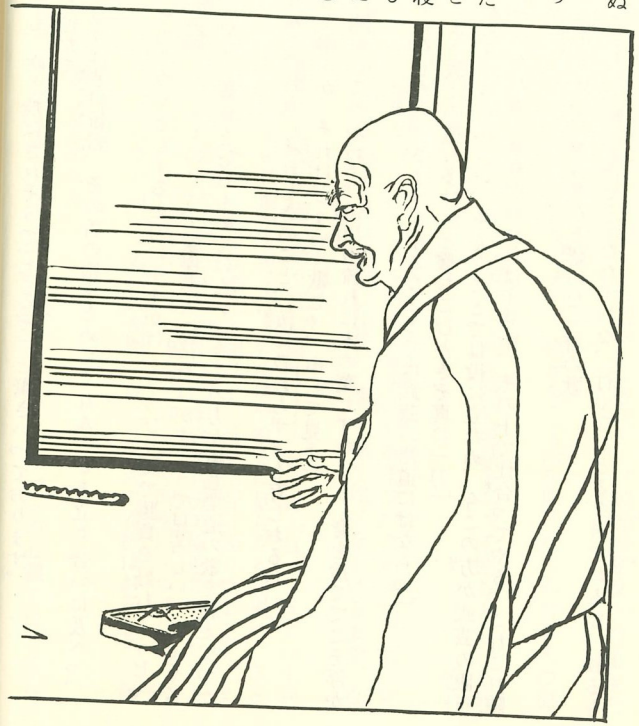
沢「どうじゃわかったか」

十「待て待て、たたずむな行くなもどるな居すわるな、寝るな起きるな知るも知らぬもと……、たたずむな……、うーむ行くなもどるな……はて……」

首をひねって考えたがどうもわからない。

沢「どうじゃ十兵衛、未熟不鍛錬のその方ごときにわかるところではあるまい」

十「だまれっ、これ



しきのことがわからずになんとする、たたずむな……」

たたずむなとあるからは立ちどまっていてはならぬ、行くなもどるなとあるからには歩いてもいけない、寝ても起きてもいけない、その上に知るも知らぬもと来るから、なにがなんだかさっぱり分からない、十兵衛すっかり弱ってしまった。

沢「ははは、どうやら降参らしいな」

十「なにをっ猪口才……いやこれは熟考の上で返答いたす」

沢「よし、とくと考えた上でわからぬときにはこの方に降参しろ」
十「だまれ、これしきのこと何条わからぬことやあらん、やあやあこの坊主を取り逃がさぬようにいたせ」
ぷいと一室にはいってしまった。
沢「まあこれでよい、……ああだれかまいれ、家来の者ちょっとまいれっ」
○「近藤氏、あのきちがい坊主が呼んでおりますぞ」
△「まあ行って見ようではござらぬか」
とそれへまいりまして、
△「なんじゃ坊主」
沢「わしは長の道中で大きにくたびれた、しばらく寝るから案内いたせ」
若殿より取り逃がしてはあいならぬという命令が下っておりますから、これ幸いと行燈部屋に連れてまいり、寝床をのべてやりますと、
沢「ああそれから眼がさめると食事をいたすから用意をしておけよ」
△「きちがい坊主はどのような物を食べるのじゃ」
沢「なんでもよい、魚肉であろうが、鳥けだものの肉であろうが、より好みはいたさぬぞ。刺身でも天婦羅でも、ビフテキ、コロッケでもけっこう。しかし原爆まぐろと、ビキニ寿司だけはご免だぞ」
まさかそんなことまでは申しません。
△「いやひどい生臭坊主だな」

沢「ときに十兵衛はあれからどうしているな」
△「若殿にはその方がわけもわからぬ歌をさし上げたものだから、しきりとお考えなされていらっしゃるわい」
沢「さようか、まず五日だな……、五日目の夕刻になれば十兵衛の狂気はなおるであろう」
といって、ゴロリ横になりました。これが品川東海寺の沢庵禅師と分かっていれば、家来共もこんな粗末な取り扱いはしないが、打ち見るところ、まるで乞食坊主のようだから、いたって粗末な待遇、もとよりさようなことをとやかくとおおせられる方ではない。家来の無礼も意にかけられず、ゆうゆうとお寝みになる。

将軍家の密命くだる

こちらは十兵衛三巌、かの和歌を前においてしきりと首をひねっております。
十「これはどうもわからん、たたずむなだな、行くなもどるなという……といって居すわってはならん、どうもいまいましいな」
これが朝のこと、やがて正午になって家来が膳部を運ぼうとすると、
十「こりゃ無礼者、さがれさがれ」
家「恐れ入ります、もはやお午刻とあいなりましたによって……」

十「食事などはどうでもよいわ。早くあちらへまいれっ」家「ははっ」

家来は叱り飛ばされて驚いてさがります。夜になっても食事もしなければ寝もうともしない。翌日の朝まで考えたがわからない、一日飲まず食わずで考えたのですから、そろそろ空腹を覚えてきました。

十「ああこりゃ誰ぞまいれ」

家「はっお召しになりましたか」

十「予は腹がすいてならん、食事の用意におよべ」家「かしこまりたてまつる」

十「膳などは面倒じゃ、にぎり飯にいたしてまいれ」家「はっ」

すぐとにぎり飯をこしらえて御前にさしあげると、十兵衛むしゃむしゃとにぎり飯を喰べながら、

十「たたずむな……」とやっております。

ちょうど三日半目、一睡もせず考えておりましたが、それでも解釈がつかない。さすがの十兵衛も、いまは気なえ心つかれて、すっかり元気がなくなった。

この心を労するということは、体を使うよりもなおさらに疲労を覚えるものでございます。こうなるとひごろの剛情我慢もおいおい抜けて、和歌を考える勇気もなく、ぼんやり気抜けのようになっておりますところへ、近習の者が、

○「はっ申し上げます」十「なんじゃ」

○「あまりさような歌をお考え遊ばしてばかりおられ、万一お体に障るようなことがあってはあいなりませぬ、しばらくの間お寝み遊ばしますよう」

十「さようか、どうも眠くてならぬ」

今まで寝ろといったって、容易に寝るものじゃなかったが、いいあんばいに家来の申し入れることをきき入れてくれたから大喜び、だだっ子を寝かしつけるよう、御意のかわらぬうちにと寝間へ案内いたします。ところが十兵衛、寝たわ寝たわ、一日半というものぐっすり寝こんだ。眼が覚めると、さも不思議そうな顔をして、

十「誰かまいれ」

家「はっ、お目ざめにござりまするか」

十「うむ……」

あたりをごらんになりながら、

十「お金之助か……全体ここはどこじゃ」

金「はっご領分、大和柾木坂のお館にござりまする」

十「なに柾木坂とな……、予はたしかに江戸おもて、木挽町の屋敷におったはずであるが、いつこれへまいった」

さては正気に復したまいしかと、金之助は大よろこび、

金「去年以来、若殿のご様子ただならず、なんとなくお鬱気のていにござりましたるにより、大殿さまのおおせによって、閑静なる当地へお立ちこえあいなりましたのでござりまする」

十「ああさようか、そういえば今日までは、なんとなく夢路をたどる心地であったが……してなにか服用でもいたして、かく正気づいたのか」

金「いえさようではござりませぬ、今日より五日まえ、当御陣屋表御門へ一人の雲水僧がまい

り、これこれしかじか……」

と三日半日なお解釈つかず、一日半の長眠に正気づいたことまでくわしく申し上げました。

十「その僧侶の与えた歌はなんと申す歌か」

金「さればでござります、……たたずむな行くなもどるな居すわるな、寝るな起きるな知るも知らぬも……という歌のように心得ます」

あまり十兵衛が、たたずむな行くなもどるな……とやったものだから、金之助までもすっかり覚えてしまいました。

十「うーむ難しい歌じゃのう、してその出家はいずれにおるか」

金「はっ、あちらにひかえ、若殿を恐れ気もなく、十兵衛十兵衛と呼び捨てにいたし、五日目の夕刻には正気づくなどと申しておりましたが、不思議にもその言葉通り、今日でちょうど五日目に相当いたします」

十「はてどなたであるか、なんにいたせ予の病気をなおしてくれた恩人、一度お目にかかってお礼申し上げなければあいならぬ、案内いたせ」

金「はっ」

よもや沢庵禅師とは知らず、家来の案内で禅師のおらるる座敷へとやってまいりました。

一目見るより十兵衛はっと驚いて、一間ばかりもこなたへ飛び下がって平伏いたし、

十「これはこれは、禅師にござりましたか、知らぬこととて失礼の段、お許し下しおかれまするよう」

この体に家来一同あっけに取られて、おやおやまた若殿の発狂がはじまり出したかな、今度は

前と打ってかわって、恐ろしい謙遜狂人だわいと思っていると、沢庵禅師はにっこり遊ばし、

沢「やあ十兵衛、久方ぶりじゃのう。どうじゃ正気にかえったか」

十「はっ、ただいま家来の者よりうけたまわりました。禅師のお骨折りをもって、元の十兵衛にかえりましてござりまする」

沢「それはなによりけっこうじゃ、その方の父、但馬守の心痛、見るに見かねてまいったのじゃ、この方も最初はあまり鼻息が荒いのに驚いたぞ、ははははは」

十「恐れ入ります……ともかくもかかるむさくるしきところへ、禅師をご案内申して……こりゃ一同の者……」

沢「いやいや十兵衛しかるなしかるな、わしが東海寺の沢庵とわかれば、まさかかような行燈部屋へ入れはいたさん、知らぬが仏じゃ、わしもこのほうがかえって肩が張らなくってよろしい」

家来はこれを聞いて二度びっくり、いずれも二間も下手へ飛びすさって、比目魚のように平伏しております。中には庭まで飛びおりて、庭土に面型をつけた者があるといいますが、これはうそでしょう。重役の面々も驚いて、もうあおくなっている者もございます。

○「あの坊主が東海寺の沢庵禅師とは驚いた」

△「道理で拙者は、最初見た時になんとなく高貴の方だと思った」

×「いやそういえば、玄関へ上がられたときに、頭のうえに金色の後光がさした」

○「さすがは禅師だ、ほかの者ではあの恐ろしいきちがいの前で、あれだけの芸当ができるものではない」

何も知らない門番どもまでが、

門「なに、沢庵、道理で押しが強いと思った」

などといろいろにうわさして、どうなることかとひたすら恐れ入っております。禅師は十兵衛の案内で別間へ移られます。十兵衛は改めて禅師へご挨拶申し上げ、

十「ええ禅師にうかがいますが、拙者へ賜わりましたる和歌はいかなる意味にござりまするや、十兵衛不肖にしてあいわかりかねますれば、なにとぞお教え下されとう存じます」

沢「はっははは、あれか、あれはわしにもわからんのじゃ、作った当のわしにわからぬものが、その方にはなおさらわかるはずがない、わざとわからぬようにしてその方の精神を十分つかれさせたから、一日半も眠れたのである。つまりその方の病気はただ剣術にこり、己れと己れの妙味に気がたったのがもとであるから、よく眠って精神が静まれば、正気にかえるであろうと……まあ医者なれば薬というところを、わしはあのわからぬ歌で間にあわせた、わからぬところに効能があったのじゃ、わかったか、はっははは」

十「へえ……」

十兵衛もあきれてしまった。

沢「しかし十兵衛、その方の剣はあっぱれなものじゃ、ただ血気にはやりやすい、禅味というものがないから、取りのぼせたのじゃ、つまり心の修行が足らぬからじゃぞ」

と武芸の奥義は剣禅の一致であることを、いろいろの故事引例をもってお教えになりましたから、さすがは後世名人の名を残すだけあって、十兵衛先生すぐに悟ってしまいました。禅師もその聡明には舌をまきながら、筆を取ってさらさらと認め、

沢「すべて剣客者はこの心得がかんじんじゃ」

といいながらお渡しになった。十兵衛見るとこれも一首の和歌で、

雨あられ雪や氷と隔つれど
落つれば同じ谷川の水

とあります。

十「ありがとう存じまする。しからば拙者も……」

とさっそく認めて禅師へ差しだしましたのは

勝つことをなににたとえん言の葉は
墨絵にかきし松風の音

禅師はこの歌をごらんなされて、ポンと膝をうち、

沢「十兵衛、これにてその方の剣術は妙味に入ったるぞ、もはや心配はない。その方は総領であるから、柳生の家を相続いたし、病気全快の上は江戸おもてへまかり越して、柳生の家名を立て、父但馬に安堵をさせねばならぬぞ」

十「ご教訓のほど十兵衛心魂に徹し、ありがたきしあわせに存じまする。しかし私に出府いたしまするもいかが、願わくは禅師よりよしなにおとりなし願いたく……」

沢「その儀は委細承知いたした、江戸おもてへ立ち帰り、但馬に右の由を申し入れるであろう」

ここに禅師は一両日滞在の上、品川東海寺をさしてお帰りになりました。風のごとく来って風のごとく去る、行雲流水のごとき沢庵禅師、やがて江戸おもてへ立ち帰りまするとすぐに但馬守殿を招いて、このたびの由をお物語りになりました。但馬守の喜びは一方ならず、家光公にもこの由を申し上げると、将軍家もお喜びあそばし、

家「十兵衛病気全快とあらばなにより、予に思う子細もあれば、忍びやかに江戸おもてへまかり越すよういたせ」

というご内命が下りました。そこで十兵衛、忍びやかに江戸おもてへご出府、一旦木挽町のお邸へ着いたし、夜中ひそかに家光公にお目通りおおせつけられました。このときに大久保彦左衛門、沢庵禅師お立ち会いの上将軍家から、初めて諸大名の様子をさぐるため、十兵衛に隠密をおおせつけられました。

世は徳川も三代とあいなり、天下も治まったようなものの、未だ諸国の大名の心も定まらず、いついかなることが起ころうも測られぬ世のありさま、よって諸国の大名の様子をさぐることが、徳川の天下を治める重大なキー・ポイント、実に十兵衛の役目はこの上もなく重大、十兵衛つつしんでお受けをいたし、上々の首尾にて御前を退下いたしましたが、又もやここに十兵衛の様子が変になってまいりました。

ある日、用人の大道寺平馬がごきげんうかがいにでまするとと、

十「平馬、今日は予がそちに、義経八艘飛びを見せてつかわそう、後学のために見学いたせ」

といったかと思うと、櫓十字にあやどり、槍をひっさげてお立ちいでになった、槍も稽古槍でなく真槍でございます。さてはと思うそのうちに、広間へ跳りでた十兵衛「やっ」と一声、グサッとばかりに畳に刺し通したかと思うと、「えいっ」と一畳の畳をポーンとはねあげ、この畳の下をかいくぐり、また先の畳をはねあげてはかいくぐる。それが早業でございますから、広間に敷いてありました数十畳の畳を、ぽんぽんぽんぽんぽん木の葉のごとくはねあげて、その下をかけまわります。平馬も、

平「若殿またご病気のご再発……」

と、父君但馬守の心中を推しはかって、いうべき言葉がございませぬ。但馬守も驚かれ、さっそく沢庵禅師のところへ、使をもってこの旨を知らせました。

禅師はこのことを聞かれ、心中さては十兵衛やり居るわい、とおぼしめされましたが、なに食わぬ顔で、

沢「これはなんとも心得がたきこと、柾木坂で別れる時には、もはや大丈夫だと思ったが……なにはともあれ、まいって様子を見てやろう」

と気軽にのこのこ出かけて来ましたが、これはなにも、十兵衛の病気再発ではございません。十兵衛将軍家より大役をおおせつかった節、沢庵禅師から、

「その方の病気がなおったということは、まだ多く知られていないから、その方は病中の体にて出立いたせよ」

とお言葉ぞえがあったので、十兵衛は委細心得、敵をあざむくはまず味方からとのたとえもあれば、わざと病気再発の体に見せかけたので、本心は正気でございます。

禅師、十兵衛の様子を一目みて、ははあこれはなかなかうまくやっているなとおぼしめされたが、色にもださず但馬守に対面の上、

沢「但馬」　但「はっ」

沢「成るほど十兵衛は、又もや再発した様子じゃのう」

但「さようにございまする」

沢「今度は本物になっておるぞ」

但「さようにございまするか、まことに恐れ入ったる次第なれど、なにとぞ禅師のお力をもって……」

沢「いやそれはとても難しい、以前のような風狂なれば、わしがすぐと治してつかわすが、あのように本心から狂発したものは、いかにわしでも及ばぬ。わしばかりではない。どのような名医名薬にても本復おぼつかないぞ」

但「はっ」

沢「まことに気の毒な次第であるが、あれに柳生の家をつがすことはできぬ。ことにあのような殺伐な乱心者、城中で万一のことあらば柳生家断絶のもと。しかし万事、十兵衛の心のままにいたしおけば、あるいはなおらぬものでもあるまい。よってこれからは、十兵衛がどこへまいろうが、いかなることをなそうが、そのままに打ち捨てておけ、さすればなおらぬでもないぞ」

但馬守ひざに両手をおき、頭をたれて、しばらく途方にくれておりましたが、

但「これも前世よりの約束ごと、やむを得ぬことにござりますれば、いかにも禅師のおおせにしたがい、十兵衛をもって世嗣ぎとすることはあきらめ、一生心のままにいたしてやるでござりましょう」沢「さようにいたすがよろしい」

信仰している禅師の言葉に、但馬守も十兵衛はすっぱりあきらめて、なにをしようとさらに干渉いたしません。

狂人を装って漫遊の旅

それと見て十兵衛、もう大丈夫と思ったから、ある日家来の者に、

十「予はこれから天竺へいってまいるぞ」

家来の者はかねて但馬守のおおせがあるから、決して十兵衛に逆らいません。

家「さようでござりまするか、ではお早くお帰りを待ちたてまつりまする」

十「うむ、せいぜい早く帰るつもりじゃが、つごうによれば四五年はかかろうも知れぬぞ」

家「さようなれば、十分お気をつけあそばしますよう」

十「よう申してくれた」

とぷいと屋敷をでられた。これが寛永三年十月十八日、お年二十四歳のときでございます。身ごしらえは二蓋笠の定紋ついたる、黒縮緬のお羽織という小意気なすがた、秘蔵の三池典太光世の大刀、小刀とてりっぱなもの、同じく秘蔵の鉄扇、一尺二寸京の吉則のきたえた十三本鯨骨、降ると見れば積もらぬ先に払えかし

雪には折れぬ青柳の枝

と剣術極意の歌の彫りこんである鉄扇を右手に持ち、別に遠くへ旅立ちのしたくもございませんが、実はこれが諸国漫遊の発端でございます。

木挽町から芝口へでて、まもなく品川の町へはいってきた。当時この地は東海道の親宿にあたって、まことに繁華雑沓をきわめました。俗に十月の小六月と申してぽかぽか暖かく、旅行でもするには、屈竟な時候、いま品川の宿はずれまで来ると、かたわらの茶屋の前に客待ちしていたかごや、

○「へえ旦那、もし旦那え、お大師まいりじゃございませんか。へえお供を願いてえもので」

十「なんだその方どもは」

○「ごらんの通りかごやで……雲助でございますが、お大師まいりなら、お乗りを願いてえんで」

十「なに、雲に乗れというか、予はのんちゃんでもなければ、悟空でもない、雲になどは乗らんぞ」

○「旦那ご冗談を……駕籠にお乗り願いてえんで」

十「ああさようか、駕籠なら望みとあれば乗ってつかわそう、持ってまいれ」

○「ありがとうございやす、おいあいぼう仕事だぜ」

△「ありがてえ、どうだ上下か」

○「どっちとも決めなければ、値段も聞かねえで、持って来いてえんだ、身ごしらえを見てもご大身だ」　△「ありがてえ」

○「もし旦那さま、いっそのこと上下にしてもらいとうございますが、どんなもので」

十「なに上下……予に上下でもきて乗れと申すか」

○「へへへへご冗談を、ついでにお帰りもお願えしてえというんでござえます」

十「なんでも、その方たちの望み通りにいたしてつかわす」
○「ありがとうございます、さあお乗りなすって」
△「兄弟、川崎までだな」
○「ちょっと待ちねえ、ええ旦那さまお大師まいりでございましょうな、それともっと遠方で……」十「遠方だ」
○「どこまでお供いたすのでございます」
十「天竺までまいるのじゃ」
○「へー天竺……兄弟いけねえ、旦那は天竺までだってよ」
△「なにをいっているんだい、てめえもよっぽどどじな野郎だ、旦那のお身ごしらえを拝見してもわかるじゃねえか、遠くて箱根とまではいかれねえ、いずれ鎌倉か江之島ご見物だ。てめえも永年かごかきを渡世にしていて、それが分からねえのか、旦那の天竺とおっしゃるなあご冗談、そこは客しょうばいのこちとら、へいようがす、どこのどこまでもお供申し上げると、ご愛嬌をふりまくもんだ」
○「なるほど、えー旦那江之島までご見物になりますなれば、どうでもお見のがしができねえ、それとも熱海のお湯治、お供願います」
十「ああよし」
○「熱海の湯治も悪かあございませんが、箱根はまた格別、ついでにお供願いたいもので」
十「ああよし」
○「箱根までいけば、もう一足のばして三州吉田、あすこの女郎衆は海道の名物、ついでにお

供願います」十「よし」
○「吉田までいったからには京大阪、それがすめば須磨明石、もう一足で安芸の宮島、船で渡って金毘羅さま、ついでに長崎、丸山までも……」
△「やいやいこの野郎、もういいかげんにしろ、油っ紙へ火がついたようにべらべらしゃべりあがるもんだから、旦那はなんでもよしの一点ばりだ、第一てめえ、長崎、丸山までいって、どうして帰るつもりだ」
十「いやそちたちはなかなか面白いやつじゃ、早くまいれ」
○「合点で、さあ兄弟いこうぜ」
と十兵衛先生をのせて、トットットとやってきたのは大森で、有名な山本の香々茶漬の入り口、一服一泉と、古風なしゃれた看板がさげてある。そこへとめたかごや、
○「旦那え」十「なんじゃ」
○「これが名代の山本で……お昼食でもなさいますなら駕籠をつけますが」
十「さようか、では一杯飲んでまいろう」
○「へえかしこまりました、おう姐さんお客さんだぜ」
女「いらっしゃいまし、なにを差し上げます」
十「なんでもいいから酒を持ってまいれ」
女「かしこまりました」
○「ええ旦那さまえ、わっちどもも一杯いただきます」十「さようかいくらでも飲め」
○「ありがとうございます……よう兄弟、今日は朝から日がいいじゃあねえか、ちょいと出て

一刻ほどの間に、二貫ばかりもうかったと思やあ、又こんないい仕事を引っかけるなんて……福徳の三年目てなこのことだろう」

△「違えねえ、しかしここであまり飲って酔いつぶれでもしちゃ、これから先のお供がおぼつかねえ、いずれ島につきあ、うんと飲めるに違えねえから、いいかげんにきりあげて、出かけるとしようじゃねえか」

○「合点だ、旦那さま、もうそろそろまいりましょうか」

十「その方どものしたくはよいか」

○「へえ、もうたくさんちょうだいいたしました」

十「ではまいろう」

○「えー旦那、この通り女中が書き付けを持ってまいっておりますから、お支払いを願います」

十「なんの書き付けじゃ」

○「へえ、ただいま旦那さまとわっちどもが飲みました勘定で」

十「あさようか、勘定ならその方、よきにはからっておけ」

○「へえ……お立て替えいたしておきますので」

十「さようじゃ」

○「兄弟、旦那が立て替えておけとおっしゃるがどうしよう」

△「じゃあお立て替え申しておきねえな、無けりあともかく、有るからにゃ出しておくがいい。旦那の持っていらっしゃるのは小判ばかりだから、いま一貫だしておきゃあ、後で一貫五百にも、二貫にもしてもどして下さらあな、出しておきねえ」

○「じゃ旦那、わっちどもでお立て替え申しておきます」

山本の支払いはかごやが立て替えて、あれから六郷の渡船、渡船賃もかごやがだしました。間もなく川崎の宿へとかかってまいりました。

十「かごや」○「へえ」

十「先刻は香々茶漬けでやったから、なんとなく腹ごたえがない、また酔いもさめてまいったので、いま一応飲みなおしたく思うぞ」○「へえ」

十「この宿で一番よい茶屋はなんと申すか」

○「へえそれはもう万年屋でござえます」

十「しからばそれへ案内いたせ、その方らと一杯飲んでまいろう」

○「ありがとうござえます、さあ兄弟、万年屋だ」

と万年屋へはいり、ここで又もや酒肴をあつらえて、かごや相手にぐびぐびはじめました。かごやのほうではこういう客をつかまえていくらでも使わせるのが腕――なに銭金にちびちびする旦那じゃない、ふところには十分持っていなさるに違いないと思うから、さんざん飲み食いして、

○「えー旦那さま、もうそろそろ出かけるといたしましょうか」十「うむまいろうか」

○「ついてはお勘定でございますが……」

十「ああさようか、その方よきにはからっておけ」

○「おい兄弟、またよきにはからっておけと来た」

△「どうせ後でまとめて下さるんだ、てめえまだ持ってるじゃあねえか、出しておけ」

またもかごやに立て替えさせて、万年屋を立ちいでました。それから立て場の小休みもかごやの

立て替え、今しも生麦の松原へさしかかって来ると、

△「旦那え」　十「なんだ」

△「どうでございます、今晩は神奈川へお泊まりなさいますか、それとも金沢までやっつけましょうか」

十「うむ、いずれでもよいから、きさまたちの好いたところへかついでいって、うまい物をたくさん食わせてくれ」

△「江之島へご見物に、おいでなさるんじゃございませんのですかえ」

十「別にいくには及ばん、かように海を眺めながら、駕籠にゆられているのは、よい心地じゃ、なんなら後へもどってもよいぞ」

△「へえ……おい相棒、ちょっと駕籠をおろしてくれ、どうもおかしいぜ」

○「なにがおかしい」

△「だっておらあさっきからいろいろ考えたが、一体こんな殿さまってあるもんじゃあねえ、山本でも立て替えろ、万年屋だってそうだ、そのほかどこでもここでも立て替えろ立て替えろで、いざもらおうというときになって、一文もねえ、たってもらいたくば延べ金をやろうなんて、すらり抜かれちゃあ、そのときになってなんといったって、追つくわけのものじゃねえ、いまもらわなくったってもいいから、ただ気休めに旦那が全くお宝を持っていらっしゃるのなら、一度拝見させてもらおうじゃねえか」

○「そういやあ俺もなんだか変に思っていたんだ、兄きひとつ当たって見てくんねえ」

△「ええ旦那さま、まことにすみませんけれども、棒組みがわずかばかりのお立て替えに、気をもんでおりますんで、いま別にいただかなくっていいのでございますが、旦那の持っていらっしゃるお金を、一つ拝見させていただきたいもんで」

十「ああさようか」

△「どうか拝見を」

十「わしは懐中には一文も持たぬぞ、さよう心得ろ」

△「えっ、相棒やっぱり持たねえんだって」

○「持たねえんだと……べらぼうめ、そんなばかばかしいことが、あるもんじゃあねえ、旦那ご冗談をおっしゃらねえで、一つ拝見させて……」

十「いや持っておらぬからおらぬと申すのじゃ、先にきさまたちが、駕籠に乗ってくれ、天竺までも供をすると申すから、余儀なく乗ってつかわすと、ここで酒を飲め、飲みたいならあそこがいいと案内してくれるから、世には親切なやつもあるものじゃ、なにかの心願あって、通行の者に善根をほどこすのであるかと存じていた。ともかく、天竺まで供を申しつけるから、さよう心得ろ」

△「冗談じゃねえ、そんな心得をくらっちゃたまるもんじゃねえ、どこの世界を探したって、見知らねえ者をただ駕籠に乗せて、ただ酒を飲ますやつがあるもんか、じゃあ旦那こういたしましょう。お持ち合わせがなけりゃあ、これからお屋敷へもどりまして、ちょうだいいたすことといたしましょう、別に余計にちょうだいしようたあ申しません。駕籠賃と、わっちらがお立て替え申しましただけとをいただきますれば、それでいいのでございますから、ねえ旦那、そうしましょう」

十「もどると申すか。もどってもよいが、それではきさまたちの首が飛んでしまうぞ」
△「えっ……」

知恵伊豆に餞別の無心

△「旦那、ご冗談も休み休みやって下せえ、駕籠にのせてここまでかついできて、途中じゃさんざっぱら酒を飲まれたあげく、お屋敷へ帰ると首をはねられるなんて、そんなひどい話があるもんじゃございません」
十「いやところが確かにはねられるのじゃ、予はこう見えても、高禄をちょうだいいたす天下御直参のせがれだ」
△「へえへえそれはわっちどもも、お身ごしらえのぐあいから、きっとそれに違いないと存じておりました」
十「ところが悲しいかな、予は次男に生まれたゆえ、おなじ直参へ養子にまいった」
△「へえへえ」
十「最初は相続人がないからと、先方から望まれてまいったのじゃが、まもなく養家へ一人の男子が出生いたした」△「へえ」
十「すると、他人の予に相続させともないところから、養父母心をあわせて、予をいろいろと苛めたて、出ていけがしのあしらい、予も一旦その家にまいった以上は、もう実家へも帰れん、四五年このかたずいぶんと苦労をいたしたが、あまりといえば情けない養父母の仕うち、もはや腹にすえかねたるにより、まず養父を斬って捨てた」△「へえ」
十「養母が怒って、おのれ不孝者と斬りこんできた太刀をたたき落とし、組み伏せて縛りあげ、庭の泉水のなかへ投げこんだ」
△「どうもひどい乱暴をなさいましたなあ」
十「すると家来どもがそれを見て、予を取りおさえんといたすから、手あたり次第にたたっ斬って、屋敷へ火をかけた」
△「えっ……」
十「さよういたせば、もう江戸にもおられんによって、これから天竺へでも渡り、釈迦をたのんでしばらく、かくまってもらおうと思うのだ。だからきさまたちが予を連れて屋敷へ帰ったら、屋敷へ火をつけたのは、このかごや両名と申すぞ、さすればきさまたちは首をはねられるだろう」
△「いやあ相棒、とんだ者を乗せてしまった。こりゃあどうやらキ印だぜ」
○「ええっ……キ印を駕籠へ乗せて、さんざっぱら銭を使わせられるなんて、たまに目がでたと思や、こんなひどい目にあって……どうしよう兄弟」
△「どうしようっていったって、相手がキ印だもの、どうにもなりゃあしねえ。もし旦那、そんなことをおっしゃらねえで、せめてお立て替え申しましただけでも、お返し下さるというわけにゃまいりますめえか」
十「さようか、ではともかく、天竺まで供をいたせ、釈迦に申せばあいつ乞食坊主だが、小金

をためておるということだから、借りて返してつかわそう」

△「冗談じゃございませんよ、お釈迦さまに金を借りるなんて……ああ困ったな」

かごやふたりは泣きだしそうになっておりますところへ、向こうから、

×「下あーに、下あーに」

とりっぱなお行列。

△「相棒お行列がきた。このうえ無礼でもあって叱られちゃ、泣きつらに蜂だ、駕籠をこっちへ寄せよう」

駕籠を往来のかたわきに寄せ、かごやふたりは神妙に道ばたにひかえております。お行列はしずしずと練りこんでまいりました。これぞ三州吉田の城主、松平伊豆守信綱公、今日将軍の御代参おおせつけられ、鎌倉八幡宮へご参拝のお帰りみちでございます。伊豆守殿馬上にて、いま十兵衛の駕籠の前を通りすぎようとすると、駕籠の中から十兵衛はばかりもなく、

十「豆州豆州」

と大音に呼びとめた。ご近習の武士大いに驚き、ばらばらっとご馬前をかためて身がまえに及ぶ。かごやは腰を抜かさんばかりに仰天して、

○「だ、旦那、そ、そんな事をおっしゃっちゃいけません」

十「いや大事ない、捨ておけ捨ておけ。これこれ豆州、それがしじゃ十兵衛じゃ」

伊豆守ははっと気がついて、

伊「これはこれは十兵衛殿、その後うち絶えて面会もいたさなかったが、病気と承知いたしておった、もはや全快なされしか。して又これからいずれへおいでにあいなるのじゃ」

十「いや、これから天竺へ渡って、釈迦如来に対面いたし、当分、かの地であそぼうと存ずる。さればその許ともしばらくはあわれまい、ずいぶんお達者でお暮らしなされい」

この伊豆守は三代将軍家光公が、まだ竹千代とおおせられた当時、大河内長四郎といって十兵衛先生などと一緒に、お相手おおせつけられた一人でございます。父は大河内金兵衛と申して徳川家の忠臣、そのせがれの長四郎が今では、三州吉田の城主松平伊豆守。

伊「さようか、聞くところ天竺は熱国で、道中遠路なれば貴殿もせいぜいお体を大切にいたされい」

十「よくおおせくだされた、ついてはこれこれにてかごやがすこぶる当惑いたしておるが、無一文のこととてつかわすわけにあいならん。はなはだお気の毒じゃが、昔なじみにご餞別にあずかりたい」

餞別の催促なんてものは、まず十兵衛ぐらいでございましょう。伊豆守は笑いながら、近習の者になにかおおせつけられて、

伊「しからば十兵衛殿おわかれ申す」

と、トットットッと馬を進められた。するとその行列の中より一人のりっぱなる武士、十兵衛の前に来って大地に両手をつき、

武「はって、てまえことは松平伊豆守家来、柴村藤左衛門と申すものにござりまする、このたび先生ご道中の由、これは主人よりご餞別として、差しあげよと申しつけられました。はなはだ失礼にござりますけれども、ご入用のうちへお加えくださりますれば、まことにありがたきしあわせに存じたてまつりまする」

さすが大名の餞別、大枚百両を紫縮緬の袱紗にのせて差しだしました。

十「ああさようか、莫大のお心づけにあずかり、十兵衛満足いたした。そちより豆州へよろしく申してくれよ」

藤「委細かしこまりたてまつる。なおほかにご用これありますれば、お心おきなくおおせつけ下されたく……」

十「ご親切まことにかたじけない、別段ほかに頼む用事もない、金子がなくなれば又、拝借にまいるかも知れぬ」

藤「何時なりともご遠慮なく、おおせつけ下されまするよう」

十「まずこれだけあれば、当分は差しつかえあるまい、帰国の節は釈迦を連れ、唐へまいって孔明をたずね、玄徳に一本の教導をいたしてつかわすつもりであるから、帰国はすこし遅れるが、そのときには貴公にも、多分の礼をいたすぞ」

藤左衛門返事に窮して、

藤「ありがたく存じたてまつります」

と、そうそう逃げだしてしまった。

十「こりゃかごや」 ○「うへへっ……」

十「なにをいたしておるか、少しばかり金子がはいったぞ、喜べ喜べ、又これから先々で行列にあったら、予が無心をいってやるから、早くいずれへか案内いたせ、いま一度飲み直しをいたそう、早くまいれっ」

△「相棒、いまのうちに逃げだそうか」

○「どうして」

△「どうしてって、旦那はよほど身分のあるキ印だ。伊豆守さまをつかまえて豆州なんて、おらああのときはひやりとして、寿命を三年ばかりはちぢめた」

○「ちげえねえ」

△「いくらキ印だって、あれくらいにご身分のある方をつかまえて、ご無礼なことを申し上げたのだから、そばへ寄せつけておいて、無礼打ちだと、すっぱりと殺るご量見じゃなかろうかと思うんだ。だから今のうちに逃げだそうじゃねえか」

○「そうかも知れない、しかしおらあ立てかえた銭に、未練が残って逃げられねえ」

△「そんなことをいって、おめえ、首をはねられたらどうする」

○「銭せえありゃすげ直さあ」

煙管と間違えております。

十「これこれまいれと申すに」○「へえへえ」

十「さように恐れるには及ばぬ、それいま豆州をつかまえて百両取ってやった。さあいままで立てかえてくれた代わりに、これを取っておくがよい」

と封を切らず百両をそれへ投げだすと、かごやは目をまるくして、

○「いえ、そんなにたくさんいただいてはあいすみません、これは旦那さまのほうへおしまいなすって下せえ、あっしどもはただ、お立て替え申しましただけ、ちょうだいしますればよろしいので」

十「はっははは、正直なやつだ。では宿へまいってから酒代を十分取らするであろう」

とまたも駕籠に打ち乗り、その夜は神奈川の宿に一泊、なおあくる日も駕籠に召されて鎌倉へおいでになり、諸方の見物をすませ、それから江之島へお越しになりました。ここでは四五日逗留しているうちに、かごや両名へは多分の手当を取らせた上、

十「もはや駕籠も倦いたから、その方らは立ち帰れ」

とかごやを帰し、なお二日ばかり逗留いたしておりましたが、やがてここを出立の節、どこへ土産にするつもりか、名物貝細工を買いもとめ、これをぶらぶら手にさげながらやってまいりました。

ところが最初のうちこそ、さほどにも思わなかったが、だんだんと歩くにつれ、これが荷になってならない、といって捨てて行くのも惜しいことだと、右に持ちかえたり左へ持ちなおしたりして、ようやく藤沢の宿までまいりました。あれから四谷という間の宿、右へまがると、雨降山大山寺石尊への道、左へ取るのが東海道の往還でございます。

もう南郷の松並木まで来ると、手にしびれを覚えてきて、十兵衛先生も大きに持てあましたから、まあひとやすみしていこうと、かたわらにある大石に腰をおろして休みながら、往来をながめておりますと、藤沢のほうから一人の若侍、年齢は十八九にもなりましょうか、旅じたくに剣術の道具をかついでいる様子は、武術修行にまわる者らしゅうございます。いま足早に十兵衛先生の前を通り抜けようとしたから、

十「ああこれ侍待て」

若侍振りかえって見ると、松の木のかげに片眼で小兵な武士が休んでいる。

若「お呼びとめになったのは、貴殿でござるか」

十「いかにも拙者が呼びとめたのじゃ」
若「してなにか御用事でもござるか」
十「うむ、実はこの品じゃ、せっかく買いもとめてこれまで持参したが、どうも重くてならん。といって捨てるも惜しく、いかがいたそうかと思案中であったところへ、その方がまいったこそ幸い、この品を持たせてつかわすぞ」
彼の若侍は、驚いた様子であったが、べつだん立腹の様子もなく、
若「せっかくのおおせではございますれど、拙者はちとさきを急ぐ身でござれば、ご免こうむりたい」
十「その方が急ぐ身でも、この方は急がぬ。許す、この品を持って供をいたせ」
若「平生なればそれしきの品、なにほどのこともござらねば、持参せぬものでもござらぬが、今日はなんとしても箱根の関までまいり、少したずねる方が、もはや関所をお越しなされたか、それともまだ越されぬか、役人へたずねたいと心得ますれば、せっかくながらその儀はご免こうむりたい、お先へ失礼つかまつる」
いい置いてすたすた彼方へいく様子に、十兵衛は少し声を荒くして、
十「予がかくまでに申すを、たって先へまいるとは、どうも無礼なやつがあればあるものだ」
と、自分の無礼はたなにあげている。どうにもしかたがないという体で、例の貝細工をぶらさげ、若侍の後からぶらりぶらりついていくと、折しも行く手にあたって三名の浪人体の武士、なにごとか高声に話しながら、大道せましと大手を振ってこっちへやってまいります。

義によって助太刀いたす

若侍はさきを急ぐため、道のかたわらへ避けて駈けぬけようとすると、端にいた一人の武士が、天秤棒のような刀をぐいと横へひねったから、思わずガッチリ鐺があたる。
浪「待たっしゃい」
若「はい、これは失礼を……」
浪「失礼をじゃない、きさまはなんだ、この広い往来なかを、わざっと拙者に向かって鞘あてに及ぶとは、はなはだふらちなやつだ。なんの遺恨あって鐺をあてた。われらはきさまのような青二才に遺恨を受けるおぼえはないぞ、許すことまかりならん、さあ尋常の勝負におよべっ」
とすでに一刀の柄に手をかけた。すると連れのふたりも左右から、
甲「松島氏いかがいたした」
松「いや御両所、かくかくしかじかでござる」
甲「ふむ、それはけしからぬことをするやつだ。貴公が許すといっても、朋友のわれわれが許しておかれぬ、武士らしく真剣勝負なされ、われわれにおいても、日ごろの厚誼をもって助太刀いたす……おい若侍、貴公も両刀たばさむからは、武士の鞘あてが、容易ならんことだぐらいは、心得ておろう、さあ尋常の勝負をいたせ」

どこで飲んできたのか、熟柿くさい息を、ブーッと吹きかける。若侍は当惑げに、

若「あいやお待ち下され、拙者はべつだん宿意があるの、遺恨があるのと申す次第ではござらぬ。先を急ぐため、つまり出合い頭のあやまち、幾重にもお詫びをいたしますれば、どうかごかんべんにあずかりとう存じます」

松「いいやならん、なんと申してもかんべんまかりならん。大体その方から喧嘩を売りながら、今になって幾重にも謝るなどとは、われわれをどこまでも、愚弄いたすやつ、早く真剣勝負におよべ」

若「それは誠に迷惑、現に拙者は見らるる通り、武芸修行中の者、真剣勝負などとは、なかなかもって思いも寄らぬこと、どうかごかんべんにあずかりたい」

松「一旦ならぬと申したからは、幾度申しても同じことだ、さあ支度いたせ」

と三人の浪人はや支度をいたし、今にも刀を引き抜かんありさま。ところが人通りの多い、東海道の往還でございますから、見る見る黒山のような人だかり。

○「なんだなんだ」　△「武士同士の喧嘩だそうで」

○「えっそいつあおもしろかろう」

そこへ江戸っ子らしいのが前へでて、

×「いやー驚いた、兄弟またあの武士がやってやがる」

△「もしあなたごぞんじですかあの武士を……」

×「ええ今ね、この前の茶屋でわっちらと同じように中食をやってたんで、するとあいつらあ三人、さんざん飲み食いして、さあ勘定となると、なんだかんだって言いがかりをつけて、あげくのはてにゃあ長えやつを引っこ抜いて、暴れだしゃあがった」

△「へえ乱暴な武士もあったもんですな」

×「茶屋の者が驚いて逃げだしたあとで、いろいろな御託を並べ立てて、一文もおかねえで出ていきゃあがったんだ。又こんな所へきて、あの若えお侍に文句をつけだしやあがった」

わいわい騒いでおります。ところへ十兵衛先生、例の貝細工をぶらりぶらりさげてそれへまいり、

十「なんだなんだ、こりゃ町人どけどけ」

○「いけねえ、ここはもう買い切りだ」

十「だまれっ」

○「へーどうぞお通りなすって……」

十兵衛先生前へでて見ると、今しも、決闘がはじまろうという様子でございます。このとき十兵衛の横にいた一人の老人、

老「もし旦那さま」　十「なんじゃ」

老「私どもは町人のことでげすから、なにもわかりませんが、このままうっちゃっておくと今に斬り合いがはじまりましょう」　十「うむ」

老「斬り合いとなれば、片方は三人で強そうな者ばかり、片方はあの若いお武家一人でございますから、斬り殺されてしまいましょう、旦那はお武士で、相身たがいということがございますから、一つ御仲裁あそばしてはいかがでございますか」

十「いやこりゃ仲裁してはおもしろくない、武士の鞘当てというのだから、決闘をするのがあた

りまえだ、こいつはおもしろいぞ、こりゃ双方の武士しっかりやれ、身共がここで検分してやるぞ。あー見物の者、だれか煙草の火を貸してくれ」

と松の根方へどっかり腰を下ろし、スパリスパリ煙草をふかしながら見物しております。見物人は、

□「いやどうもひどい武士が来やあがった、これじゃ喧嘩の火の手があがる一方だ、若いのしっかりやれっ」

見物人までが声援をする。三名の浪人はたちまち刀の下げ緒をはずして襷となし、手ぬぐいをもって後ろ鉢巻きをしめ、

松「なにをぐずぐずしているのだ、さあ早く支度に及べっ」

刀の鯉口くつろげ、じりじりと詰めよります。若武士はどこまでもおとなしく、静かに荷物をそれへおろして、大地に両手をつき、

若「なんとおおせられましても、真剣勝負の儀はおゆるし願いとうござりまする。それにいらっしゃる御両所、なにとぞ武士の誼をもって、ご朋友をおなだめくだされ、ご仲裁くだしおかれますよう、ひとえに頼みあげまする」

甲「ふむしからばどうあっても、真剣勝負は出来ないと申すのか」

若「はいそればかりは、ごかんべんにあずかりとう存じます」

甲「はっははは、いかに若年者とは申せかりにも両刀をよこたえ、剣術の道具をかついで諸国をめぐる身をもって、真剣勝負が出来ぬとは、いやはや笑うにたえたる卑怯者。松島氏、野上氏、かような柔弱者を相手にいたしたとあっては、われわれの恥辱だ、ゆるしてやらっしゃい」

松「それまでに詫びるなら、ゆるしてやらぬものでもないが、ただはゆるされん」

乙「いやそこは拙者が万々心得ておる、のう若者」若「はい」

乙「その方がいろいろと頼むによって、拙者がとりなしてつかわすが、ついては先方へ趣意を立てんければあいなるまい」

若「はい、してその趣意とおおせられまするは、いかように致しましたればよろしいので……」

金「そうだな、打ちわって話をするが、われわれは九州のさる大名の浪人で、拙者は大森金八、あれにござるは松島伝蔵、野上九郎兵衛と申し、貴公と同じく諸国武術修行に歩いている。拙者は別として、あのお二人は力量武術ともにすぐれ、これまで各所に道場をたずね、試合いたしたること数限りないが、未だ一人としてお二人に勝ったことがない。さすれば今ここで真剣の立ち合いでもしようものなら、貴公の首はただちに体を離れること申すまでもない。それを扱おうというのだから、いのちを一つ拾うものだと思って、われわれ三名へ、貴公持ち合わせの金子ぜんぶ渡されい。うむ首一つが、懐中の所持金で買えるとはありがたいことだ。それがいやなら真剣勝負だがどうじゃな……」

若「だまれっ」金「な、なにっ……」

若「さてはなんじらは、武士の意地ずく真剣の勝負と見せかけて、その実は通行のものに喧嘩を売りかけ、押し借り強談せん企みだな、一旦は詫びたれども、さよううけたまわる上は、もうこの方において容赦まかりならん、望みにまかせて、真剣の勝負をいたしてつかわそう、いで尋常の勝負さっしゃい」

というより早く、荷物の中より取り出だしたる襷鉢巻き、草鞋の紐を締めなおし、腰をひねっ

て覚えの一刀、すらり鞘払いにおよんだ。このありさまに見物は、一斉にわーっと鬨の声をあげた。十兵衛先生すかずかとそれへ進みいで、

十「やぁ若者、先刻よりの様子はあれにあって承知いたした。押し借り強談と見て真剣勝負をいたそうとは、あっぱれ見あげたふるまいじゃ、義によって汝に助太刀いたしてつかわすから、安心いたせ」

若「いずれの方かは存じませぬが、お言葉ぞえありがたく存じまする」

十「助太刀いたすと申しても今は出ぬぞ、汝が不幸にして三名のやつらの手に討たれたる節は、この方がまかり出で、きっと敵を討ってつかわすゆえ、汝もさよう心得て、かならず力にするな。拙者は汝の眼のくばりといい、体のようすといい、決して相手のやつらに、おくれを取る者にあらずと見て取った。しかし慢ずる心を起こすなよ」

若「はっ、そのご一言こそそれがしのためには千人力でございまする……。さあおのおの用意がよくば、いずれからなりとも斬りこまっしゃい」

とぴたり中段につけた。十兵衛先生、角力の行司でもいたすような気になって、京の吉則一尺二寸の鉄扇を握りしめ、八方へ眼をくばっております。

すると、いままでいばり散らしていた三名の浪人、相手の風向きが変わってきて、おまけに気味のわるい武士が、見物の中よりひょっくり現われ、励みをかける様子だから、少々あてがはずれてきたという体で、互に眼くばせをして、尻ごみをすると見るや、たちまち見物人を突きのけて、そのまま後をも見ずに、雲を霞と逃げてしまいました。見物人はあっけに取られて見ております。

天竺へ供をいたせ

あとに彼の若侍はおもむろに鉢巻きを取り、襷をはずし身なりをととのえて、十兵衛先生の前に両手をつき、

若「先刻、御意得ましたが、先を急ぐのあまりおおせにも従い申さず、まことに失礼いたしました。そのお怒りもなく、ただいまはありがたきお言葉ぞえを下しおかれ、千万御礼申し上げます」

十「うむその方は当年何歳にあいなるか」

若「はっ十八歳にござります」

十「うむ十八歳とか、花ならば蕾じゃな、咲くところを見たい」

若「恐れ入ります」

十「若年に似ずあっぱれなる心がけ、予はたのもしく思うにより、今より身どもの供を申しつける。この貝細工を持てい」

十兵衛先生もこの貝細工の土産物は、よほど持てあましたものとあい見えます。

若「おおせにはござりまするが、先刻も申し上げました通り、私は少々大望あって、さるご仁を尋ねまする身にござりますれば、お供の儀ばかりは平にお断り申し上げます」

十「さようか、しからばその方はだれを尋ねたいと申すのじゃ」
若「おそれおおくも当将軍家へ剣術のご指南を申し上ぐる、柳生但馬守殿の御嫡男、十兵衛三巌先生をあいたずねまする」
十「ははあ、これは奇体なこともあるものじゃ、予は尋ねられる十兵衛じゃぞ」
若「ええっ……あなたさまが柳生大先生……ははっ」
若侍は一間ばかりもこなたへ飛びさがり、
若「知らぬこととて存外のご無礼をいたしました、なにとぞごかんべんのほどを願いあげます」
十「この方が柳生十兵衛とあいわかれば供をいたすか」
若「はっ願うてもなきありがたきしあわせに存じまする、実は私こと……」
といおうとするのを十兵衛先生耳にもかけず
十「供をするとあればこの貝細工を持て、その方には二度まで断られた、三度目は持たさずにはおかぬぞ」
若「恐れ入りました」
十「こわすなよ、これは天竺へ土産にいたすのだから……さあいこういこう、こりゃこりゃ町人ども、さように往来止めをいたしては、通行の妨げじゃ。真剣試合はお流れになったのじゃ、さあどけどけ」
見物人をかきわけて四五町も来ると、
十「ああ若いの」若「はい」十「くたびれたから一服してまいろう」若「はっ」
十兵衛先生がかたわらの松の根方へ腰をおろされると、若侍は一間ばかりもこっちにひかえて

おります。
十「これよ」若「はっ」
十「近うまいれ」若「はっ」
十「苦しゅうない、近うまいれ」若「はっ」
十「先刻はあまたの見物人がいまだ残っておったによって、くわしゅうはたずねずにまいったが、その方はいかなればこの方をたずね歩いていたのじゃ、子細を話して見よ。次第によっては力になってつかわさんものでもないぞ。包まずに物語りいたせ、先刻その方が、三名の浪士どもに喧嘩を売りかけられ、抜刀に及んだ節、刀のねたばまでも合わしてあり、ことさらに草鞋の紐に心をつけて、勝負をいたそうとしたは、尋常一様の者ではないと見て取った、察するにその方は主人か親の仇を討とうとする者に相違あるまいがのう。どうじゃ」
若「はっご眼力のほど恐れ入りましてござりまする、今はなにをか包み隠しましょう。拙者こと、奥州津軽弘前の城主、津軽越中守家来にて、三百石ちょうだいいたしおりました、中山新左衛門のせがれ、同苗新三郎と申す者にござりまするが、父はことのほか囲碁を好みまして、暇さえあれば家中の者と、烏鷺を戦わせておりましたあげくの果ては、ついに身を滅ぼすに至りました」
とほろり涙を落としました。
十「うむ、それは又いかがしたのじゃ」
新「はい、同藩中に東軍流の剣術師範をいたす赤松典膳と申す者がござりましたが、父とは相碁で、今年五月五日端午の節句の夜も、相変わらず父と勝負をあらそいおりますうち、いささか

のことがもととなって、父は典膳のために非業の最期をとげ、典膳はその夜のうちにいずれかへ逐電いたしました。

それゆえ、家は断絶とあいなりましたが、幸いと重役の方々のとりなしにて、仇討ち免状を賜わりましたるにより、母を親類へあずけおき、それがし一人にて父の仇を討ち、中山の家を再興いたさんと、本国を出立いたしました。

しかし典膳はかりそめにも一流の指南をするだけあって、家中屈をならぶる者なき腕前、また力量も衆にすぐれておりますれば、尋常に勝負いたすにおいては、返り討ちになるは必定、いかに致せばよろしからんと心痛いたしおりましたが、途中の宿に泊まり合わせましたる、さる武芸者の言葉に、当時剣術においては、柳生十兵衛先生の右にいずるものは、あるまいとの事でござりました。

しかしながら柳生十兵衛先生と申せば、お大名の若殿、微賤のわれわれがたとえ入門を願うとても、よもやおき入れはあるまいと、一時は落胆いたしましたが、また考え直して、いかなる賤しい業をとろうとも厭いはない、それがため、もし幸いに先生のお膝下にあって、一年に一手ずつにも学び得なば、かならず仇の討てぬこともあるまいと存じ、江戸おもてのお屋敷へまいってうかがいますれば、先生には東海道筋へご出立と承知いたし、すぐとお後を慕いまいらせたる次第、なにとぞ拙者の心中不憫とおぼしめされて、ご教授くだしおかれなば、これに過ぎたる喜びはござりませぬ」

と涙片手に物語りながら頼み入ります。

十「ふむさようか、義を見てせざるは勇なしとやら、旅中といえども教えつかわすであろう。しかしながらさようの大望ある身が、かりそめにも真剣勝負いたすなどというは不心得千万、敵を討つまでは、万金にも代えがたき大切な体ではないか、今後はかならずともさような心を起こすではないぞ」新「恐れ入りました」

十「忍辱の念を片時たりとも忘却いたしてはならぬ、さるかわり今日にも敵典膳とやらにめぐり合いなば、きっとこの方が助勢して敵を討たせつかわすから安堵いたせ」

新「ありがとう存じます、ご教訓のほどは肝に銘じて、必ずあいまもるでござりましょう」

十「さあそう事がきまればそろそろ出かけよう」新「お供つかまつります」

独眼流片目はずしの正眼

その夜は小田原に一泊、翌日箱根山へとさしかかってまいりました。上下八里、海道第一の難所もこえ、やってきたのが尾州鳴海の宿、ちょうど寛永四年正月十二日でございます。ご承知のこの鳴海の宿の入口、左側に海道の名将といわれた今川治部大輔義元の墓がございます。当今ではまわりに土堤をこしらえ墓らしくなっておりますが、そのころは石塔一基、草原のなかに建っているばかりでございました。主従それへまいって、心ばかりの手向けをなし、

十「新三郎、義元は世にあるときは、駿、遠、参、三ヵ国の領主として、威勢とぶ鳥も落とさんばかりの勇将であったが、わずかの油断のため、織田信長の家来、服部小平太の槍さきに命をお

とし、今ではかかる見苦しい墓石が残るのみとは、英雄の末路またあわれなものではないか」

新「さようでございます」

十「かくいう十兵衛がその墓前にまいるというも、またなにかの因縁、一服してまいろう」

と主従かたわらの松の切り株に腰うちかけておりますところへ、鳴海の宿のほうよりして、テクテクやってまいりましたる一人の旅僧、鼠木綿の衣類に、白の手甲脚半草鞋ばき、腰には一本の木刀を帯し、右の腰には一升も入ろうかと思われる瓢箪をぶらさげ、両人に会釈いたして義元の墓の前にまいり、腰の瓢箪を取りはずして、ふところから手ぬぐいにくるんだ湯呑みを取りだし、ゴボゴボついで義元の墓石の頭からザーザーッと打ちかけ、その前にうずくまってしきりと回向をいたしておりましたが、やがてその身もどっかりとあぐらをかき、さも愉快げに酒を飲みはじめました。十兵衛先生、新三郎と顔を見合わせてあきれておりますと、彼の旅僧は、すっくり立って十兵衛先生の前へ来り、

僧「あいやそれなるお武家、貴公もどうやら義元の墓にご参詣とあい見えますが、かく落ちあったるもなにかのご縁、幸いに持参いたした粗酒一盞献上いたしたい、お受けくださるか」

不思議な坊主に盃をさされた十兵衛先生、にっこりとして、

十「これはこれはいずれの方かは存ぜんが、せっかくなれば馳走にあいなる」

と盃をお受けになって、続けざまに三杯おあがりになり、

十「ありがたくちょうだいいたした。ときに御坊はよほどの大酒家と見えるのう」

僧「わしか、わしは毎日この瓢箪に、三杯ずつ飲まなければ承知ができかねるよ」

十「それは又なかなかの大酒じゃな、ところでその腰の木刀、それは武術の試合でもするため

の用かな……」

僧「ははははこれかな、いかにもこれは行くさきざきの道場をたずね、一本の試合いたさんがため、かく腰へ帯しおるのじゃ、見るところ貴公も武芸修行者らしいな」

十「いかにもさようじゃ」

僧「こっちの若僧は門弟か、見たところ、まだカラできておらんな」

新三郎聞いてむっとして、

新「これはしたり、拙者をとらえて若僧の、カラできないのと、無礼の一言、ぜんたい御坊はなんという者じゃ」

僧「こりゃこりゃその方は粗忽なやつだ、他人の名前を聞こうと思わば、まず己れの名を名のるべきじゃ。いかに若年とはいえ、それしきの心がけはなくてはなるまい」

新「こやつよくつべこべと理窟をこねるな、われらの名を聞いて驚くな、これにあらせられるは、当時将軍家へご指南申し上げる、柳生但馬守さまの御子息十兵衛三巌先生、かくいう拙者は門人中山新三郎と申す者であるぞ」

僧「ははあ又左衛門のせがれ十兵衛とはその方であったか」

新「だまれ坊主、十兵衛先生をとらえて、又左衛門のせがれ十兵衛であったかとは何事だ。無礼申すにおいては手は見せぬぞっ」

僧「いや、いかにも今でこそ又左衛門は、大和柳生の陣屋の主として諸侯の列にも加わり、将軍家へご指南申し上げるようになったが、昔をいえばわしは兄弟のようにいたしたあいだがら、そのせがれの十兵衛は、わがためには甥も同然だ。

あいや十兵衛殿はじめてお目にかかるぞ」

十「ただいまうけたまわれば、親どもとご懇意になされたようにござるが、御坊はなんとおおせられるお方で……」

僧「わしかな、わしは浅山三五郎という酒呑み坊主だ」

これを聞いて十兵衛先生、頭をさげて、

十「これはこれは存ぜぬこととて失礼いたしました、かねてより浅山一伝流を創められた、浅山三五郎先生こそ、天下の名人とうけたまわりおったが、お目にかかるは今がはじめて。拙者は十兵衛でございます、以後お見知りおかれまするよう」

三「さようていねいな挨拶では、坊主かえって恐縮いたす。又左衛門のご子息十兵衛殿こそ、あっぱれ天下の名人とうけたまわっておる。御同様以後はご昵懇に願いたい」

十「恐れ入りました。これ新三郎」

新「はっ」

十「なにをいたしておるか、この御坊こそ浅山先生であるぞ、先刻の無礼お詫び申し上げい」

新三郎も胆をつぶした。この坊主が有名な浅山大先生とあるのですから、鳩が豆鉄砲を食ったよう、目ばかりぱちくりさせておりましたが、ようように、

新「存ぜぬこととて、さまざまの無礼申し上げ恐れ入りました。なにとぞごかんべんのほど願いあげます」

三「いやいや、さようなことを意にとめる一伝斎ではない。しかしながら十兵衛殿、不思議にもかかるところで対面いたすというも、縁あればこそ、幸いこれにたずさえておる瓢箪の底をはたいて、武芸の物語でもいたそうではござらぬか」

十「これはかたじけない。しかし先生には諸家ののぞみをしりぞけて、更に武家奉公はなされず、あまねく諸国を遊歴なされて、行くさきざきの名人あるいは達人と、お試合をなされるとうけたまわりおれば、さだめておもしろきお話もござりましょう。どうかお物語を願いたい」

三「いや別にこれというほどの話とてもござらぬが、まず当時有名な武芸者は、たいていたずねてみたつもりじゃよ」

武芸の話と聞いて、新三郎も思わず膝をすすませ、

新「浅山先生へうかがいまするが、当時武芸において、肩をならぶる者なしといわれる方は、小倉の城主小笠原右近将監殿の家来で、新免二刀流の、宮本武蔵政名先生とうけたまわりましたが、お立ち合いなされたことがございまするか」

三「宮本入道二天玄信か、あれは鎮西の鬼神じゃが、六年以前に試合いたしたことがあった」

新「ご勝負はいかがでございました」

三「三本勝負をいたしたが、三本とも見事に負けた」新「先生が負けで……」

三「さよう」

新「しからば京都今出川の住人、吉岡又三郎先生とはいかがでございました」

三「吉岡か、なかなか強いな、二本試合をいたしたが二本とも負けたな」

新「へー先生がお負けで……しからば木曾乗鞍岳山中に隠遁いたされた、塚原卜伝先生はいかがで……」

三「小太郎卜伝か、昨年彼の草庵をたずねて勝負いたしたが、これも見事負けたぞ」

新「へーまた負けで……しからば越前敦賀の山中においでの、伊東弥五郎入道一刀斎先生、この方と試合なされたことがございまするか」

三「ある。三年前三本試合いたしたが、これは剣術の神だ」新「ではまたお負けで」

三「さよう三本とも負けたな」

新「これは驚きましたな。それではどういう方にお勝ちなされました」

三「さようさ、当代の名人達人といわれる

人々と試合いたして、勝ったことは一度もないな」

新「へー随分とよくお負けなさいましたな」

十「これこれ新三郎、なにを無礼なことを申し上げる、ひかえおろう……あいや浅山先生、幸いあたりに見る人もなければ、このところにおいて、一本のご教授を願いとう存じまするが」

三「いやそれはこっちの望むところ、ぜひ十兵衛殿のお手のうちを拝見いたしたい」

しからばというので、

十兵衛先生はたちあがって、新三郎より竹刀を受け取られ、
十「しからば浅山先生お手やわらかに」
三「ご同様」
と三五郎一伝斎においては、法衣の袖をしぼり、腰の木刀を抜き取ってそれへ進みます。やがてえいっという気合いもろとも左右にさがって身がまえた。十兵衛先生は先生独特の片目はずしの正眼、これぞ一眼を失ってからの苦心の発明――。これくらいの名人同士の試合となると、むやみと打ちあうようなことなどはいたしません。ただ互いに呼吸をはかりにらみあっているばかりで、両先生の体ともぜんぜん地からはえた大木のごとく、更に動く様子もなかったが、そのうちに一伝斎ぱっと飛びさがって、
三「まいった……さすがは柳生先生のお腕前、一伝斎の及ぶところではござらぬ、まことに恐れ入った」
十「いやいや浅山先生には、拙者に勝ちをゆずらんお心と見て取った。未熟不鍛錬の十兵衛ごときの、及ぶところではござらぬ」
三「なかなかもってさようではござらん、恐れ入ったお腕前でござる」
双方勝ちをゆずりあい、残る酒をくみかわして、いろいろと物語をしておりますうちに、日も西山にうすずいてまいりましたので、両雄わかれを告げて、浅山三五郎は東に向かい、十兵衛先生は新三郎をつれて西へ向かわれる。
新「先生へ申し上げます」
十「なんじゃ新三郎」

新「これまで浅山先生の名を、雷のごとく心得ておりましたが、いずれの試合にも負けたとおおせられたところを見ると、どうやら名ばかりらしゅうございますな」
十「はっははは新三郎その方は、浅山先生の言葉を、まことと聞いたのだな」
新「まことでないと申して、勝ったものをまさか負けたとは申しますまい」
十「そこじゃ、浅山先生のごとき方にいたっては、名を欲し勝ちをのぞむ者ではない。されば試合には対手の手筋を見る、腕前を見る、腕前さえ見ればもう勝負に及ばぬ、そこで自分のほうからまいったという。まいったといえばこれ表面の負けだによって、他人へは負けたと話す、なんたる奥床しい心じゃろう。浅山先生は真にあっぱれ天下の名人である」
これを聞いて新三郎も、成るほど名人の心中は、名人でなければわからぬものだと、つくづく感心しながら、あいかわらず十兵衛の供をして、やってまいりましたのは、同国愛知郡名古屋の一つ手前の、宮の宿でございます。

十兵衛さては食い逃げか

ここに尾張大納言義直卿におかせられましては、かねてより十兵衛の武芸をお慕いにあいなり、なんとかして剣術指南に、召しかかえたいとのご希望でございましたが、十兵衛先生は一万石の若殿、普通の浪人者を召しかかえるようにはいかず、残念におぼしめしていらっしゃいますと、

幸いこのたび、東海道を上ってきたと聞かれたから、なんとかして当名古屋おもてに引きとめたいとおぼしめし、宮の宿へ家来をつかわし、先生を待ち受けさせられました。こちらは十兵衛先生、新三郎を召し連れて宮の宿まで来ると、大勢の武士が道のはたに小腰をかがめて、

○「恐れながらそれへおいであいなりまするは、柳生十兵衛先生と見あげたてまつりまするが、われらは尾張大納言の家来の者にて、君のおおせをうけたまわり、これまでお出迎え申しました者、いざあれなるお乗り物へ、お召しのほどを願いあげたてまつります」

十兵衛先生さてはとおぼしめしたが、

十「ああさようか、これは千万かたじけなく存ずる」

さっそく乗り物を十兵衛の前に持ってまいりましたから、それへお乗りになると、出迎えにまいった武士数十人、前後を警固し、大手前堀端、竪川五郎右衛門の屋敷を、ご逗留中の宿にあてられて、これへ案内申し上げ、まことにゆき届いたお手あてでございます。ここで三日間は休息、四日目になって名古屋ご本城に登城の上、大納言さまにお目通り申し上げ、十兵衛よりこの度のお礼を申し上げると、

義「十兵衛、その方漫遊の由は承知いたした。当国へ来ったるを幸い、ここ両三年は当所にとどまり、予に武芸指南をいたしてくれい」

十兵衛いっこうご辞退のもようも見えず、かえって高慢らしい顔を見せて、

十「はっ、さすがは名君、この十兵衛を師といたしたいとは、あっぱれお見上げ申しました。さよう両三年は要すまじ、十兵衛一年の間、ご指南申し上げれば、まず八方敵なしのお腕前とならせられましょう。かくいう十兵衛が当地にまいったるは、これ田野に鶴の下りたるにも等しきもの、君お喜びあそばしてしかるべく存ずる」

義直卿はじめ、いならぶ家来の面々おどろいた。当地を田野として己れを鶴にくらべているとは、なんという天狗であろう。さてはいまだ病気が治らないものと見える、と思っております。しかしいくら天狗でも、腕前は実際その通りでございますから、

義「十兵衛、田野に鶴とはよく申した。どうか指南いたしくれ」

十「委細かしこまりました。しかしながらわれらごとき名人とあいなりますれば、興の起こらぬときには、なんとおおせになればとて、お稽古あいなりかねます。その代わり興おこり気が乗りましたときには、夜ふけといえども君をお起こし申し、お稽古あいつけまする」

義「いやそれはよく心得ている。なにぶん頼みおくぞ」十「よろしゅうございます」

義「誰かある、酒肴をもてい」

と酒肴をお取りよせにあいなり、義直卿お手ずからお盃くだしおかれまする。

その後十兵衛の旅宿へは、若侍十人ずつ交代でつけおかれ、また三度の食事も、とくに美酒佳肴をそえて下されます。ところが十兵衛先生には、かえってこれを面倒くさいことに思われ、接待の一切をお断り申し上げて、新三郎を相手にこの酒を召しあがり、酔えば眠り、さめれば、付近の名所古蹟などの見物をする。大納言さまはときどきお召しになって、

義「十兵衛、いまだ興が乗らぬか」

十「いまだ気が進みませぬ」

同じことをくりかえし三月あまりもむなしく過ぎましたから、新三郎も十兵衛先生の心中を解しかね、

新「先生あなたはこのまま当地に、おとどまりのおつもりにございまするか」
十「まあ当分は逗留いたしてまいろう、ここにおれば別に旅籠代もいらず、まことに気楽なものだからのう」
新「けれどもいつまでもご逗留あそばしてはてまえの復讐が……」
十「いや新三郎心配いたすに及ばぬ、なにほどあせればとて、時節到来いたさなければ討てるものではない、しかし一旦十兵衛がうけあったからには、かならず討たせてつかわすから安心せい」
と容易に出立される様子もございません。というのは十兵衛先生においても、一日も早く九州路へゆきたいは山々ですが、そう急いで乗りこむと、かえって九州の諸大名が不審を起こし、油断いたさぬようなことがあってはあいならんとその辺の深き考えがあったからでございます。ところがその後も、十兵衛先生からは、殿さまへ稽古はじめをしようと申しいでません。どうするかと打ち捨ておかれると、十兵衛先生には大納言さまの御前にいで、
十「永らくご馳走にあいなりありがたく存じたてまつります。もはや当地も見あきましたるにより、今日かぎり出立いたそうと存じ、おいとまにまかりいでました」
大納言さまおあきれあそばし、
義「十兵衛その方は、予に剣術の稽古をいたしくれる約束ではないか」
十「はて、……さようなお約束をいたしましたか」
義「ははあ忘れたか、当地へまいったる節、頼んだではないか」
十「さようでございましたか、十兵衛すこしもおぼえはござりません、しからばかようつかまつりましょう。十兵衛これより海を渡って天竺を見物いたしまする心底なれば、お稽古は帰途といたしましょう。それまでご猶予くだしおかれまするよう」
大納言さまにっこりとうなずかれ、
義「ああさようか、しからばその方の帰途の節を待つことにいたそうぞ、早う帰るようにいたせ」十「かしこまりました」
そのまま御前をさがった。あとで義直公家来に向かわれ、
義「十兵衛に食い逃げをされたわい」とお笑いになったというが、これはうそらしい。
さて十兵衛先生は旅の支度をいたされ、あいもかわらず新三郎を召し連れて、名古屋路をご出立。申すまでもなく、その当時宮の宿から出る渡船は、海道で唯一の交通機関、あれから海上七里で桑名の港へ着船いたします。渡船場までは家中のもの大勢でお見送り申しあげる、ここで一同に別れ、海上はしごく平穏、つつがなく桑名へ上陸、それより道を左へ取って山田へはいり、伊勢大廟へご参拝、再び道を引きかえして、松阪から阿濃津へまいりました。

八等身の美人剣客

阿濃津はただいまの津市、藤堂高虎公のご城下でなかなかのにぎわい、十兵衛先生新三郎を宿に残して、あちこちと見物をしておりまするとと、城下の盛り場の一角に大勢の人立ち、なんであ

ろうとのぞいて見ると、三十五六になる浪人者らしい、色の黒い眼の鋭い武士、黒の木綿の衣服に小倉の袴、襷十字に綾取り大小を落としざしにして立っています。前には小さな台があって、台の中央に人間の首が出るぐらいの穴があいている、かたわらには木剣竹刀が二三本、たんぽ付きの槍などがかけられてあります。

浪「さてお立ち合い、拙者これよりごらんに入れまするは蝦蟇の膏の効能や居合い抜きとはわけが違う。武士の表芸といたす剣術、槍術の立ち合いだ。なんとお立ち合い、それも木剣や竹刀でお互いが打ち合ったのではおもしろくない。いま拙者この台の下へ入って、この穴から首だけだす、それをお立ち合いが木剣、竹刀、槍、薙刀、又は弓鉄砲なんでもお望み次第――いやお立ち合い、弓鉄砲いっこう拙者はかまわんが、外れ矢外れ弾ということがある。それでお立ち合いに万一怪我あやまちがあっては大変、そこで弓鉄砲は取りやめる。木剣、竹刀、槍、薙刀なんでもお望み次第――この出ている首を狙ってはっしと打つ。打つより早く間一髪、首は消えてなくなる、これがこの方の腕前、天真正伝神道流合気の術。しかしかく申す拙者、やり損じてお立ち合いのうちに、この首を打つか突くかいたされたときは、褒美として代金の二倍にしてお返し申す、竹刀は十二文、槍は十六文、木剣は二十文、これは少し高いよ。しかし木剣をへたに受け損じれば、千両でも買えぬ命が飛ぶ、明日から飯の食い上げだ。

さあお立ち合い腕におぼえのある者は、この首を狙う者はないか、木彫りや張子の首ではない、正真正銘の生きている首だ、さあさあやる者はないかな、竹刀はただの十二文……」

からかい半分になっております。十兵衛先生これを見て、おもしろいことをやっている、どんな事をするかと、見ておりまするとと、

侍「首屋、拙者が打つ」

といいながら飛びだした若侍、

浪「これはありがたい、竹刀か木剣か、あるいは槍か……」

侍「木剣じゃ」

浪「よろしい、二十文おいてからその木剣をお持ちあれ、お代は現金先払い、不渡り手形は受け取らぬ」

いやえらい勢い、若侍は二十文の銭をはらって、そこにあった木剣を手に持った。

侍「よろしいか」

浪「待ちなさい、急いては事を仕損じる、今この穴から首をだす」

浪人は台の下へ体を入れたかと思うと、ひょっこり首を穴からだして、

浪「さあよろしい」

侍「よしっ、覚悟をしろ」

やっと叫んで勢い鋭く打ちこんだ木剣、あわや脳骨微塵にくだけて、けしとんだかと思うと、ぱっと首は穴から消えて、木剣は前へ流れて台の上をピシーリ、浪人は台の下からひょっこりと立ち出でて、

浪「まことにお気の毒、二十文の取り得、こういうお客がなければこっちの収入にならぬ、さあさあつづいてあとに打ちこむ者はないかな」

△「拙者がやるぞ」

と飛びだしたのは三十五六の武士、

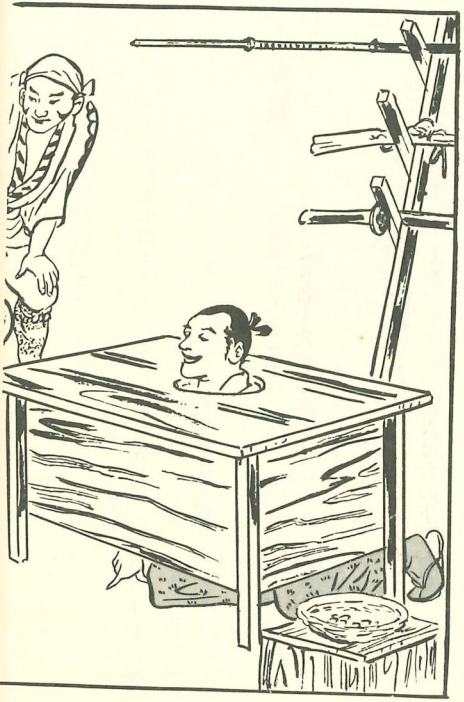
△「拙者は阪東妻三郎という者だ」

浪「阪東妻三郎、阪妻かい、阪妻なら剣術は強かろう。だが待てよ、阪妻はとうに死んだはずだが、さては三途の川から引っかえしたか、それなら六文銭きり持ってはおるまい。これは例外、六文に負けておこう。さあさあ六文おいて打ちこんだり」

浪人はまた台の下へ入ってぬっと穴から首をだす。剣豪阪妻の打ちおろして来る木剣、真っ向打ちくだかれたかと思うと、首はパッと穴のなかへ消えて、当人は向こうへひょっこり出る。

浪「あははははお気の毒さま、さあさあお次はないかな」

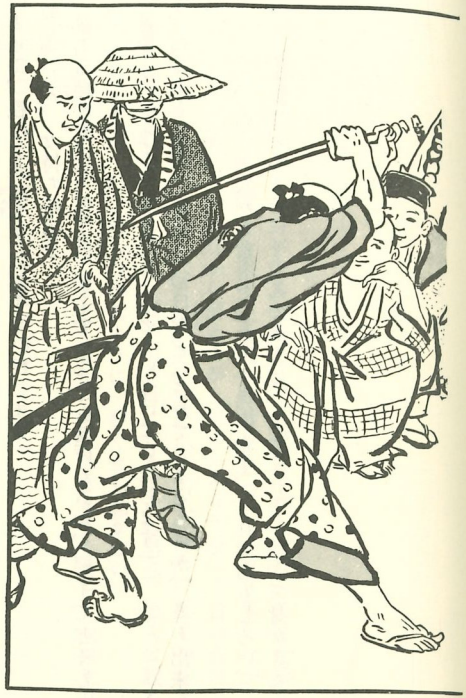
十兵衛先生これを見て、浪人め、憎いことをする、しかしあの鋭



い打ちこみを見事さけて、穴から首を消すというのは、よほど腕前のあるやつに違いない、よし試して見ようと考えられ、今やそれへ立ち出でようとしたとき、

○「私がお相手いたしましょう」

という女の声、見ると群衆を押しわけて、その所へ立ち出でましたのは、年のころなら十八九、瓜実顔に富士額、残んの雪をあざむくばかりの色白さ、丹花の唇、芙蓉の眉、小野小町か乙姫か、山本富士子か伊東絹子という美人、おのずからにそなわる品は、いかさま、武士の娘でございましょうか。



○「やあ女が出た。どうだいい女だな、代表的八等身だぜ」

△「女が出るとは珍しい、ミス・ユニバースしっかり」

などとざわめきあって見ているうちに、静かにそれへ進んだ彼の美人、

娘「お代十二文はここに置きまする」

浪「やあすてきな美人だな、君の名は真知子……拙者は春樹……」

まさかそんなことは申しません。

浪「ところで十二文なら、得物は竹刀だね」

娘「いいえ、竹刀は用いません、私はこの扇子でお相手をいたします」

いいながら帯の間から取りだした、女持ちの扇子、

浪「なにその扇子で……拙者は蠅や蚊でないから、扇子で追っても逃げないが、扇子でどうなさる」

娘「この扇子であなたの首を、穴から下へいかぬよう、そくいづけにいたします」

浪「冗談をいっては困る、板や紙とは違う、そくいづけなどにされてたまるものか、さあ出来るものならやってごらん」

と浪人はひらり台の下へ入って、ぬっと穴から首をだした。十兵衛先生、これはおもしろい、この婦人どういうことをするかと見ているうちにくだんの美人は、扇子を右手に持って身がまえました。

名前は宿へ置き忘れた

群衆の中よりあらわれ出でましたミス・ユニバースともいうべき絶世の美人、右の手に女持ちの扇子を持って、しばらくの間、台の上、穴から出ている浪人の首を見つめておりましたが、「やっ」と一声気合いがかかった。浪人パッと穴から消えたかと思うとそうでない、首は台の上へ出たきりで、眼をぱちぱちやっている、見ると穴と頤との間に小さい女持ちの扇子がはさまっている。やっという声と共に、右の手から飛んだ扇子が、目にもとまらぬ早さ、浪人は眼を白黒して、その扇子を取ろうとするが、釘で打ちつけたように、びくとも動かない。

浪人は「うーむ、うーむ」と力をいれて首を抜こうとするが、押すことも引くことも出来ませぬ、娘はにっこり笑って、

娘「首売りのお方、いかがでございます、これがそくいづけ」

浪「おた……おた……お助け下され、まことにどうも恐れ入った……」

娘「さっきから聞いておれば、人もなげな広言自慢、女の私でさえこのくらいのことは出来ます。みせしめのため五六日、そうしておいでなさりませ」

浪「うーむ、お許しくだされ、どうかごかんべんにあずかりたい」

さっきまでの広言はどこへやら、浪人者は青菜に塩のしおれかたです。

娘「それではかんにんして上げますが、これからのちもこういうことをしておりまするとまた私が来て、今度こそ首を斬ってしまいます」

浪「決していたさぬ、ひとえにごかんべんを願いたい」

娘「それでは……」

と娘は扇に手をかけたかと思うと、別に力をいれる様子もございませぬ、すっと引き抜いて帯の間へはさむと、にっこり笑って向こうへ行く。浪人は青い吐いき、そこそこに台を片付けていずこともなく逃げ去りました。

最前からこの様子を見ていました十兵衛先生、ことごとくご感心にあいなり、

十「これこれその方共にたずねるが、いま首売り屋をこらしめた女、あれはいずれの娘であるな」

△「へえ、あれは藤堂さまの剣術ご指南をなさる、大橋兵庫さまのお嬢さまで、楓さまとおっしゃいます。才色兼備その上に、お父さま大橋先生のお仕込みで、中条流の腕前があの通りでございますから、ご城下でだれも知らぬものはございませぬ」

十「さようか」といったが十兵衛先生、女であれだけの腕前があれば、人に知られるのももっとも、どれほどの達人であるか、一つためして見たいとおぼしめされながら、宿へお帰りにあいなりました。

食事が終わると、主人の金右衛門が挨拶に来て、

金「どうも旦那さま、今日はありがとう存じます。さだめしお疲れでいらっしゃいましょう」

十「いや亭主か、今晩は厄介にあいなる、亭主、おまえにたずねたら分かるだろうが、当藤堂家の家中で、剣術の指南をいたす大橋兵庫という人がおられるか」

金「へえ、大橋兵庫先生とおっしゃったら、もうそれはえらい先生でございまして、中条流の大先生で……」

十「その兵庫の娘に楓という者があるか」

金「へえ、旦那さまよくご存じで、もう大橋先生のお嬢さまといったら、この阿濃津のご城下の自慢の一つで、それはそれはお美しい上にご利発で、その又上に剣術の腕前がすばらしく、才色武勇二つながらに兼備の方でございます。ちょうどお話がでたから申し上げますが、今年の正月十五日に、お嬢さまの婿定めがございまして、それは大変なさわぎでございました」

十「ははあ、そしてその婿というのはどんな婿だ」

金「ところがそのお婿さまがきまりませぬ。婿に来よう、嫁にもらいたいという縁談は、降るほどあるのでございますが、あのお嬢さまには望みがございます」

十「なんだ望みというのは……」

金「世間の娘は、あの男の家は金があるから嫁に行きたいとか、あの男は色が白くって、男っぷりがよいから婿にもらいたい、というのが人情でございますが、あの楓さまは、そんな男はきらいだというので……」

十「ははあ、どういう男がいいというのだ」

金「それが金があるところへ行くと、とかく親の金をあてにして、なまけたり放蕩者になる、また男っぷりのよいのは、浮気っぽい、第一色の白いのは汚れっぽいからいやだ。どうです、色の白いのは汚れっぽい、うまいことをおっしゃるじゃありませんか。それじゃあ、どんな男なら良夫に持つかと、親御さんが聞いたら、大橋家は剣術をもって立つ家であるから、私より腕前

の上の者なら、良夫にいたしましょう、とこういうんです。

それで今年の正月十五日、ご城内武術始めの当日、お殿さまが家中の若侍残らずお集めになって、楓さまと試合をさせたのでございます。ところがだれ一人として、楓さまに勝つ者がございませぬ。それで今日までお婿さんが決まらないのでございますが、それからというもの、これを伝え聞いた京大阪の近在諸国はもちろん、遠く四国九州、蝦夷オロシヤのはてからまでも、お婿さん目あての修行者が殺到して、朝から晩まで、えい、やあ、の他流試合、なんでも大橋先生のお宅では、そのため新たに下足番をやとったということでございます」

十「うーむ、それはおもしろいな、明日は拙者が試合を申しこもう」

金「へえ、旦那さまが……」

十「うむ、その楓と申す娘と試合して、拙者が婿になる」

金「ご冗談おっしゃってはいけませぬ、いかになんでも、旦那さまが楓さまのお婿になるなんて、えっへっへへへへ」

十「なにを笑うのだ、拙者が勝って娘の婿になったら、亭主、その方を家来に使ってやるぞ」

亭主金右衛門は、これが柳生十兵衛という名人だとは知らないから、笑っております。

さてあくる日、朝飯をすませると、十兵衛は、今日もまた新三郎を残したまま、ぶらりと宿を立ちいでました。やってまいりましたのは大橋兵庫の道場、

十「頼もうー」○「どーれ」

出てまいりましたのは内弟子らしい二十二三の若侍、

弟「どちらから」

十「拙者は諸国武芸修行の者でござるが、ご当家ご息女のおうわさをうけたまわり、一本のお手合わせを願いたく参上いたした。よろしくお取り次ぎのほどを……」

弟「ははあ、さようでござるか、してお名前は……」

名前をきかれて十兵衛先生弱った。まさか柳生十兵衛とは名のれない。

十「名前か、名前の儀はつい取り急いで、宿へ置き忘れてまいった」

弟「これはしたり、いかにお取り急ぎなればとて、名前を置き忘れるということはござるまい。なんとおおせられる」

十「えー名前の儀は……」といいながらかたわらを見ると、門前に大きな楠の木がある。

十「さよう、名前の儀は楠木と申す、拙者は楠木……」

といったが、とっさにあとが出て来ない。

弟「楠木なんとおっしゃる……」

ええままよと十兵衛先生、

十「楠木正成と申す」

苦しまぎれに十兵衛、楠公の名前をそのまま拝借、読みだけをちょっと違えて申し述べたから、内弟子が驚いた。

弟「楠木氏でござるか、近ごろ珍しいご苗字でござるな、しばらくお待ちを願う」

内弟子は不審の眉をひそめた。見れば隻眼の小男、顔の色は旅の日焼けか天性か、アメリカインデアンとの混血かと思われるくらいに黒い、内弟子心中、

弟「くる修行者も、来る修行者も、ひとたまりもなくお嬢さまに打ちこまれて、近ごろとんと

訪れる者が少なくなったが、久方ぶりに来た今日の侍は、めっぽう変わり者らしい。あの顔でお嬢さまの婿になろうなどとは、心臓の強さが思いやられる。ひょっとすると少々いかれているのかも知れない。やがてお嬢さまにさんざんな目にあって、ほうほうの体で逃げ帰るだろう」

などと思いながら、この由を楓に取り次ぐ。すぐに道場に通された十兵衛、待つほどもなく楓がそこに現れた。明眸皓歯、朱辰笑みを含んで昨日にいやまさる美しさ——。淑やかに十兵衛の前に座って初対面の挨拶。

楓「お待たせ申し上げました。お訪ねにあずかりました当家の娘、楓にござります」

十「拙者は楠木正成、いささか神陰流を習得いたしましたる者……」

楓「なにとぞお手やわらかに願いまする」

十「拙者とてもご同様」

挨拶を終わって楓が十兵衛の顔を見ると、なるほど取り次ぎから聞いたように、鉄の草鞋でさがしても、なかなか見つからぬような醜男、しかしその奥にはえもいわれぬ、品と威厳がそなわっています。それもそのはず、こちらは一万石の若殿、柳生十兵衛三巌。

さっそく身じたくを終わった楓は、手練れの竹刀を持って立ち出でましたが、十兵衛先生は一向に身じたくもなさらない。京の吉則、一尺二寸の鉄扇を右手に持って、そのままずいと道場にお り立たれた。

十「ご息女、失礼ながら拙者はいずこへまいっても、これにてお相手いたす。ご遠慮なくおかかり召されい」

聞いて楓の眉がぴくりと動いた、あまりといえば人を人とも思わぬなされかた、さればと楓は、

中条流半身入身のかまえにじっとかまえて、ただ一打ちにとつけ入った。美人の柳眉を逆だてた美しさはまた格別——。

十兵衛これを見て「ははあ怒ったな」と思ったからにっこりと笑って、

十「ご息女、武術には平常心がまず第一」

とからかう。しかし楓も並み一通りの婦人ではない、さては心をいらだたせる計略と悟ったから、さっと一足飛び退いて心気をしずめ、かまえを立てなおして立ち向かう。

十兵衛例によって、ぴたりと鉄扇を片目はずしの正眼にかまえて、楓を見ると心中ひそかに驚いた、鵜の毛でついたほどのすきもない。

「えいっ」「やっ」

十兵衛じっとこれを眺めて、これは位で攻めてやろうと思われたから、じりじりっ、じりじりっ、位攻めに攻めたてる。位攻めとは先々の先の攻め、心気の力で相手を圧服し、この圧服にたえかねて、相手が捨て身に打って出ようとするその出鼻を、一刀両断ずばりと斬って落とすという、なかなか名人でなければ出来ない業。

楓は打ちこもうとするが、重石でおしつけられるように、心気の上でぐんと押さえつけられるから、打ちこむことが出来ない。一歩、二歩、だんだんと追いつめられて、もう一歩さがれば道場の羽目板。もはやこれまでと観念した楓が、目をつぶって捨て身に打って出ようとしたその瞬間、道場上段の襖がガラリとあいて、

○「勝負見えたっ」という声。見ると六十路に近い白髪の老武士が、悠然と道場におり立った。これぞ楓の父、大橋兵庫。

兵「楓、そちなどのとうていお相手になられるお方でない……。あいやそれなるお武家、ただいまのお手の内、見事ともあっぱれとも、兵庫ほとほと感服のほかはござらぬ。かまえのご様子よりお察しするに、柳生流と見たはひが目か……もしやご貴殿、柳生但馬守殿の御曹司、十兵衛三巌殿にてはござらぬか」

いわれて十兵衛もびっくり、

十「あははははは、とうとう化けの皮をはがれ申したか、いかにも十兵衛三巌でござる」

柳生十兵衛と聞いて楓の驚きはひとかたならず、はじらいの思いに胸はいっぱい、その顔はぱっと紅葉を散らしました——これは楓だから紅葉を散らすのがあたりまえ。青くなったり黄色くなったのではお話になりません。

ここに父娘ともども打ちそろって、十兵衛を奥の一間に案内し、下へもおかぬおもてなし。十兵衛くさぐさのお物語とともに、楓の腕前を賞讃されたのち、

十「婿がねを試合の勝ち負けによって決めるもいかがなもの、世には腕前強くとも心栄えかんばしからぬ者もござれば……」とお戒めになり、

十「いずれ江戸の父上にも申し達し、よき婿がねもござれば、お取り持ちするよう願いおこう。そのおりには江戸と伊勢との中間、三保の松原あたりを選んで待ち合わせ、デイトなどとはいかがでござる」

まことに粋なお話——喜びの父娘に見送られて兵庫の家を立ち出で、このことまた藤堂公のお耳に入って、お召しなどの来ぬうちにと、直ちに新三郎をともなって阿濃津をご出立、伊賀越えの上、大和柾木坂のご陣屋へとお入りになりました。

柾木坂は、ご病気ご静養をあそばされた思い出のところ、ここにしばらくご滞在、それより程近き奈良の町へお入りになり、ここにはからずも一人の神童を得られるという、有名なる宝蔵院覚禅坊との試合のお話。

覚禅坊が愕然

宝蔵院の槍術というのは、宝蔵院覚禅坊胤栄が元祖で、十兵衛先生と試合いたしましたのはこの胤栄でございます。

胤栄は僧侶でありながら、自ら槍を使うことを工夫いたし、奈良の町へ訪ねて来る武芸者と試合いたしますが、更におくれを取ったことがない。これがために覚禅坊すこぶる天狗になってきた。まず日本で槍をとっては、わが右にでる者はあるまいと、ここに、

天上天下唯我独尊宝蔵院流槍術指南所

覚禅坊胤栄

と筆太に書いた長さ一丈、幅五尺もあろうかという大看板をかかげて、あまたの門弟をとりたてております。

ところがある夜のこと、門をホトホトたたいて、しきりに案内をこう者がある。折あしく門弟も下男もおらないので、覚禅坊みずから立って門をあけると、まだ十歳ばかりの男の子、水色の

狩衣烏帽子すがたでたたずんでおります。

覚「いずれから何用あってお越しなされた」

少「夜中まことに恐れ入りまするが、ぜひ胤栄先生にお目にかかり、お願い申したいことがあってまかりこしました。この儀、先生へよしなにお取り次ぎくだされたく」

覚「覚禅坊は拙僧でござる。いかなるお頼みか知らねど、まずこちらへお通りなされ」

覚禅坊も少年のようすが、通常下ざまの風体でなく、身分ある人の子供に相違ないと思ったから、ていねいに案内してなおもようすを見ると、水もしたたるような美少年でございます。やがて覚禅坊が、

覚「お頼みとはいかなる儀でござるか」

するとその少年は、ていねいに両手をついて、

少「余の儀ではございません。実は所存あって武芸を学びたい、ついては先生の槍術こそ、天下ならぶ者のなき由をうけたまわり、ぜひご教授にあずかりたく、かくは推参いたしました。この儀お聞きとどけくだされましょうなれば、ありがたいしあわせに存じまする」

覚「ふむ、それはいとたやすいことでござる、覚禅坊教授いたそう、しかし和子はいずれの、なんとおおせらるる方のご子息でござるか」

少「失礼には似たれども、いささかはばかりあって、その儀はお許しいただきたく……」

覚「さようにおっしゃるからは、たってお尋ねはいたすまじ……」

少「ありがとう存じまする、名前もはばかれば、身もはばかりますれば、はなはだ恐れ入るお願いなれども、毎夜、裏木戸をお開けおきくださる訳にはあいなりますまいか、それより忍んでまいりとうございます」

覚禅坊は不思議なことをいうと思ったが、これは身分の高い人の公達で、なにか深い所存のため、かくは人目をしのび、われに教えを頼むのであろう。もしそれが、覚禅身の栄達の縁ともならば幸いだと、仏につかえる身を忘れ、世に出ようという、そこは山師っ気のある坊さん。もっとも坊さんは、山に籠もって修業するのがお釈迦さま以来のならわし、銀座のキャバレーで、ジンジャージーを呑みながら修業というわけにはまいりません。従って山っ気のあるのがあたりまえ——一つは好奇心にもかられて、あくる晩から裏木戸をあけておくことを約束しました。

あくる日は覚禅坊、だれにもあかさず裏木戸を開け、道場では人目もある、裏庭は一面草原で、なかなか手広うございますから、ここへ稽古槍を二本持って来て、彼の少年の来るのを、今か今かと待っていると、ちょうど五刻（午後八時）と思うころ、開け放してある木戸をくぐって入ってきました。

少「これは先生恐れ入りました」

覚「さあ、その槍をお持ちなされよ。槍はこう持つもので、まず突くよりも引くことがかんじんでござる」

というぐあいで、一刻あまりも稽古いたしまするとと、

少「どうもありがとうございました。夜もいたく更けましたれば、今宵はこれにておいとまつかまつりまする」

と帰ってしまった。すると翌晩も同じ時刻に同じ木戸口からやって来て、

少「先生お願いいたします」

覚「ご勉強のほど感心感心、さあおいでなされ」

ぴたりつけると覚禅坊おどろいた。一夜のうちになかなかあっぱれな腕前にかわっている。

覚「いやこれは驚き入った、わずか一夜でかほどまでにご上達とは、覚禅恐れ入った」

覚禅坊舌をまいて感心いたしましたが、やがて一刻ばかりたつと、

少「今宵はこれにておいとま申しまする」

と帰っていく。その翌夜もきたが、今度はなお一段の上達、かようなあんばいで四日、五日、六日と、ちょうど六日目の晩には、もう教えるのではない。覚禅と試合しているようなもので、さすがの胤栄坊もはあはあと息をきらすしまつ。それにひきかえ彼の少年は、更に疲れた様子もなく、かえって軽く笑いながら、

少「さて先生、私が先生にご教授をお願い申してから、今日までわずか六日でございまするが、おかげをもっていささか槍術の妙味をさとりましてござります。先生のご手練はさすがに、あっぱれではござりまするが、ただいま申した妙味ということがいかがでございましょう、それくらいの腕前で、天上天下唯我独尊などとおぼしめされるのは、誇大妄想松沢行きでござりまするぞ。中一日おいて明後晩、先生と真剣の勝負をいたし、先生より会得いたした槍の玄妙をごらんに入れますれば、お支度を願いおきます」

といったかと思うと、さっさと帰ってしまいました。覚禅は呆れて、しばらくはぼんやりと少年の後ろかげを見送っていたが、ようようのことで裏木戸をしめ、己れの部屋へもどってまいり、さあ寝るどころじゃございません。どっかりあぐらをかいて、

覚「ふーむ、最初にきた時から、どうも不思議な少年と思ってはいたが、きやつこそ妖怪変化

に相違あるまい。

そうと知ったら最初の日に、真槍の穂さきにかけ、ただ一突きに突き伏せてくれたるものを、むざむざ妖怪変化のために、己が工夫したる、宝蔵院の奥義をぬすみ取られたは残念千万。

それにしても明後晩は、真剣勝負をと申し帰ったが、今あれだけの手のうちなれば、とても明後晩はこっちに勝ち目がない。さればといって妖怪におそれをなし、立ち合いを拒んだとあっては、覚禅坊末代までの恥辱、ああなんとしたものであろう」

さすがの覚禅坊も大いに心をなやましたが、たとえ彼の少年の槍先に刺し殺されるとも、試合せずにはあいすむまい、われも宝蔵院覚禅坊、やみやみ妖怪変化に突き伏せられてなろうやと、もとより豪勇の大入道、九尺柄の槍の鞘をはらってはったとにらんだものすごい形相。その夜は一睡もいたさず、翌日になるとほど近き猿沢の池のほとりに立ち出で、心中深く春日大明神を祈念しながら、突きだす槍の穂さきを水面に映して、いろいろ工夫をこらしております。

折からちょうどたそがれどき、風も凪ぎて木の葉一つゆるがず、あたりひっそりとしております。覚禅坊ただ一人、寂然の池畔に立って槍をしごいて思念をこらす折しも、突然あしもとから、ガサガサガサガサと飛びだした一匹の獺、今し水面のぞんで跳りこもうとする。覚禅坊これを見ておのれっとばかり突っかけた間一髪、獺はすっと身をかわして、ドブンと水中へ没してしまいました。ほっと一息ついた覚禅坊、

覚「うーむ、かげろう雷光ものがさじと思った、わが手練の槍先に、獺を突きそらすとは残念。彼の不思議な少年が申したごとく、いまだわが槍には妙味というものがないのであるか……」

さしもの覚禅坊も槍をひっさげたまま、悄然と池のほとりにたたずんでおりましたが、ふと気

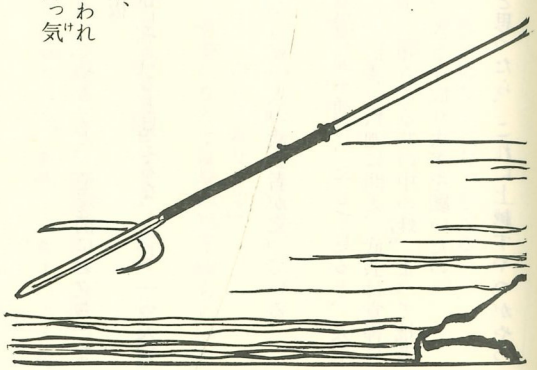
がつくと、鏡のごとき池の面にうつる三日月のかげが、覚禅坊の持った槍の穂さきと交叉して、ちょうど「十」の字になっております。覚禅坊これを見て思わずにっこりと打ち笑み、

覚「うむ、これだこれだ、今の獺とてもわずかばかりの狙いの狂いに、無念にも突きそらしたのであるが、あのときわが槍がこの影のごとく、十文字であったなら、かならず突きとめたに相違ない。明晩彼の少年来らば、この十字槍をもって試合ってくれん」

と踊りあがって喜んだ。これが蛸踊りのはじまりだといいますが、あまり当てにはなりません。

その夜はそれで部屋へもどり、夜を徹し十文字槍を工夫し、明くる晩を待ちましたが、不思議なことに怪しの美少年は現れません。翌々晩も待ったが、姿を見せない、これは覚禅坊が十文字槍を工夫したことを知って、来なくなったものとあい見えます。妖怪変化の化身か、又は覚禅坊の慢心をいましめる武神の仮の姿の顕現か、とまれその後も覚禅坊は、一心に槍術の玄妙を工夫し、槍といえば宝蔵院と、その名は日本中に響き渡るにいたりました。

諸国の槍術者は、風を望んではるばる奈良の町へ集まり、覚禅坊へ入門するもの後をたたず、弟子の数、千余人といわれるまでの大はんじょう、しかし持って生まれた高慢と山師っ気は、覚禅坊なかなか抜き去ることができません。



坊主っ、自分の引導は自分で渡せ

ところへ十兵衛先生、かねて聞き及ぶ宝蔵院の槍術をためしてやろうと、道場前にお立ちになります。見ると「天上天下唯我独尊」と人もなげなる大看板。

十「ははぁ、こんな看板をだすようでは、よほど天狗慢心していると見えるな、よし、一つ天狗の鼻をへし折ってやろう」

と思ったからつかつかと玄関へ来て、

十「たのもう、たのもう」○「どーれ」

出て来たのは門人、見ると隻眼小兵、まことに風采のあがらぬ一人の武芸者が立っている。

○「いずれからおいでなされた」

十「拙者は武芸廻国修行のものでござるが、ただいま当道場の前を通行いたして見ると、天上天下唯我独尊と、人もなげなる看板がかかげてござる。まるで仏法は釈迦に問え、武芸は覚禅に習えといわぬばかりのふるまい、あまりといえば天下の広大を知らざる井の中の蛙、よって拙者が一本立ち合って、高慢の鼻をへし折ってつかわすにより、さよう取り次ぎを願いたい」

門人これを聞いて驚いた。

○「目のよるところへ玉というが、家の先生が熱が高いと思ったら、これに上越すやつがやって来た」と思いながら、

○「当道場の先生と試合……ははははさようか、してご姓名はなんとおっしゃる」

十「八木原重蔵と申す」

十兵衛、今度は名前を考えて来た。

○「暫時おひかえなされ」

門人は覚禅の前へやって来て、

○「先生に申し上げます」覚「なんじゃ」

○「まいりました」覚「なにが来た」

○「他流試合の武芸者と申す隻眼の小男が、これこれかように申しております」

覚「あっははは、天下の名人覚禅坊に向かって立ち合いを望むなどとは身の程を知らぬやつだ。大方それはイカレポンチであろう」

○「へえ、なりは小っこうございますが、血液型はどうやら先生と同じらしく、おっしゃることもよく似ております」

覚「なにを申す。血液型などで人間が分かるか、眠気ざましにちょうどよい、こちらへ通せ」

○「かしこまりました……ええ、ただいま先生へ申し上げたるところ、お相手つかまつるとのことでござる、どうかお上がりくだされ」

十「さようか」

どこまでも横柄だから門人もあきれております。やがて道場へ案内されると、さすがは天下に鳴りひびいた宝蔵院の道場、数十人の門弟ずーっと両側にいならび、正面の座には覚禅坊、もう

四十に近く色といえば赤銅のようで、眼するどく鼻たかく、頬一面の毛むくじゃら、いかさま天下の荒法師とあい見えます。十兵衛先生、

十「拙者は八木原重蔵と申す。以後、見知りおかれい」

覚「わしは天下の覚禅坊胤栄。聞けばわしと一本の試合をのぞまれる由、相手に取っては不足であるが、眼気ざましにはちょうどよい。望みによって一手の指南をするであろう」

十兵衛先生も横柄だが、覚禅坊はそれに上越す傲岸不遜、十兵衛先生にっこり打ち笑い、

十「いや試合もさることながら、実は拙者かくまいりたるは、貴僧へご意見を申さんと思ってでござる。わずかの腕に慢心いたし、人もなげなる門前の大看板。俗に申す通り、生兵法は大けがのもと、今日より心をあらためて坊主は坊主らしゅう、仏の道に志されるがよろしかろう。それともたってと申されるなら、一撃のもとにこの世から、バイバイさせて進ぜよう。デフレ景気の昨今、諸事倹約が必要じゃで、引導などもあらかじめ、自分で渡しておくがよかろう」

覚禅坊きいて両眼血ばしり、坊主頭からぽっぽと湯気を立てて怒りだした。

覚「やあおのれ、どこの痩浪人かは知らねども、この覚禅の盛名をねたんで悪口いたすにっくいやつ、いで汝のその舌の根をとめてくれん、立ちあがって勝負いたせ」

こっちで見ていた門人たち、

△「どうだい立ち合わないうちから喧嘩だ、どっちが勝つと思う」

×「そうさ、天狗と天狗の喧嘩だ、鼻のまがったほうが負けだろう」

下らないことをいっています。

十「一図に勝負を望むとあらば、いかにも仕合ってつかわそう。さる代わりその方負けた暁は、

今日かぎり当道場を閉め、仏道に帰って念仏三昧に暮らすかどうじゃ、この儀しかと返答いたせ」

覚「うむおもしろい、万が一にも汝に負けたその節は、たちどころに道場を閉じて指南いたさぬ、さる代わり汝が負けたるそのときは、わが下郎として一生を召し使うぞ」

門人どもはこの体に驚いて、全体この勝負はどうなることであろうと、固唾をのんでひかえております。覚禅坊胤栄よもやこの侍が、柳生但馬守の長男十兵衛先生とは思いませんから、道場へつかつか降りたち、法衣をからげ、輪袈裟をもって襷となし、坊主頭に大鉢巻きをしめ、宝蔵院流三日月十文字の槍をりゅうりゅう引きしごき、やっと道場の真ん中に仁王立ちになったその姿。なにしろ身の丈六尺一寸というのですから、五条の橋の武蔵坊弁慶もかくやと思うばかりでございます。

十兵衛先生においては、襷鉢巻きをいたし、袴の股だち高く取りあげ、二尺五寸の木太刀を例のごとく片目はずしの正眼にかまえ、じりじりと進んで出る。覚禅坊ただ一突きに突き伏せてくれんと、すきをうかがっておりますが、どうしてすきどころか、木太刀の先が己れの槍先にぴったりとついているようで、毛筋ほどのすきもございません。

覚禅坊心中大いに驚いて、思わずじりじりっとさがっていく。十兵衛先生それにつけいり、突きこむ木太刀は、覚禅坊の眼には道場一ぱいのように見え、呼吸はみだれる、面上よりはぽたりぽたりと玉なす汗が流れ出る、はては眼もくらまんばかり。

十「やあ」覚「おう」

十「えっ」覚「やあ」

互いに気合いをかけ、にらみ合っておりましたが、さすがの覚禅坊もたまりかね、今はこれま

でと大喝一声、

嵐「えいっ」

と繰りだす槍は実に雷光石火、あわや十兵衛先生、田楽刺しかと思いきや、ひらり体をかわして、手元へ飛びこむよと見る間に、

十「えいっ」と嵐栄の小手を一つ打った。武芸鍛錬の十兵衛先生に打たれて、なにたまりましょう、腕がしびれて思わず持ったる槍をぼろりと落とし、これはと驚く肩口へ、十兵衛先生早くも木太刀をあてがって、

十「うーむ」

と一つおさえると、六尺一寸の大入道、小田原提灯のようにべたべたとへたばった。十兵衛なおも手をゆるめず、

十「さあどうじゃ、おのれごときは鳥なき里のワンマンじゃ思い知ったか」

嵐「うーむ、ま、まいった」

十兵衛それへ木太刀を投げだし、

十「さあこの上は約束によって道場を閉じ、指南をやめにいたすか」

さすが強情我慢の覚禅坊も、

嵐「恐れ入ったるお腕前、いかにも今日かぎり指南をやめ申さん、まずまずあれへお進みくださいれ」

と十兵衛先生を上座へすえ、その身はこちらへ平伏して、

嵐「これまでもあまた名ある武芸者と試合いたしたれども、いまだ一度もおくれを取ったるこ

となき覚禅坊、しかるに今日この拙僧をば、三歳の童子のごとく扱われたるお手のうち、人間わざとも思われませぬ。ご姓名は八木原重蔵とおおせられしが、今日までにさる武芸者ありとはうけたまわらず、これご変名と心得まする。なにとぞご本名お聞かせくだされとう存じまする」

十「うむさようか、しからば名乗ってつかわす、いかにも八木原重蔵とは仮の名、われは柳生十兵衛三巌であるぞ」

聞くより嵐栄、はっとばかり驚いて、

嵐「へへっ、これは柳生の若殿にあらせられしか、知らぬこととて最前よりの雑言無礼、なにとぞお許しのほど願い上げまする」

十「過ぎたることを、とやかくとがめても詮ないことじゃ」

覚「ありがたきしあわせに存じまする」

ここに覚禅坊は自らの至らざることを翻然とさとり、直ちに道場を閉じて一念発起、仏道専念の旅に立とうといたしますので、十兵衛先生もその改悛をよろこばれ、道場はそのまま覚禅坊にあずけるという形で、引きつづき門弟を取りたてるようにいたさせました。

やがて打ちとけてくさぐさの物語に移りましたが、このとき十兵衛先生、

十「覚禅、先刻道場においてあまたひかえし門人のなかで、向かって右側上席より五人目にひかえし少年、あれはなんと申す者であるか」

嵐栄にっこりして、

嵐「さてこそ先生のご活眼、あの少年をお認めになってござりまするか、彼は丑之助と申し拙僧秘蔵の弟子といたしております者……」

十「うむさもあらん、一応呼びよせてもらいたい……」
嵐「かしこまりました……、ああたれか丑之助を呼べ」
○「はっ、丑之助殿、先生のお呼びでござりまするぞ」丑「はい」
とそれへまいりましたるは、いまだ前髪姿なれども、骨格たくましき一少年でござりまする。
十兵衛先生じっとみられて、
十「丑之助と申すはその方か」
丑「さようにござりまする」
十「何歳じゃな」
丑「当年十五歳にあいなります」
十「うむ……いかに覚禅坊。その方と試合のときに、その方の槍先と予の太刀先とに眼をくばる、実に右眼左眼と申そうか、生まれながらにして武芸の玄妙を会得せるとはこの少年のこと、後日かならず名を天下にあげるであろう。覚禅丑之助とやらを余に譲りくれぬか」
嵐「ははっ、何分ともよろしく」
十「丑之助、いま三年は当道場にあって覚禅坊の指南を受けおれ。のちには十兵衛手もとに呼びよせてつかわすぞ……」
とおっしゃった。むべなるかなこの者こそ、伊賀国山田の荘、荒木村の住人にて、彼の織田信長公の刀のさきに突きさした饅頭を食らい、信長公の心胆を寒からしめたという、荒木摂津守村重の末孫、荒木丑之助、のちあらためて荒木又右衛門源吉村となって、荒木の前に荒木なし、荒木の後に荒木なし、といわれたくらいの腕前になった人でございます。

十兵衛ほどの方も、又右衛門の腕前には舌をまいて驚かれ、一万三千人あった門人のなかより選んで、柳生流天地人の極意を、ことごとくこの又右衛門におゆずりなされた。のち本多侯につかえているうちに義理ある舅のため、伊賀の上野において、天下武術の名人三十六人を斬って、義弟数馬に本懐をとげさせた。これは日本三仇討ちの一に数えられた、有名な伊賀の仇討ち、梅檀は嫩より香しとか、又右衛門の名は、十兵衛先生の活眼によって、いとど名高い、りっぱなものとなったものでございましょう。
かくて十兵衛先生は、改めて丑之助と師弟の約を結ばれ、覚禅坊にもよくお頼みおきになって、ご自分は中山新三郎を召し連れ、山城の地に足を入れ、まず京都へご到着。当地の今出川には、吉岡又三郎兼房先生の道場がありますので、これへお訪ねになったが、折あしく兼房は北国路へ旅立った後でありましたので、まことに本意ないことにおぼしめしたがいたしかたない、まず市中をゆるゆる見物いたそうというので、三条小橋に宿を取り、市中を毎日見物しておられました。

侍姿の不思議な宿引き

ご承知の通り京都には、まことに見物する場所が多うございます。皇居は申すに及ばず、寺社の多いこと、九十三本山といって、仏教の本山が九十三もあるというのでございます。その他金閣寺、銀閣寺、北野天神、八瀬大原、賀茂の社や大徳寺、名所という名所、古蹟という古蹟は、

十兵衛先生のこるくまなく見物いたしましたので、もはやこの地には用もないと、これから伏見へでて、大阪への夜船に乗ります。これが有名な淀川の三十石、十三里の道のりを寝ていて着くというのですから、交通の不便な当時は、ずいぶんと重宝がられたものです。今では京都と大阪の間は汽車もあり電車もあり、わずか一時間ばかりで交通ができますから、まことに便利でございます。十兵衛先生もこれへ乗って翌朝大阪八軒屋へ着きました。船着場には旅籠屋の宿引きがもみ手をしながら、

×「えー河内屋はてまえでございます。畳も新しくて行燈もはりかえてございます。どうぞてまえのほうへお泊まりを……」

△「えーてまえは近江屋で、どうかお泊まりを願います」

□「私は兵庫屋でございます」

と口々にわめきたてている。十兵衛先生、まことにこれをうるさいことにおぼしめして、

十「新三郎こっちへまいれ」

混雑する人ごみの中を押しわけて、八軒屋の往来にあがると、

○「ええお武家さまお泊まりなさるのではござらぬか、ご当地ご見物ならば拙者方へお泊まりを願いたい」

と言葉横柄にしきりとすすめる宿引きがある。十兵衛先生どうも武骨な男だとごらんになると、年ごろ四十歳前後、身に黒木綿の紋付きに白縞小倉の袴、長い刀を一本さし、右手には鉄扇をにぎり福草履をはいている、頭はと見ると肥舟をあらう藁だわしのよう。

十「その方はなんだ」

○「拙者は当大阪戎橋北詰東へ入りましたるところの、樽屋藤四郎と申す旅籠屋でござる、なにとぞご投宿のほどを願いたい」

十「その方姿を見るとどうやら侍のようであるが、それでいて旅籠屋の宿引きをいたすなどとは、全体いかがしたのじゃ」

藤「へえ、これは恐れ入りました。実は私は宿屋の主人でございますが、剣術がなによりすきで、宿屋のかたわら道場を開き、町の若者またはお泊まりの武家でも未熟な方へお教え申しまする。それで世間では私方を剣術宿剣術宿といって、当地通行の武家方がたいそうひいきにしてくだされる。かような訳で私も武士の風体をしているので……へえ、どうかお泊まりを願いたい」

十「はっははははなるほどそれはおもしろい宿屋じゃ、しからば一宿いたそう」

藤「どうもありがとうござる。いざご案内いたそう」

藤四郎という男、先へ立って肩で風を切って歩いていく。もし通行の者がまちがって藤四郎の袖でもさわろうものなら、藤四郎眼をむいて、

藤「無礼者っ、ひかえろっ」

と叱りつけます。そのあとから十兵衛先生と新三郎が、

十「新三郎、この男はどうやら慢心いたしておるようじゃな」

新「御意にござります。かようなやつの所へお泊まりになっては、いろいろな面倒を申し出るやも知れませんから、他におかえあそばしてはいかがでございます」

十「いやいやこれもかえって旅のなぐさみじゃ、まあ今晩一晩とまって見よう」

話していると、

藤「あいや御両所」十「はあなんで」
藤「失礼でござるが、貴殿方はご直参でござるか、それとも陪臣でいらっしゃるか……いずれにしても江戸詰めの方とお見受け申したがいかがで」
十「いかにもわれわれは江戸の者でござる」
藤「ははあ、すると天下の御直参でございまするな」
十「いやわれわれはかく大小を帯しておりはするが、実は侍ではないので……」
藤四郎は笑って、
藤「ははは冗談おっしゃいますな。侍でない方が、なにゆえ帯刀なされます」
十「いやこれはそのいわれがあるのじゃ、実は亭主、われわれは江戸芝三縁山増上寺の寺侍でな」
藤「へえ」
十「このたび、中国のさる所へ大金を持参するようおおせつかった」
藤「へえなるほどね」
十「この腰の刀はどろぼうよけに帯してはいるが、もともと寺侍だ、その実、刀を抜く術も知らないくらい、まことにはずかしいわけなので」
藤「ははははいくらごまかそうとしてもいけません。さてはなんでござるな、拙者が剣術をたしなむと聞いて、もし試合でも申しこまれてはと思うところから、さようにお隠しなされるのだな。さようなご心配は決してご無用、拙者は未熟な方なればお教え申そう、強い方にはご教授にあずかろうと思ってこそおれ、弱い者いじめは決していたさぬから」

十「いやところが全く侍ではないので」
藤「いやいや先刻よりのご様子を見受けまするに、第一眼だ。その眼の配りから見ると、剣術は相当習っておられると思われる。拙者から見ると、すこし未熟かは知らぬが……」
こやつ恐ろしい天狗だなと思いながら、
十「いや、この眼は、ごらんの通り私は隻眼がつぶれて、一眼ばかり使うところから、かように眼性が悪くなったので、なかなか剣術の『け』の字も知らんのでございます。こういうことなれば、平生に少しでも習っておけばよかったと気がついても、いまさら稽古をしてくれる人もなし、まことにどうも……」
藤「ふーむ、そりゃ全くでござるか」
十「全くの全くでないのといって、町人のその方でさえ、剣術を知っているところから、さように侍の風をしていばっていられるくらいだ、もしまったくの侍で、剣術の一手でも心得ているのならば、かような恥ずかしいことを申すはずがない」
藤「なるほど、それも大きにそうだ。それが全くならば、てまえどもは、商人百姓などの宿はいたしません。仲間の者に頼んで、お武家さまばかりをお泊め申し、ただいまでも武芸上達の先生方が、四五人とまっていられるから、剣術の稽古をくださるように、拙者からお取りもち申し上げてもよろしい。また拙者もお教え申し上げてもよろしい」
十「さよう願えるなら、どれほどうれしいか知れん。しばらく逗留いたすつもりでありますから、どうかお願い申す」
藤「委細承知しました。さようさね、まあ三月も一所懸命やれば、一人前にしてあげる」

十「ああさようで、まことにありがとう存じます」
新三郎そばに聞いていて、先生もずいぶん人が悪いと、内々くすくす笑っております。亭主はそんなことは頓着なく、
藤「さあこれがてまえの家でござる、ずっとお入り下され」
という。見ると女中など一人もおらず、屈竟な若者ばかり、それがいずれも黒木綿の紋つきに白縞の袴、中には剣術の稽古着などを着ている者もおりまする。
○「ああただいまお着きでござりまするか」
藤「これこれ、このおふたりを奥の八畳へお通し申せ」
○「はいどうかこちらへお通りくだされ」
十兵衛先生、なるほどこれはおもしろい家だ。宿屋らしいところはない。まるで剣術の道場へでもきたようだと思いながら、奥座敷へ案内される。座敷とてもその通りで、床の間には稽古道具がちゃんと飾ってございます。
十「新三郎、どうもおもしろい宿屋もあったものじゃのう」
新「どうも驚きました。しかしあのような天狗でございますから、先生のお言葉を真に受けて、教えると申してまいるかも知れません」
十「予もそう思っている。そのときには教えてもらおうじゃないか」新「いやどうも……」
十「今から申しておくが、その時には、知らぬふりして打たれてやれ、こっちから決して打つではないぞ」新「かしこまりました」
ところへがらり唐紙をあけて入ってきた藤四郎、見ると稽古姿でございます。

藤「これはおくたびれでございましょう。つきましては、これからご見物においでなさるもよろしゅうございますが、ちと空もようもなんでございますし、風呂も少々わきませんゆえ、この間にちょっとお稽古をいたしましょう。どうか道場へおいでくだされ」

十「いやご親切はかたじけないが、実は昨夜夜船で十分眠らなかったため、ひどくくたびれているから、稽古は明日からにでもしてもらおう」

藤「それだからいけません、なに少々くたびれていても、一三本やればくたびれなんぞは抜けてしまいます。さあすぐにおいでなさい。べつだん稽古をしたからといって、旅籠代のほかに余計いただくなどはいたしません。まったく無代で教えるのだから、さあさあご遠慮なしにおいでなさい」

十「さようでござるか、ではお稽古を願いましょう。新三郎稽古してもらいましょう」

新「私は今日だけご免こうむりとうございます」

藤「なんです、あなたは若いくせに意気地がない、さあお越しなされ」

無理に道場へ連れてきた。なるほど、道場もなかなか手広うございます。

十「新三郎、その方一つ稽古してもらいなさい」

新「はい、ご亭主、お手やわらかにお願い申します」

藤「あちょっと申し入れるが、あなた方はいかにも私方のお客さまには違いないが、かように竹刀を持って道場へ立ち出でるからは、以来亭主亭主ということだけはご免こうむります」

新「はあするとなんと申しますので」

藤「いうまでもなく師匠ですから、先生とこうおっしゃっていただきたい」

新「かしこまりました、では先生よろしくお願いいたします」

藤「ああよろしい、そこでご両名ともご姓名を承知いたしたい、門人として姓名を知らんではなはだもって不都合なわけだ」

新「これはごもっともで。私は中山新三郎と申します」

藤「中山氏か……ああそちらの方はなんとおっしゃる」

十「私は八木原重蔵と申します」

藤「八木原氏ですな、よろしい。さあ中山氏、支度をさっしゃい。最初はすべて、面小手をつけてやるものだが、それではどうも上達がおそい、素面素小手でやりましょう、支度がよければここへおいでなされ」

新三郎おかしさを無理にこらえて進みでる。

藤「まず第一に構えということがかんじんでござる。そうそう、そのように。中山氏は寺侍などとおっしゃっても、剣術は相当おやんなすったと見えるな。竹刀の持ちようや眼のくばりは、素人ばなれがしておりますぞ。しっかりおやりなさい。物にしてあげるから」

新「よろしくお願い申します」

と立ち合って見るとどうも驚いた。藤四郎のほうが少しもできておりません。おやおやひどいお師匠さんもあるものだとあきれたが、決して打つなと、十兵衛先生のお言葉があるから、打つこともできず、いいかげんにあしらっておりましたが、しまいにはいやになって、わざと左の小手を一本打たした。

新「まいりました」

藤「いや中山氏、なかなかおやんなさる。てまえも今までには、ずいぶんと大勢の者に稽古をしてやりましたが、貴公にはよほど骨が折れた。まあ一所懸命稽古なさい。貴公は筋がいいから上達がはやい」

新「さようでございますか、どうもありがとうございました」

と負けたほうの新二郎なんともないのに、教える亭主がだくだく汗を流している。

藤「さあ今度は八木原氏、貴公お支度をなさい」

十「はい、私は中山とちがい、カラできませんから、どうかそのおつもりで、お教えなすってください」

藤「ああよろしい、出来なければ出来ないと、正直におっしゃられるのは教えやすいが、知ったかぶりをする者は、どうも憎くて同じ打つにも強く打つようになる、さあここへでなされ」

知らぬが仏、釈迦に説法

藤四郎竹刀を持って、

藤「八木原氏これをよくごらんなされ、かようにするを上段のかまえという、又これを中段、こうするのは下段、これは大上段と申します。しかし大上段に取るのは、よほど上達した者でないとかまえられんものだ。第一竹刀が上へあがらん、また相手の竹刀が、短く見えるようになれば、もうりっぱな一人前だ。どうも出来ないうちは、同じ寸法の竹刀を持っていながら、先の竹刀が五尺にも七尺にも見え、己れの竹刀が短く見えるものだが、それがもう拙者ぐらいに上達して来ると、東西南北ともに、鉄壁をもって囲まれたるがごとく、打ちこんで来ても打たれるものではない。さあ打てるものなら、打って見さっしゃい」

十「ははあ、竹刀はこう持つので……」

藤「さよう、どうです打ちこむすきがあるまいがな」

どうして戦後のバラックのようにすきだらけだ。十兵衛先生ひとつ驚かしてやろうと、わざと竹刀を左の手に持って、藤四郎の眉間を軽くポンと押した、軽いといったところで、武術鍛錬の十兵衛先生が押すのだから、藤四郎よろよろっとしてどっかり尻餅をついた。

藤「ま、待った……どうも乱暴なことをする人だ、左の手で人の頭を押すなどという、無法な剣術があるものではない。なにも知らない人だと思うから、こっちで油断をしておればいい気になって、頭を押し倒すなど……」

十「でも先生がどこからでも打てとおっしゃいましたから……」

藤「いくらいったといって……その様子ではわざと知らぬふりをして、こちらをだますつもりだな、その儀なればこちらにも覚悟がある。さあ今度は尋常の勝負をするから、さよう心得なさい」

十「それはめいわくで、まったくなんにも存じませんので……」

藤「存ぜぬ者が竹刀で人の頭を押すというやつがあるものか」

藤四郎立腹したと見え、今度は容赦もなく、乱打ちに打ってかかります。十兵衛先生それを右

にはらい左にさけ、しばらくはからかっておいて、すきを見てはポカッと打つ。藤四郎もう夢中になっているから、打たれても叩かれてもわからない。竹刀を盲目滅法に振りまわしている。

十「これ先生、もういいもういい」

といわれて、びっくり気がついて見ると、八木原重蔵の十兵衛先生、向うでぱかりぱかり煙草をふかしながら、にこにこ笑っている。藤四郎頭からぽっぽっと湯気をたてて、

藤「やあいつのまにそんなところへ……ぜんたいだれがやめろといいました。試合中、勝手にやめる者がどこの国へいったってあるものか、さあこれへでなさい。尋常の勝負をいたそう」

すると道場の入り口から、

○「これこれ亭主亭主」

と呼ぶ者があるからふり返って見ると、四五日前から逗留している、沼田三郎右衛門という武術修行者。

藤「やあ、これは沼田先生でございますか」

三「その方なにをしているのじゃ」

藤「いやどうも変な男で……あの人でございますがね、江戸芝三縁山増上寺の寺侍だ。剣術を知らんから教えてくれとおっしゃるので、稽古をしてやっておりましたが、どうも骨の折れる人で、竹刀で人の頭など押したりなんかいたします。初心者は作法を知らないのでどうも困ります」

三「亭主、かおを洗ってこい」

藤「顔は朝洗いましたが、どこへか墨でもついておりますか」

三「ばか、全体あれにあられるのは、どなただと心得ている」

藤「増上寺の寺侍で……」

三「これ亭主よく聞け、我れ人共に武芸熱心の者は、今日はお乗りこみにあいなるか、明日はこの大阪へお立ち越えあるかと、指折りかぞえてお待ち申すところの、当時海内無双の大先生、柳生十兵衛先生でござるぞ」

藤「ええっ……沼田さんおどかしちゃあいけません」

三「ばか、まださようなことを申しておるか、この方もご挨拶こそ申し上げんが、名古屋おもてにてかげながら、お見あげ申したことがある、その大先生に稽古なぞとは、これこそ釈迦に説法だ、別にご無礼はいたさなかったか」

樽屋藤四郎青くなって、

藤「そいつあ飛んでもないことをいたしました。私はまた、そんな方とは存じませんから、一人前に仕あげてやる約束をしました……」

三「さような無礼なことをいたしてはいよいよあいすまん、早くお詫びを申し上げろ」

藤「へえ……えっ少々うかがいます。あなたさまが名高い柳生の若先生でいらっしゃいまして……」

十「いやさような者ではない」

藤「でもてまえどもへ、五日前からご逗留なされます武芸の先生が、名古屋でお見受け申した、たしかに柳生十兵衛先生に相違ないから、さっそくお詫びいたせと叱ります」

十「はっははは、見知っている者がいたとあれば、どうもしかたがない。いかにも柳生十兵衛だ」

藤「えっ……どうも御前も人が悪うございますな、剣術のけの字も知らない寺侍だなぞとおっしゃって……」

十「ははは、どうだな物になりますかな、藤四郎先生」

藤「恐れ入りました」

沼田三郎右衛門に向かって、

十「その方であるか、予の本名を明かしたのは」

三「恐れ入りました。打ち捨ておけばかような熱の高い天狗、この上どのようなご無礼申すやも計りがたいと存じましたるにより、申し聞かしてやりましたので……」

十「いや今すこしだまっておってくれると、一人前にしてもらうところであったに、はっははは」

藤四郎すっかり恐れ入って、

藤「御前、ちょうど風呂がわきましてございます、どうかお召しを願います」

十「さようか」

と風呂へ入られる。つづいて新三郎も、入浴をすませると、膳がでて居ります。藤四郎こんどは羽織袴でまいり、

藤「ごらんの通り、手前どもには、女中というものはいっさい召し使いません。いずれも男ばかりでございますから、私がお給仕に差しでました」十「さようか」

十兵衛先生、杯を取りあげて、

十「ふむ、さすがは灘伊丹に近いところだけあって、酒はよろしいの」

藤「恐れ入ります」

十「その方はたとえ一刻でも予のためには剣術の師匠だ、杯をつかわす」

藤「うへえ恐れ入ります」

十「ときに亭主、その方は東軍流を学んだのじゃな」

藤「へえ、よくごぞんじで」

十「いや、竹刀を持つにも流派によってそれぞれの形のあるものじゃ、その方のはまさしく東軍流に相違ない」

藤「恐れ入りました。まったく東軍流でございます」

十「そうであろう、東軍流は上州白雲山東軍坊の発明で、当今この流儀をよくつかう者は川崎鑰之助、衣斐丹石入道の二人ぐらいじゃ、しかし丹石は東軍流より一流を編みだして、丹石流と称しているが、その方のは川崎鑰之助の派に属しているようだの」藤「へえ」

十「太刀先三寸かかれば、兜でも鎧でも微塵に打ちくだくというのが東軍流の流儀じゃが、その方は川崎にでも弟子入りいたして学んだのかな」

藤「いえそんなえらい先生ではございません。さよう……ちょうどてまえどもへ満一年ばかりご逗留でございました、奥州筋のご浪人で赤松典膳とおっしゃる方に習いました」

そばで聞いていた新三郎、赤松典膳と聞いて、取りあげた杯をばったり取り落とし、眼をぎりぎり釣りあげながら、にじりだそうとする体に、十兵衛先生じろりと一つお睨みなされた。新三郎もこれに気がついて、そのままひかえる。

十「うむ、赤松典膳に習ったのか」

藤「へえ先生はご存じでいらっしゃいますか」

十「存じている。典膳はたしか津軽越中守の浪人で、囲碁はなかなかうまいが、酒の上がよくないやつだ」

藤「へえさようで……」

十「木挽町の道場へ立ちよって、一ヵ月ばかりも逗留いたしていた。予も一手二手は教えてつかわしたものだが、当時はいずれにおるかな」

藤「先生はご承知でいらっしゃいましたか、さようなれば申し上げますが、じつは赤松先生のご住所は、あまり人に知らしてくれるなと、お頼みでございました。ちょうど私方へご逗留中に、これもてまえ方のお客さまで、周防岩国の吉川監物さまのご家中、松下重右衛門とおっしゃる方と、碁をお囲みになってからご懇意になり、その方のお手引きで、今では吉川さまへご奉公しておいでなさいます」

俄侍の名が鬼の清勝

十「ふむ、典膳も吉川家へ随身いたしたか」

藤「へえ、初めには三十石ちょうだいしておられましたが、先日のお手紙では、五十石になり、家中の評判もよし、ぜひ一度は錦帯橋を見物がてら来てくれとおっしゃって下さいましたが、さて、一人旅もなんとなく心細いものだから、だれか金毘羅まいりから安芸の宮島、錦帯橋とご見物の方でもあったら、おともしてまいろうと存じております」

十「さようか、予はこれから、西国路へ立ち越えたいと思うが、ちょうど幸いじゃ、一応周防岩国へ立ちより、典膳をたずねてつかわそう、どうじゃその方、予の供をいたさんか」

藤「ありがとうございます、願ってもない幸いで、どうかお供を願いとう存じます」

と話がまとまったので、善は急げ、それでは明日出立ということになりました。

翌日早朝、三人打ちそろうて、大阪おもてを発足いたしました。今までは新三郎と二人旅、それに新三郎は温和なたちでございますから、道中ごく静かであったが、藤四郎が供をするようになってからは、どうもにぎやかだ。真っ先に大手をふって、道中の馬子人足をおどかしたり、問屋場役人を困らせたりいたします。

十兵衛先生も藤四郎のたわいのないありさまに、旅のたいくつを忘れて、こともなく播州姫路の城下へ到着いたしましたが、ここにはからず藤四郎、一つの騒動をひきおこすというお話。

かたつむり角ふり分けよ須磨明石――兵庫を出立してからの街道は、実に風景がよろしゅうございます。ところへ藤四郎のこっけいなありさまに、十兵衛先生もつかれをわすれて、早くも播州姫路のご城下へお入りになり、当地で有名な旅籠屋、二階町の鍵屋三右衛門方へお泊まりにあいなる。

十兵衛先生は、新三郎が日一日と仇敵のありかに近づくにつれて、さすがに心配になるものか、顔色とかくすぐれぬ様子をごらんになり、道中は藤四郎を相手にご冗談口をきかれ、また宿へつくと酒宴をもよおされては、新三郎の心をはらさせようとなされる。新三郎は先生のお情けを思

うては、気を取りなおし、愉快げに話しておりますが、すぐとかたきのことが心にかかって、ひとりしずんでしまう。それゆえに先生は宿へつくとすぐにご酒宴。

十「新三郎たくさん飲め」

新「はっありがとう存じますが、今日はなんとなく気分がすぐれませんで……」

十「これこれさようなことでは、大切の場に立ちいたって、十分の勝負はおぼつかない、さようなことは忘れて

しまって飲め……」

忘れよといってもそこが不倶戴天の親の敵忘れられるものじゃございません。しかし新三郎も先生の力づけを喜んで、

新「恐れ入りました。先生のお言葉通りにいたします」

十「かたきのことを万一藤四郎に悟られるようなことがあっては一大事、そぶりにも出すではないぞ」新「かしこまりました」

といっているところへ、藤四郎がらり障子を開けて、

藤「いやどうも、鍵三は京阪にひびいた旅籠だけに、風呂場などはよく行き届いたもの……どうもいい湯でございますなあ」

十「藤四郎、その方風呂へ入るに両刀はいらんではないか」

藤「いえ、こうして先生のお供をいたしますのも、両刀をたいし、武士の風体が、したいばかりでございます」

十「はっははははおもしろいやつだ。両刀をたいしておるのもよいがまあこれへきて一杯飲め」

藤「いえ、私はこれから、明日当姫路のご城下を出るときの、武者ぶりの稽古をいたします。ええなんでございました。今日城下の入り口で私がこういうぐあいに肩をいからして、鉄扇をかようにかまえて歩いてまいりますると、向こうからきた五人連れの武士が、威光に恐れたものと見えて、ずーっと道を開きました、あのときのうれしさは忘れることができません。それじゃから、これから通行人をおどかす歩きぶりの稽古をいたしその上でご飯をちょうだいいたします」

十「これこれさようなばかな稽古はいたさんでもいい」

藤「まあ見て下さい、足の運びこれくらいで……」（足音がドスンと鳴る）

十「藤四郎いいかげんにいたせ、となり座敷に客人でもあれば、騒々しくてめいわくいたされるぞ」

藤「しからば廊下でいたしましょう」

十「廊下とてもやかましいことは同じだ、もうよせよせ」

藤「いえそうではございません。昔はいざ知らず、今日は柳生十兵衛先生の家来、樽屋藤四郎鬼の清勝、町人であったなどと見られましては、拙者ばかりの恥辱ではございません、先生のお名前にかかわります」

エケチット極まる奴じゃ

樽屋藤四郎長い廊下へ出て、半刻ばかりドシドシやっているうちに、どう取り違ったか、がら り障子をあけると、座敷がちがっていた。そこには七八名の同勢、いずれも屈竟な若侍ばかり、ずらり車座になって酒宴をしている。藤五郎はっと思ったが、そのままだまって出るわけにもいきませんから、べったりそれへ座って、

藤「これは失礼いたしました」

この体に若侍どもは、なにかわれわれに用事があってきた人と思ったから、いずれも急いで居ずまいを直し、中にも藤四郎のまぢかにおりました一人が、

○「これはこれは取り乱したところをお目にかけて、失礼つかまつる。われわれは肥前島原の藩主、寺沢兵庫頭家来長瀬玄蕃、高野忠兵衛、宮川六郎、来島仙蔵、溝崎源五郎、関忠作、山本数馬と申す者、貴殿はいずれから何用あっておいで下されたるか、ご用のすじおおせ聞かされたい」

先方が鄭重に出て来たから、藤四郎ますますめんくらって、がたがたふるえだした。

藤「へえ、どうぞお見のがしを……私は大阪戎橋北詰西へ入る、旅人宿の藤四郎と申す者、ど、どうぞお引きたてを……」

○「なんとおっしゃる、宿屋藤四郎殿とか、ははしからばなんでござるか、賤か岳七本槍の節、北国の豪傑といわれた宿屋七左衛門のご一門で」

藤「いえ、そ、そんなめんどうな宿屋ではございません、旅人宿で樽屋藤四郎と申します。もし大阪へおいでの節は、どうぞごひいきを願います、上旅宿料は二匁五分、普通は一匁五分……別にお茶代はいただきません、障子行燈はちかごろ貼りかえましてございます、お寝間のおとぎは旦那さま方のお勝手次第で……へえ」

○「なんだ、しからばその方武士ではないのか」

藤「へえ宿屋の亭主でございまするが、さる方のお供をして中国へまいりますもので、つい座敷を取りまちがえて、あなた方のお座敷へ入りましたのでございます。どうかごかんべんのほどを……」

○「たわけめ、素町人のぶんざいにて大小をたいし、あまつさえ他人の酒宴の場へことわりもなく踏みこみ、行燈や障子を貼りかえてあるの、寝間のとぎは勝手だのと、無礼のかずかず容赦はあいならん」

藤四郎顔色をかえて、

藤「どうもあいすみません、悪いところは幾重にもお詫びいたしまする、どうかごかんべんなされて下さりませ」

○「いいやならん……おのおの方、こやつをどう致しましょう」

△「ふむ、町人のぶんざいで武士の風体をいたし、他人の座敷へ踏みこむなどとは、エケチット極まるやつじゃ。手討ちにいたすべきでござるが、旅のことゆえ、われわれの拳骨だけでゆるしてやったらよろしゅうござろう」

×「いやそれはおもしろい、こりゃ藤四郎とやら、その方がさようにあやまるゆえ、命だけはゆるしてつかわすが、その代わりわれわれの拳骨一つだけは受けてもらおう」

藤「そ、そんな手荒なことを……」

というやつを、ずるずると襟髪つかまえて手もとへ引き寄せ、いきなりポカリーッ殴りつけた。

藤「あっ痛た、ど、どうぞかんべんを……」

△「宮川氏がすんだら、こちらへまわし下され……やい町人、鎮西武士の鉄拳うけて見い、ははーっ」

拳骨に息を吹きかけている。

藤「どうぞご免なされて……暴力などとは民主主義に反します」

泣き声をあげてあやまっている藤四郎の襟髪とって、又ポカリーッ、痛いの痛くないのじゃございません。

藤「ど、どうぞご免なされて……」

△「待て待て、まだ打ちはしないぞ」

藤「いえ、たしかに今一つちょうだいいたしました」

△「いやあれは見当つけて見たまでじゃ」

藤「見当なんかつけられちゃたまるもんじゃございません、どうかごかんべんを……」

△「やかましい、えいっ」

ポカリーッ。

藤「うわーっ……」
△「いざ来島氏の順番でござる」
双六でもする気になっております。
藤四郎、七人の者にかわるがわる殴られて、頭中瘤だらけになり、ひいひい悲鳴をあげている、おまけに大小から鉄扇まで取りあげられてしまった。
○「さあ町人、これでかんべんいたしてつかわす、しかし大小鉄扇の三品は、このましかとあずかっておくぞ、もし取りもどしたくば、大阪倉屋敷へそれぞれの手続きをもって訴えてでろ、われわれもこれから大阪おもてへご用あってまいるものであるから、そのときに返してつかわす」
藤四郎、大小鉄扇などはどうでもよい、命あっての物種とまっさおになって、ほうほうの体で逃げてきた。十兵衛先生はじめから、この様子をお聞きになっておられました。藤四郎が座敷へ青くなって駆けこんできたので、
十「はっはっははは、藤四郎いかがいたした。その頭の瘤はどうしたのだ。……はっはっはっ……新三郎その方まいって、大小ならびに鉄扇を取りもどしてつかわせ」
新三郎委細かしこまって、
新「藤四郎、だからいわないことじゃない、生意気なことをするから、そういうことにもなるのだ、拙者がいって取りもどしてやるから案内いたせ」
藤「はい、しかし、先方は大勢でございますよ」
新「たとえ幾人おろうとも恐れるところはない、早く案内いたせ」

藤「かしこまりました」
藤四郎さきに立って廊下へ出た。
十「新三郎待て待て」新「はい」
十「決して手あらなことをいたしてはならんぞよ」
新「かしこまりました」
十「いや大小はこれへ置いていけ、丸腰でまいれ、刀をさしていくとあまり大形になる」
先生のおおせいたしかたなく、新三郎大小を座敷にのこして丸腰となり、藤四郎を案内にたてていく。
藤「中山さまここでございます」
新「案内を申しこめ」
藤「どうしてあのときのことを思うと、私おぞけ立ちます。中山さま一つお願い申します」
新「ははは意気地のないやつだなあ、どけどけ」
新三郎座敷の入り口へ手をついて、
新「ええお頼み申します」
○「どなたでござる、ご遠慮なくお入りください」
新「しからばご免こうむります……これは初めて御意得申します。てまえは奥州津軽の浪人中山新三郎と申す者、せんこく座敷を取り違えてご無礼いたした、樽屋藤四郎の連れの者でござりまする。うけたまわればとんだ粗相をいたし、ご興の妨げをいたしましたる由、まことに申し訳がござりません。悪しきところは拙者かわって幾重にもお詫び申しますれば、なにとぞごかんべ

んの上、お取りあげの三品、てまえまでおもどし下さりょうなれば、ありがたいしあわせに存じまする」

これを聞いたかの武士ども、

○「いやならぬ、せっかくでござるが品はおもどし申すことまかりならん。さように心得さっしゃい」

新「ええさようおおせられないで、拙者に免じ、おもどしのほど願わしゅう存じます」

○「だまれ、一旦ならぬといえばあくまでももどすことまかりならん。その方は全体なんだ。いま聞いておれば、どこかで扶持にはなれた素浪人、大方、せんこくの馬鹿者の番頭か手代でもあろう。あのばか者め、町人のぶんざいにて大小をたいし、鉄扇を持つなどとは、不届き至極のみならず、われわれの座敷へ一言のことわりもなく踏みこんだ無礼者、本来手討ちにもいたすべきじゃが、命だけは助けてつかわしたのだ。たって大小鉄扇をもどして欲しくば、大阪へ立ち帰った上で、それ相当の手続きをして倉屋敷へ訴えでろ、それまでは何者がまいってももどすことあいならん」

新「それでは当人がこれよりの道中に差しつかえますので、なにとぞ……」○「だまれ、町人が道中いたすに、大小がなんの入用だ」

新「いえ、じつはあの者これまでは町人なれど、今日にては武家奉公いたしおりまして……」

○「なに武家奉公をいたしおると、してその主人はなんと申す」

新「ただ今は申し上げかねまするが、りっぱな主人でござりまする」

○「その方さようなことを申して、われわれをかたる了簡と見える。どうあってももどすことはあいならん。たって欲しくば、腕ずくで取れ」

新「これは異なことをおおせられる。これまでお詫びいたすも聞き入れずして、腕ずくで取れなどとは、乱世昭和の国会にも等しき無法、てまえもその三品をおもどしくださるまでは、誓ってここを離れません、さよう心得さっしゃい」

新三郎、なかなかしゃれたことをいいます。

聞いて七人はいよいよ腹をたて、

○「うむぬかしたな。それ宮川氏こやつから引きずりだそう」□「心得た」

と酒がなす業、二人がずかずかと進みより、新三郎の左右の手をひっつかんで、引きだそうとします。新三郎先刻から、腕がむずむずしていたところだ。

新「なにを無法なさる」というより早く、一人をえいっと突くと、よろよろとしてドタリ尻餅をつく。見向きもやらずいま一人の利き腕おっとり、肩にかついで岩石落とし、エイッとかけ声もろとも、一間ばかりの彼方へ投げつけた。

鶴の一声に一同ギャフン

この体に若侍ども、

大勢「それ青二才が味をやる、ぶった斬ってしまえっ」

とおっとり刀でばらばらと立ち上がって斬ってかかる。

心得たりと新三郎、十兵衛先生より教わった秘術の腕だめしはこのときと、今や真っ向より斬ってきたやつを引っぱずして、利き腕とって叩きつける、右より来たのをひらりかわして、左に投げる、左からのを右へ投げる、途中で行き会ったのが、おまえのぼりかわしゃくだりだよ——まことにのん気な話で——ドスン、ガラガラガッチャン、襖は破れる、障子は折れる、皿、小丼鉢がこわれて肴が飛びだす。徳利が倒れる、酒が流れる、それはどうも大変なさわぎ。となり座敷の客がおどろいて、

客「それ喧嘩だあ」

とばらばら逃げだす。鍵三ではお客同士の喧嘩ときいて、家中一同かけあがってまいりましたが、喧嘩の相手は侍同士で、長い刀をふりまわすものですから、なにぶん危なくって近づけない。藤四郎この体に驚いて、十兵衛先生の座敷へかけこんできて、

藤「先生、た、大変でございます。とうとう喧嘩になりました」

十「うむ、先刻から容易ならぬ物音がしたと思ったが、さては新三郎もがまんいたしかねたと見えるな」藤「へえ」

見ると藤四郎、後ろ鉢巻きいたし、刀の下げ緒を取って襷をかける様子。

十「これこれ藤四郎、あわててなにをいたしおる」

藤「いよいよ喧嘩でございましょう。先生がお出ましになれば、私も及ばずながら……」

十「ばか、だれが喧嘩をすると申した。第一その方などがまいったとてなんになる」

藤「へえそれは私もよく存じております」

十「知っていて及ばずながらとはなんだ」

藤「へえ逃げだすつもりで——」

十「たわけめ、その方はここにひかえていろ」

悠然と立ちあがった十兵衛先生、小刀を前半にたばさみ、右手に一尺二寸南蛮鉄鯨骨、京の吉則の大鉄扇をさげて、出ていこうとなされますので、

藤「先生、先生、刀をお忘れなされていらっしゃいます」

十「さようなものはいらん」

藤「それはいけません、先方は大勢で、しかも刀を抜いていますよ」

十「刀を抜いているのがなんじゃ、それを恐るる十兵衛と思うか」

と座敷をお立ち出でになり、こちらへやって来ますと、今や喧嘩の真っ最中、ひどい音がいたします。廊下は怖いもの見たさで、相客が大勢わあわあと騒いでおります。

十「ああこれ、どけどけ町人」

甲「へえ……おいまた人数がふえたぞ」

乙「うん体は小さいが、どうも強そうだぜ」

などといっております。座敷の入り口に突っ立った十兵衛、大音に、

十「やあ一同の者ひかえ……新三郎もひかえ、ひかえと申すにきき入れぬにおいては容赦いたさぬぞ、われこそは柳生十兵衛であるぞ」

鶴の一声、柳生十兵衛と聞いて、七人の武士は大いに驚き、刀をそれへ投げ捨ていずれも飛びさがって、

一同「へへーっ」と頭をさげた。

十「これその方どもは、いずれの藩士であるかは知らねども、予の家来が誤まって座敷を取り違えたるを怒り、さんざん打擲なしたあげく、大小までも奪いとるとは何事じゃ、しかしそれも家来のあやまちからと、この者を丸腰として詫びを入れ、大小を取りもどすよう頼みにつかわしたるに、またまた大勢にて一人の者を取りかこみ、真剣をもって向かうとは不届きな

やつ、よってかくいう十兵衛、あらためて受け取りにまいった。たってもどされぬとあれば、好まぬことながら柳生十兵衛、汝らをこのところにて、片っぱしからひねりつぶしてやるが、どうじゃ」

すると七人のなかで、まず棟梁株の長瀬玄蕃すすみ出で、恐る恐る手をついて、

玄「これは初めてお目通りつかまつります。先生のご家来とは存じませず、酒に酔うて心にもなきご無礼をいたしたる段、まこと

にもって面目次第もござりませぬ、右の三品は謹んでおもどし申しますれば、なにとぞこの場の儀はお見のがしくださるよう、一同の者に代わって、玄蕃いくえにもお願い申し上げまする」

十「いやその方らにおいてさよう申すなれば、もとより予の家来、藤四郎の粗忽より起こりしこと、三品さえもどさばとやこうはないぞ」

玄「さっそくお許しくだしおかれ、ありがとう存じまする」

十「これもなにかの因縁であろうから、和睦に一盞酌むであろう」

と十兵衛先生の言葉に、七人の者は大いに喜び、早速女中をよんで酒肴を取りよせ、十兵衛先生を正座にすえて一同酒宴とあいなりました。

拾ったものを返すなどとは

なにがさて十兵衛先生といえば、剣術の神ともいわれます方でございますから、七人はいろいろ武芸の心得などをたずねまするとと、こちらもじゅんじゅんとして親切にそれをお教えになります。そのうちに夜もいたく更けたからというので、お座敷へ戻って寝床の中へ入られましたから、新三郎も藤四郎も次の間へ枕をならべて眠りにつきます。三人とも旅のつかれもあり、今宵の酒宴に酩酊しておりますから、横になるかと思うと、グーグーともう高いびきでございます。夜はますますふけわたり、鍵三の家もしんといたして、ただ犬の遠吠えのみ、物すごく聞こえる

という丑満刻（午前一時）、咽喉の乾きに目をさまされた十兵衛先生、布団の上へ起きなおって、枕もとの水瓶を引きよせ、湯呑みについでぐーっと一口に呑みほし、

十「ああ酔い醒めの水の味はまた格別、実になんともいえぬわい」

とひとりごちてふと心づきますと、階下から煙が結ばれて上がって来る様子、はて変だと障子を引きあけ、廊下に出て見ると、息もつまるかと思うばかりの煙、折しもかなたの壁に、ぱっと焔の光がうつると見るまに、階下では火事だ火事だと騒ぎだした、いよいよ大変とただちに取って返して、

十「新三郎」

ただの一言で新三郎がばと起きあがった。さすがに敵持つ身の寝ている間も油断はございません。

新「先生でござりましたか」

十「いや新三郎、どうやら階下から火がでた様子じゃ、身支度せい」

新「かしこまりました」

十「おおまだ藤四郎が眠っているか、早く起こしてつかわせ」

新「かしこまりました。こりゃ藤四郎藤四郎」

藤「むにゃむにゃむにゃ」

新「これ起きろ起きろ、火事だ、目をさまさぬか」藤「むにゃむにゃむにゃ」

そのうちに二階でも、失火を見つけたものと見えまして、火事だ火事だという声、泊まり客が一時にわあーっと騒ぎだしたので、女子供や老人の助けを求める声が、耳をつんざくばかり、今

までの静けさが、たちまち阿鼻叫喚のちまたとなってしまいました、藤四郎はなお白河夜船でグウグウ眠っております。

新「先生こまりました。藤四郎は容易に目をさましません、打ちすてておきましょう」

十「いやいや打ちすておくことは出来ない、待て待て予が起こしてやるから」

とそこにあり合わした水瓶を取って、藤四郎の鼻の穴へだらだら水を流しこんだ。これにはさすがの藤四郎もびっくり仰天。

藤「ははくしょーっ、ははははくしょーっ」

十「こりゃ藤四郎しっかりいたせ」

見ると十兵衛先生に新三郎が旅装束だから驚いて、

藤「ええもう夜が明けましたので、ははははくしょーっ」

十「寝ぼけるな火事であるぞ、早くたちのかなければ焼け死んでしまう、あわてずと身のまわりの支度をいたせ」

藤「へえ……いやどうも大変なことになりましたな」

藤四郎ようようのことで着物だけ身にまとい、大小荷物は小脇にかかえ、

藤「先生どっちへ逃げましょう」

十「ともかく廊下へ出るとしよう」

廊下へ出ましたが、もうその時は黒煙濛々と渦をまいて上がってまいり、三ヵ所の上がり口からはぽっぽっと火先が舌なめずって閻っております。

この体に十兵衛先生、

十「これはもういかぬ、これより飛びおりるとしよう、新三郎その方先へ飛びおりなさい」

新「かしこまりました」

新三郎窓から階下をのぞいて見ると、そこは鍵三の中庭になっております。呼吸をはかってぴゅーっと飛びおりた。

新「先生大丈夫でござります」

十「さようか、藤四郎その方先へ飛べ」

藤「へえ」

差しのぞいた藤四郎、

藤「先生いけません」十「なにがいけない」

藤「なにがってこんな高いところから飛べるものではございません、死んでしまいます」

十「新三郎があのように飛びおりて、少しもけがもして居らんではないか」

藤「中山さまはお飛びなすっても、私は飛べません、どうか先生お飛びなすってください」

十「予はあとで飛ぶ。これしきのところ飛べぬことはない。早く飛びおりろ」

藤「いえ、そんな危険なことはできません、私はご免こうむります」

十「たわけたことを申すな、足をちぢめ、気を十分に落ちつけて飛べばけがはせぬ」

藤「いえどうあってもご免こうむります」

十「意気地のない奴だ」

十兵衛先生も藤四郎をうっちゃっては置けませんから、しきりに飛びおりろ飛びおりろといっていらっしゃるうちに、火の手はますますまわってまいります。階下では新三郎が先生を案じて、

きちがいのようになって呼びたてる。

十兵衛先生いまはこれまでと、いきなり藤四郎の襟髪を引っつかんで、

十「むーん」

というと恐ろしい力もあったもの、藤四郎を軽々と吊しさげながら、窓の外へ突きだされた。藤四郎きもをつぶして、

藤「うわー、お、お助け……」

というやつを、ぱっと放してしまったからたまりません。ダダダッドスーンと地響きして藤四郎大地におち、そのとたんどこを打ったものか、うーむとばかり気絶してしまったところへ、十兵衛先生ひらりと軽く飛びおりてきて、

十「新三郎」

新「先生、藤四郎がどうやら気を失った様子にござりまする」

十「いやどうも厄介なやつだ、活を入れてつかわせ」

新「かしこまりました」

新三郎、藤四郎をだき起こして、えいっと一つ活を入れたので、

藤「うーむ……」

と息を吹きかえした。これから主従三人いそいで裏のほうへ出ようとすると、火は湯殿からでたものか、裏は一面紅蓮の海、余儀なく表をさしてばらばらとかけだしました。ところがその途中、十兵衛先生ポンと物につまずかれた、はっと気づいて拾いあげて見ると、どっしりと重み、なにか知らんが、手にさげてかけでると、それ鍵三が火事というので、姫路城下の寺院のこらず、

ゴンゴンゴンと早鐘をつき、火消しがどんどんかけつけて来る。その中を十兵衛先生三三町風上へ立ちのいて振りかえって見ますと、火焔は天をこがし、鍵三は一面の火につつまれてしまった様子。

十「いやどうもひどい火じゃのう、新三郎も藤四郎もどこもけがはいたさなかったか」

新「いえ、私にはけがはございませんが、先生には……」

十「いや予は別にけがはない、藤四郎その方は」

藤「いやどうも私はひどい目にあいました。先生に投げだされましたときに、腰骨をいやというほど打ちました。今日はまあなんと悪日でございましょう」

十「その方剛情を張って、あの二階にとどまっていたなら、今ごろはもうあの火のなかで、焼け死んでいるのであるぞ」

それでも藤四郎顔をしかめて、しきりと腰をさすっております。この時十兵衛先生、

十「新三郎、予はせんこく道の上でかようなものを拾った、何であるかしらべて見い」

新「かしこまりました」

と風呂敷包みをといて見ると、黒縮緬の袱紗に二百両の金子、ほかに紙入れが一個、それには一通の手紙がはいっております。

十「ほほう手紙が入っていたか、表書きはなんと認めてある」

新「さようでござります……ええ岡山御藩中、宮下頼母さまとしたためてございます」

十「ふむ封の切ってあるところを見ると、その宮下頼母と申すが遺失主じゃな」

新「さよう心得られます」

十「ほかに別段証拠となるものはないか」
新「証拠と申しては……紙入れをつつんだ袱紗に、細輪のなかに八重桔梗の紋が染めぬいてございます。まずそのくらいなもの、そのほかには別に証拠となるものはございませんようで」
そばで見ていた藤四郎。
藤「やあ先生これはよいものをお拾いあそばしました。これだけあれば岩国までの道中費用、三人がぜいたくして歩いても余るくらいでございます」
十「だまれ、その方はけしからんやつじゃ、拾ったものをそのまま着服いたし、使用しようと思っているのか。岡山藩宮下頼母と、名前まで明らかにわかっている上は、岩国への途中でもあれば岡山へ立ちより、宮下をたずねてもどしてつかわさねばあいならん、それまではしかとその方にあずけおく、もしいささかでも不足いたしおったる節は、手討ちにいたすぞ、さよう心得ろ」
藤「へえ、じゃあこれを返してやんなさるので……へへへずいぶん甘いものだ」
十「なにっ……」
藤「いえなにも申しはいたしません、恐れ入りました。たしかにおあずかり申しております」
藤四郎右の金子を、己れの胴巻きのなかへまきこんで肌につけた。そのうちに消防の手が行きとどき、火は三四軒を焼き払ったくらいで、思いのほか早く鎮火いたしましたが、鍵三は火元だけに、丸焼けの余儀ない運命、まもなく夜も明けましたから、十兵衛先生は鍵三の亭主に会い、その方かたに昨夜、岡山の藩士宮下頼母という者が、宿泊いたしたかとおたずねになると、亭主三左衛門、
三「へえ、宮下さまは、始終てまえ方をごひいきくださる旦那さまで、昨夜は江戸おもてからご帰国の途中、お泊まりでございましたが、てまえ方の粗相からかような仕儀、ただ今のところでは、まだいずれへお立ちのきとも弁えませぬ。あるいはそのままご帰国あいなりましたか、そのへんもしかとは心得ませぬ」
十「さようか、この方はその宮下に用事のあるものだが……いやこの混雑中でたずね探すよりも、岡山を通行いたすから、その節たずねることにいたそう」
三「へえ、昨夜のお話では、今度はたいそうお急ぎのご様子で、今朝六刻（午前六時）出立するからと、おっしゃってでございました」
十「それならばなおのこと、もはや当地に留まっていることもあるまい」
と、十兵衛先生も翌日姫路をご出立、途中の名所旧蹟は残らずご見物の上、ようやく備前国岡山城下へとお入りになりました。なにしろ三十五万石、池田新太郎少将光政公のご城下、なかなか繁華な土地でございますが、中にも伝馬町に備後屋嘉兵衛といって土地第一の旅館がございますから、先生にはお供の両人をしたがえて、それへずーとおはいりになりました。

番「いらっしゃいまし、お早いおつきさまで……」
と宿屋の番頭は迎えましたが、さて十兵衛先生の風体を見ると、長の道中お召し物なども大分悪くなって、襟は垢によごれ、袴の裾もボロボロになっております。新三郎とてもその通り、風体は樽屋藤四郎が一番りっぱでございます。それに先生はしごく風采のふるわなかったお方。もっとも流祖録、武芸小伝などにも、柳生十兵衛は、片目小兵なれば醜しとしたためてありますそうで、それですから番頭も、こりゃ悪い客が舞いこんできた、家へ来る客種ではないと変な顔をしておりました。

馬丁とはよくぞ見た

十兵衛先生そんなことを頓着あそばすような方ではない。
十「ああこれ早くすすぎを持って来てくれ」
番「ただいま持ってまいりますから、ちっとお待ちください」
十「ああさようか」
いっている折しも、この備後屋の表の方にあたって、わーっわっという人声。
○「それあぶない、放れ馬だ。逃げろ逃げろ」
と往来の者が右往左往と逃げまどいます。これを聞くと十兵衛先生、ものをもいわず表にかけ出で、きっと彼方を眺められると、放れ馬一頭なんに驚いたか、砂煙を蹴たてて宙を飛んで来る。そのあとから馬丁と見えて一人の男が、まっさおになって一所懸命追って来ます。この体に十兵衛先生、馬の来る前へおどり出でて、さっと両手をひろげた。たいていの馬はこうされるととまるものですが、なかなかの荒馬と見えて前足をあげ、十兵衛先生を掻いこもうとするから、こしゃくなとばかり身をかわし、すばやく左の手で轡をおさえ、右の手を鞍へかけて、瘤にさからわぬようくるくる四五度首をまわしながら、食いしめている轡をはずしてやると、さしもの暴れ馬も気抜けがして、地息をかぐようになりました。こうなればもう瘤がおさまったので、猫より

おとなしくなったところへ馬丁はようようかけつけて、
馬「旦那さま、まことにありがとうございます。いま横町まで来ると、向こうから高荷を積んで来た者がございましたが、大方それに驚いたものでございましょう、畜生ふいにかけだしました。へえ、もっともふだんから瘤の高えやつでございましたが、旦那さまが取りおさえてくださらねえと、この先どんなけががあったか知れません。どうもありがとう存じます」
十「平生から瘤が高いのなれば、なおのこと、よくよく注意いたさんければあいならん。その方に渡してやるが、この馬はどなたの乗馬じゃな……」
馬「へえ、ご当家のご重役、宮下頼母さまのご乗馬でございます」
十「宮下頼母……ふむさようか、してそのほうは宮下の馬丁であるか」
馬「さようでございます」
十「しからば少し物をたずねるが、宮下の定紋は細輪の中に八重桔梗ではないか」
馬「へえ旦那はよくごぞんじで」
十「その方立ちもどったらば、主人頼母へさよう申せ、先日播州姫路二階町、鍵屋三左衛門方へ一泊の節、にわかの失火、その折その方の主人頼母が、混雑にまぎれて取り落とした品があるであろう。右の品は拙者ひろって持参いたしておるが、今宵はこれなる備後屋方に一泊するゆえ、頼母に改めて受け取りにまいるよう申し伝えい」
馬「へえ家の旦那さまがお落としになった品をお拾い下されましたので、それはどうもありがとう存じます。いずれ主人がお礼にまいります、どうもありがとうございました……どうどうどう」

と馬をひいて立ち去ってしまいました。備後屋の番頭この体に感心して、

番「お客さま、あなたはたいへん馬を扱いなれていなさるな、お馬丁でも勤めていらっしゃったので」

藤四郎聞いてかっとして、

藤「黙れ町人、われわれの先生をつかまえて、馬丁でも勤めていたかとは、無礼なことを申すやつじゃ、いま一度申して見よ。手は見せぬぞ」

十「はっはっは、藤四郎怒るな、……いや番頭その方は目が高い、拙者が馬丁を勤めていたとはよく申した。してただいまはなんに見えるか」

番「そりゃあ旦那、私が永らくこの稼業をいたしまして、大勢のお客さまにお目にかかっておりますから、一目でこの人は何商売、又は、お侍さまなればどれくらいのお身分だぐらいはわかります」

十「ああさようか、しからば拙者はなんに見えるかな」

番「さようで、ご遠慮なしに申し上げましょうか」十「申してみい」

番「お目見得以下でございましょう」

十兵衛先生、こいつはひどいことをいうやつだと驚かれた。

しかし相変わらずにこにこして、

十「いや番頭よくあてた、いかにも拙者は軽輩だ。どうかそのつもりで手当ていたしてくれ」

番「かしこまりました。ええ、三十一番へご案内」

と大声をあげると、女中が出てまいりまして、

△「もしお客さま、こちらへ……」

というから、それについていくと、二階へあがる梯子段の下で、三畳の座敷、障子襖は破れすすけて、薄暗い陰気な部屋でございます。

新「先生、これはあまりひどうございましょう」

十「いやいや、下世話に起きて半畳寝て一畳という。どれほど広い座敷へ案内されたとて、それ一ぱいに座れるものではない。また寝ればとて座敷一ぱいに寝られるものではない。ここは三畳だからちょうど一人に一畳ずつ、これでよいよい。こういうところで一夜を明かすのもまた一興だ」

先生がよいとおっしゃるものだから、新三郎、藤四郎もしかたがない、三畳の間でがまんするとして、風呂へも入り、いざこれから食事をいたそうという所へ、さっきの番頭がやってきた。

番「もしお客さま」十「なんだ」

番「一寸こちらにお出でなさい」

十「ちょっと来い……なんだ何用だ」

番「あなたに当池田さまのご重役で、宮下頼母さまとおっしゃる方が、あって礼を述べるからこちらへ来いとおっしゃっておいでになりますから、あちらへ行ってお目通りなされ」

十「だまれっ」番「へえ……」

十「さてさて宮下頼母と申すは、物のわからぬ奴じゃ。礼を述べるに、人を呼びつけるという法があるか、宮下頼母へさよう申せ、礼を述べたくばこれへ来い、この方よりまいることまかりならん」

番「そりゃあいけません」十「なにがいけない」
番「宮下さまはご大身、あなたは軽輩、身分がちがいます」
十「だまれ、その方ごときの知るところではない。頼母にさよう申せっ」
番頭のやつおどろいて飛んでまいり、
番「ええどうもお待たせ申しました。こちらへ連れて来て、お目通りさせようといたしますと、そいつが恐ろしい剛情なやつで、この方からまいるわけにはならん、頼母に来いとかよう申します」
頼「だまれっ、拙者がいつその御仁に、これへまいって目通りせよといった。いずれの座敷においでなさるか、案内しろと申したのではないか。たとえ身分がどうあろうと、礼にまいった者が呼びつけるという法があるか、不届き者めっ、以来気をつけい。さ早くまいってお詫びいたさなければあいならん、案内いたせっ」
叱りつけられて番頭、
番「そう両方からお目玉ばかりいただいては、私の立つ瀬がございません」
頼「ええっぐずぐず申さずと、早く案内せい」
番「へへっ」
番頭目の玉の飛びだすほど叱りつけられ、恐れ入って宮下頼母を、十兵衛先生のお座敷へ案内いたしました。

自慢の目玉は節穴同然

案内された座敷の様子を見て、頼母も心中驚きながらこちらへひかえて居りますと、
十「ああその許が宮下頼母といわれるか」
頼「これは初めてご面会つかまつる、拙者が当池田家の家来、宮下頼母と申しまする者。うけたまわれば先刻は当家の表にて、放れ馬をおしずめくだされ、その上ご親切のお言葉、ありがたく存じます、とりあえずお礼ながらまかりいでました」
十「さようか、先だって姫路おもて失火のみぎり取り落としたものがござろう」
頼「はっ粗末ながら黒縮緬定紋染め抜きの袱紗、それに包みましたる紙入れ一つ、金子二百両、紙入れの中には知人よりまいりたる手紙一本、入れおきましたかと承知まかりあります」
十「ああよし、それに相違ない。これ藤四郎、その方に預けおいたる品、この仁におもどしするよう」藤「この中からいくらもらいますので」
十「だまれ」
藤「へえ……ええ宮下殿とやら、お改めくだされ、荷にはならねど、預かり品と思えば、なかなか気骨が折れました。なに礼などはどうでもよろしい」
十「藤四郎そのほうはよく要らぬことを申すやつじゃ、だまっておれ」藤「へえ」

すると頼母は一応あらためて見て、
頼「確かにちょうだいいたしまする」
と紙入れと袱紗とをてもとへおき、金子は白紙にのせて、十兵衛先生の前へ差しだし、
頼「これははなはだ失礼ではござりまするがお礼のしるし、お手もとへお納めくだされまするよう」
すると十兵衛先生、顔色をかえて、
十「ひかえろ、いかに心得違いせしかは知らぬが、失礼なふるまいいたす者じゃ。金銀をさしだして、これを今日のお礼とは何事じゃ、名のるべきにはあらざれど、心得のために名のって聞かす、予は柳生但馬守のせがれ十兵衛である、金銀に不足なき身じゃ」
聞くより頼母は仰天して、
頼「へへっ、これは又さようなお方とも存じませず、ご無礼のだんだん、恐れ入りたてまつる。まったくてまえの粗忽より出でましたこと、主人はじめその他の存じませぬ所でござりますれば、てまえ一人をご処分くだされ、ほかほかの者にお咎めのなきよう、幾重にも伏して願いあげたてまつりまする」
そのとたんこちらのかげで、始終の様子をうかがっていた備後屋の番頭、ドスーンと尻餅をついて、まっさおになってぶるぶるふるえております。頼母の言葉に十兵衛先生顔色をやわらげられ、
十「いや別段だれを咎むることとてない、子細がわかればすみやかに、それなる金子を納めておかれよ」

頼「はっ……ああこりゃ番頭」
番「へえ、どうかごかんべんを……」
頼「ごかんべんをではない、柳生大先生をなぜこんな見苦しいお座敷へご案内申し上げた。容易ならんご無礼、主人を呼べっ」番「へえ」
十兵衛先生笑いだして、
十「いや叱られるな叱られるな、先刻番頭がどんな人物でも一目見ると、身分が知れると申したから、予はなんと見えるとたずねたところ、目見得以下の軽輩と見えると申した。しからばそれだけのもてなしをしてくれと、予が頼んだのじゃ」
頼「恐れ入りたてまつる……こりゃその方……」
番「ど、どうかお許しのほどを……殿さまもお人が悪うございます。私が目見得以下ではございませんかと、おたずね申し上げまするとそうじゃ軽輩じゃとおっしゃったのでございますので……」
十「はっははは、いや番頭決して案ずるには及ばぬ。その方を咎めだてしようとはいたさぬぞ、しかし三人を三畳の座敷へ押しこむは、あまりにひどいな」
頼「全くもって不届きしごくの奴、早く他のお座敷へご案内申し上げろ」
といっておりますところへ、備後屋の亭主喜兵衛、羽織袴のいでたちでそれへ出てまいり、
喜「へえてまえが当家の亭主、喜兵衛にござりまする。ただいま番頭が、なにかそう申し上げましたそうで、まことにはや恐れ入ったる次第、なにとぞごかんべんのほどひたすらお願い申し上げまする……これ番頭なにをしているのじゃ、早く上段の間へご案内申し上げんか……ええ

どうかあちらへお移りを願い上げます」
頼母もともども、お移りくだされるようと申し上げますので、しからばというので、上段の間へ引きうつる。
十「なるほど三畳の間とは違って、広々として心持ちが悪くないな」
喜「恐れ入ります」
十「さて頼母とやら、予が当地へまかり越したことは新太郎殿へ申し上げぬよう、実はこれから唐天竺へ渡り、釈迦をはじめ孔子孟子にも会い、また久しぶりで孔明もたずねやりたく思うておれば、いずれその帰途にゆるゆるおたずねいたすから」
とまじめでおっしゃる。頼母うけたまわって、ははあこれが聞きおよぶ先生のご病気だなと、
頼「委細承知つかまつりました。しからば手まえはこれにて一旦おいとまをつかまつります」
十「さようか、新太郎殿へ申し上げることは堅くとめおくぞ」
頼「委細かしこまりたてまつる」
宮下頼母はおいとま申し上げて引き取りましたが、そのままに捨ておくわけにはまいりませんから、ただちに登城の上、太守へお目通り願い出で、このたび柳生十兵衛殿、ご城下備後屋喜兵衛方へご宿泊の由を言上に及びました。ここにはからず十兵衛先生と、当岡山の大儒、蕃山熊沢了介先生とのご対面、了介の一言さすがに十兵衛先生の心胆を寒からしめるというお話……

十兵衛贋狂人ぶりを発揮

岡山の城主、池田新太郎光政公、柳生十兵衛先生当地ご到着と聞かれて、翌日宮下頼母を出迎えとしてお乗り物一挺、さしむけられました。頼母は備後屋へまいって先生へお目通りをいたし、
頼「昨夜はまことに失礼つかまつりました。おいとま申して立ちもどりましてから、つくづく考えまするに、堅くお口どめおおせつけられましたれど、かかるお方のご到着を承知いたしおりながら、このままご出立おさせ申しましては、重役どもはともかくも、主人光政の残念いかばかりかと存じまするにより、お言葉にそむくは恐れ入ったる次第なれども、この由重役一同へ披露の上、主人へ言上に及びましたところ、ぜひとも城内へご案内申せとのおおせ、お迎えの使者として、かくいう頼母まかり出でましたれば、なにとぞまげてお越しくだされまするなれば、一同の喜びこの上もござりませぬ」
十「さようか、予の当地へまいりたることを、新太郎殿はじめ、一同が知ったとあればぜひもない、しからばすぐさままいるであろう。案内いたせ」
頼「さっそくのご承引、頼母面目に存じまする。しからば……」
というので、備後屋の玄関へ駕籠を差しまわす。新三郎と藤四郎を備後屋へ残して、頼母の案内で城内へまいり、今やお玄関へさしかかろうとすると、老臣方一同お迎え申し上げて、いとも

ていねいなるお取り扱い、なにしろ十兵衛先生はおなじ剣術の人とは申せ、荒木又右衛門や、宮本武蔵などとはことかわり、天下の諸侯。その父但馬守は、将軍家のお手直し役と申すのだから、実に勢力のあるお家柄、どこまでもていちょうのお取り扱い、やがて大広間へまかり出ると、唐紙さっと左右に押し開かれて、正面に当岡山三十五万石の太守、池田新太郎少将光政公、左右に小姓を従えさせられ、威儀厳然とひかえさせられる。この新太郎光政とおおせられるは、非常の武勇濶達の君でございました。それと申すも、家来に賢者がおったからで、ことに熊沢了介、通称次郎左衛門、号を蕃山と申しまする方、このお方が、近江聖人といわれた中江藤樹先生のもとで、儒学をきわめ、池田家のため、大いに力をつくされましたという方でございます。さて新太郎少将光政公には、十兵衛先生とご対面。

光「その許が十兵衛殿であるか、予は光政である、見知りおかれい」

十「これははじめてご対面申し上げます。それがしが十兵衛と申す天下無二の豪傑にござりまする。お見知りおかるるよう」

光政公きかれてははあよほどちがっているなとおぼしめし、

光「いや、その許のあっぱれなる手のうちは、かねがね承知いたして、なつかしく存じおったところである。どうじゃ、しばらく当城内に滞在いたし、予に武芸を教えてくれぬか」

十「少将殿には、それがしを師として剣術を学びたいとおおせらるるか、いや感心感心、まず当時天が下に剣ふり棒ふりと称する者あまたありといえども、師と頼むべきは十兵衛をおいてはござるまい。さすがは少将殿、それと知ってせっかくのお頼み、ご教授申し上げたいは山々なれども、それがしこれより天竺に渡り、釈迦をたずね、帰りには唐にいって、五丈原の陣中で孔

明に対面いたし、玄徳にも会うて、関羽張飛に一本ずつ教授いたし、楚に入って項羽の安否をたずね、なお日本に立ち帰っては、肥後の熊本の清正に教え、山陰に山中鹿之助をおとずれようと心得おりますれば、ご教導はなにとぞその後のこととなしくだされたい」

とまじめな顔で述べたてます。さすがの光政公も、あまりひどい脱線にあきれたまい、家来と顔を見合わせておられましたが、

光「さようか、ではその帰途はかならず立ち寄ってくれるよう」

十「委細承知つかまつりました」

光「これよ、予は豪傑と一盞もよおしたい、酒肴を持て」○「はっ」

お付きの者が委細心得て、用意の酒肴を持ちはこびます。

十「十兵衛殿盃をまいるぞ」十「ありがとう存ずる」

と遠慮なくちょうだいいたします。その間のお話にも、十兵衛先生はやれ弁慶を打ち負かしたの、朝比奈義秀を降参させたのと、大きいことばかりいっておりますので、光政公もただ笑われて、

光「豪傑ゆるゆると打ちくつろぐよう」

とおおせられ、ご自分は奥へお入りになったが、しばらくすると、若侍一名それへ出てまいり、

若「ええ柳生大先生へ申し上げます」

十「何じゃ」

若「ぜひとも先生へごらんに入れたきものこれあり、なにとぞあちらへお移りのほどを願わしゅう存じまする」十「さようか」

とこの若侍の案内にてまいりまするとと、畳かずおよそ五六百畳も、しけようと思われる大広間、その中央へお褥をしいてございます。

若「しばらくこれにて、お待ちくだされまするよう」

十「さようか」

若侍はそのままひきさがってしまう。十兵衛先生ただ一人、なにか見せるのかと、待っておいでになりますが、それっきり、茶一つ持ってでる者もないというこれまでとは打って変わった取り扱い、ははあこれはなにか目的あって、かようなもてなしをいたすのじゃなと、油断なく前後左右に眼をくばっておりますと、やがてそれへ現れいでましたる一人の侍、はるかかなたへ両手をついて、つつしんで平伏いたしまする。十兵衛先生ごらんなされると、年齢は二十二三歳で、色あくまでも白く、鼻高く両眼清らか、口元引きしまったる容姿は、まこと婦人にして見たいほどの好男子でございます。こは何者とみているうちに、侍はやがて頭をもたげて、

侍「柳生大先生にはさぞかしお待ち久しゅうあらせられし御事と恐れ入ります。只今ほどなく先生にご高覧に入れたきものあり、あれにて支度最中でござりますれば、それまでのおひまつぶしとして、当家の臣熊沢了介まかり出でましてござりまする。以来お見知りおかれ、何分のご厚志をくださりょうなれば、千万かたじけのう存じまする」

さてはこの美男子が了介かと、先生は聞くと見るとの大ちがいに、あきれておりました。

十兵衛先生これを聞かれて、

十「ふむ、さてはかねがね聞き及んだる当家柱石の臣、熊沢了介とはその許であったるか、うけたまわれば新太郎殿ご乱行のみぎり、その許一人の力をもってご諫言申し上げ、三十五万石を泰山の安きにおいたるは、天下知らぬ者とてない。かくも忠義に厚いその許と対面いたすは、十兵衛の満足に思うところであるぞよ」

了「はっ恐れ入ったるお言葉、ただただ恐縮にたえませぬ」

十「こののちとても新太郎殿をたすけ、領分の安寧をはかられい……予はかねがねその許に、一度対面いたしたく存じおったのじゃが、さても器量ばかりでなく、容貌までも、なかなかりっぱであられるな」

十兵衛先生、ご自分が醜いから、他人の容貌が早く目につくものと見えます。もっともこの容貌をしたって、秋月の娘深雪……これは義太夫でございますが、実は黒田の家来、矢部靱負の娘深雪さんが、恋し恋しで両眼を泣きつぶしたというくらいのお方、くわしいことは朝顔日記にゆずりまして、ここは了介と十兵衛先生とさまざまな話をいたして居ります。

十兵衛ギョギョッとする

そのうちに、なに思ったか了介とつぜん言葉を改め、

了「先生にうかがいまするが、大公儀の忠臣と申しますれば、まず何人が第一とおぼし召されまするか」

十「これは異なことをたずねられる。東照神君今日の基礎をつくられるについては、帷幄にあっ

てはかりごとをめぐらしたものもあろう、御馬前にあって功をたてた者もあろう。それも忠臣なればこれも忠臣じゃ、いずれに甲乙のあろうはずもないが、強いて申さば、まず本多平八郎忠勝殿などが、第一と存ずるな」

了「ほほう、本多中務大輔殿を第一の忠臣とおおせられまするか、してその理由は……」

十「さればなり、平八郎は三河以来家康公の左右をはなれず、戦場に出ずれば向かうところ敵なく、帷幄にあっては張良の智謀にまさる。かの大阪陣のみぎり、せがれ出雲守忠朝が、一心寺の森において真田のために討ち死にをとげたるも、心にかけず、命旦夕にせまる重病の身をもって、ひたすら関東の勝ち戦を祈りたりとは、あっぱれ絶世の大忠臣、お家万代の柱石とも申すべきであろう。いかがじゃな」

これを聞いて了介にっこり笑いを含み、

了「これは近ごろ先生のお鑑識ちがいかと存ぜられます」

十兵衛公、了介の言葉にむっとして、

十「なに、しからば熊沢その許は、忠勝を徳川の忠臣ではないと申されるか」

了「いや決してさようの儀ではござりませぬ。本多殿忠臣には相違ござりませねど、いまだもってお家第一とは申しかねるかとあい心得ます」

十「しからばその許はだれと心得る」

了「はっ、はばかりながら第一の忠臣と申し上ぐるは柳生十兵衛殿、又柳生家の孝子といえばこれまた三厳大先生に候わん」

十兵衛先生たちまち眦をきりきりとつりあげて、

十「だまれ熊沢、その方は軽薄な大たわけ、名士の大智者のとは片腹いたい、目通りかなわぬ、さがれさがれさがりおれっ。察するところそれがし、父の跡をついで将軍家ご指南をいたさぬはこれ不忠、長男と生まれながら、老父をかえりみずして、かく諸国を漫遊いたす、これを不孝とそしるのであろう。いざ聞こう、返答いたせ、次第によっては許しおかぬっ」と差し添えの刀に手をかけ、きっと身がまえに及ばれたれど、そんなことに驚く了介ではない。泰然として、

了「しからば先生が大忠臣、大孝子の次第を一通り言上つかまつらん。世人はただ先生のご行状を見て、そのご本心を見ず、みだりにご慢心であるの、ご乱心あそばされたなどと陰語を申せども、これ先生が敵をあざむく反間苦肉のはかりごと、了介においてはそのご心労が察せられて、なかなかおいたわしゅう存じたてまつります」

と一言深く十兵衛の肺腑をえぐった。さすがの十兵衛先生も、はっと顔色をかえられて、

十「こりゃ、なにをくだらぬことを……」

と思わずあたりへ眼を配られたが、幸いの大広間、人の来る様子もない、ほっといたして、

十「いやその許は他愛もないことを申されるな、世の人はさておき、現在予が父でさえ、予を慢心いたした、狂気いたしたとて、捨ておかれるのを、今さら敵をあざむく反間苦肉のなんのとは、ははははばかばかしい」

了「いかに先生おいいわけを致されればとて、大地を打つ槌ははずれもしましょ、かく申す了介の見こみはよもや違いますまい。いま世の中は太平とは申せ、実は互いに他の心のさぐり合いにて、一歩あやまれば妖雲四方に起こり、矢玉飛び剣戟まじわるの光景とあいなるべし、さては大樹公にもこのことをお察しあって、忠義鉄石の先生へ、西国九州諸大名の挙動隠密のことをご

内命くだされたものと存じまする。

かかる大任をおびさせたまえるご心中は、なかなか中務殿などの遠く及ばざるところにそうろうゆえ、大先生をばお家三代の忠臣と申し上げる次第にござりまする。もし了介の言葉にあやまちあらば、只今このところにてお手討ちくださるとも、露いささかも悔やむところござりませぬ。が、そのかわり万に一つ愚存に相違これなくば、了介いささか先生へ献上つかまつりたき

品がござりまする」

弁舌いともさわやかにとうとうと述べたてました。聞くより十兵衛、思わず太息をついて、

十「いや熊沢、その許の活眼まことに恐れ入った、天下誰あって予が胸中を知る者なきに、さながら掌をさすがごとき只今の一言、十兵衛胸中へ五寸釘を打たるるごとくに、ひしひしと感じた。しかしながらその許このことは決して他言いたされまい、しかとあい頼みおくぞ」

了「ご心配ご無用に願わしゅう存じまする。この上は先生へのお土産として差しあげたき品、なにとぞご受納くだしおかれまするよう」

といいながら振りかえって、

了「あいや先刻申しつけおいたる品、これへお持ちくださるよう」○「はっ」

と若侍一人、文庫を両手にささげて、しずしずとそれへ持ってまいり、下に差しおいて又すーっとさがってしまう。了介受け取って、

了「微禄の了介が薄志、いざご受納くだされい」と厳重の封印をわれとわが手にきって十兵衛の前へさしだす。先生なにをくれるかと、文庫の蓋を取って見れば、中には一通の封書、それも厳重に封印がしてございます。

十「熊沢この品であるか」

了「おあらためくだされい」

と了介は小刀の柄前に手をかけ、だれかのぞくものでもあるかと、八方に眼をくばっている。十兵衛先生この間に封をきってごらんになると、これぞ西国の強藩、毛利あるいは肥後の細川、薩摩の島津、黒田、鍋島をはじめといたして、小は領主陣代郷士にいたるまでの領地、要害の様子、さては武器の多寡、人情風俗、交通の便不便、ことごとく図となり書となって書きあらわされてございますから、深く心に驚かれた十兵衛先生、

十「了介」了「はっ」

十「その方が厚志、かたじけないぞっ」

了「恐れ入りたてまつる」

なお了介より種々とご注意申し上げるところがあったので、十兵衛先生の満足は一通りではございません。ところへ若侍がまいって、いざあちらへと、他の座敷へ案内いたし、そこで改めてご酒宴があります。その時新太郎光政公もご出席あいなりましたが、十兵衛先生ほどよきところにておいとまを願いいでましたから、

光「しからば帰途はかならず立ちよりくれるよう」

とおおせられた。先生ありがたく心得て下城いたす時に、了介は先生の袖にすがって、

了「願わくは当家に二心なきことを、先生より将軍家へご披露のほど、よろしゅうお願い申しまする」

と懇願に及んだ。光政公のご気性だけに、池田家は公儀より第一番ににらまれておりました。双葉のうちに刈らずんば、斧をもちうるの憂いあらん、なにか折あらば、三十有余万石取りつぶしてやろうとにらんでおりましたのを、大智者の熊沢了介、それを看破して、しばしばご諫言申し上げておりますが、光政公豁達なご性質だけにどうしても幕府からにらまれやすい、これではいかんと思っている矢先に、十兵衛先生の漫遊があって、その目的をちゃんと見抜きましたから、さてこそ十兵衛先生をさんざん喜ばしておいて、いざという帰りぎわに、当家に二心なきところを将軍家へご披露願わしゅう存じますといった。実にそのやり方のうまいこと、むしろものすごいばかりでございます。十兵衛先生も、こやつやるなとおぼしめされたが、しかしその苦衷のほども察せられますので、

十「心配いたすな」

とご一言、すうっとお駕籠にお召しになって、宮下頼母徒歩で備後屋までお見送り申すと、備

後屋では番頭の失策一件がございますから、この上ご無礼でもあってはならんと、下へもおかず、ていちょうに取り扱います。その上宮下頼母が熊沢了介のいいつけによって、柳生大先生を大切にお取り扱い申せと声をかけておきましたから、備後屋では戦々兢々として、先生逗留の座敷の前は足おともさせず、給仕の女中には裾模様をきせるというさわぎ、これが先生にはかえってきゅうくつでおもしろくない。

二三日逗留して、名所旧蹟見物ののち、すぐと当地ご出立、あれより広島の城下へお入りになり、ここでも五六日逗留あいなりましたが、別に変わったお話もございません。いよいよ岩国の城下へお乗り込みにあいなったのは寛永の五年十月二十五日のことでございます。

待ちに待ったる時節到来

新三郎においては不倶戴天の父の仇敵、赤松典膳のいる土地へまいったのでございますから、どうしても心気興奮のもようでありますが、一方の樽屋藤四郎はそんなこととは知らないから、相変わらず気楽なことばかりしゃべっては、十兵衛先生を笑わしております。

十「さあいよいよ岩国へ乗りこんできたが、さて宿をいずれへ取ったものであろう」

藤「先生旅籠屋へなどお泊まりになるより、すぐと赤松先生のもとへ、おいでなされたほうがよろしゅうございましょう。赤松先生のお住まいは堀端武者小路と申しますから、これからまっすぐまいろうではございませんか、第一無駄な旅籠代などをだしては詰まりませんから」

十「いやそれはよろしくない、赤松典膳も千石二千石の高取りならばよろしいが、なんにいたせ新参者、まことくらの知行をいただいているか知らんて」

藤「新知三十石で、のち二十石ご加増になり、つまり五十石にご出世あそばしたので……」

十「いやそれはわからぬ、典膳浪人して窮乏中、町人のその方に一年も一年あまりも厄介になったほどであるから、自然その方を喜ばさんため、十石のところは五十石、二十石のところは八十石などと申しておらぬとも限るまい」

藤「なるほど、これはごもっともで……」

十「ところへわれわれ三人どかかと押しかけてまいったならば典膳も、さぞ恥ずかしくまた迷惑に思うであろう、又さように押しかけていくのは、武士の礼ではない、よって、今晩はいずれかに宿を取るといたそう」

藤「なるほど、それもごもっともで」

と城下はずれ市の町というところの旅人宿、亀甲屋万兵衛というへ泊まりこみました。十兵衛先生、藤四郎が風呂にたったあとで、

十「さて新三郎、いよいよ時節到来したというものじゃ、しかし今日その方の様子を見るに、精神なんとなく落ちつかぬように見えるが、そんなことではいよいよのとき、不覚を取らぬとも限らん、日ごろ申し聞かしたはこのこと、よく精神を落ちつけえ」

と情けこもるご忠告。

その翌日、十兵衛先生、亀甲屋の主人万兵衛を呼んで、

十「当岩国の家中へ、新参お召し抱えにあいなった、赤松典膳と申す者を、その方存じておるか」

万「へえ、赤松さまとおっしゃる、剣術の上手な先生を、お召し抱えになったと申すことは、うけたまわっております」

十「さようか、してその赤松は家中の評判はどうじゃな」

万「その辺はなにぶん町人の私どもにはあいわかりません」

十「いやこれは無理もない話じゃ」

と万兵衛をおさげになって、はてなんとかして赤松の様子を知りたいものじゃと、しばらく思案していらっしゃいましたが、なに思われたか、

十「これ新三郎、予はちょっと出てまいる、その方は予の留守中、この座敷より一歩も出ることはまかりならんぞ」

新「いずれへお出かけにあいなります」

十「少し思いつくことがあって……それはよろしいが、予の留守中たとえ仇敵が目前へまいろうとも、決して名のりかけてはあいならんぞ、予の帰るまで待てよ」

新「かしこまりましてございます。先生のお言葉にあいそむくようなことは決していたしませぬ」

十「藤四郎藤四郎、ちょっとまいれ」

用事にいっていた藤四郎、声を聞きつけて急いでまいりました。

十「その方は新三郎と当家にあって、予の帰りを待つようにいたせ」

藤「へえかしこまりました」

十「廊下へもあまり出ぬようにいたせ」

藤「はい」

十「新三郎、しからば出て来るぞ」

とおっしゃって先生ただ一人、ぶらりぶらり城下を歩いて居られましたが、あまり咽喉がかわいたから、とある道ばたの茶店へずっと入って、

十「許せ」○「ええいらっしゃいまし」

茶店の老爺が汲んでだす渋茶を呑んで、

十「いやひどく咽喉がかわいた、もう一杯」

といっているところへ、商人ていの男が三人連れで入って来ました。

○「じいさん今日は」

老「やあ、これは大島屋さんで、どうぞおかけなさいまし」

○「じいさんなにかあっさりしたもので一杯つけてくんな」

老「かしこまりました、近ごろはご承知の通りの不漁つづきで、なにもございませんが、酢鮪はいかがで……」

○「酢鮪は恐れ入ったな、まあ無ければしかたがない、他には……」

老「他には芋の旨煮かヌタでございます」

○「ヌタはいいな、それで一本つけてくんな」

老「かしこまりました」

○「松吉どん久兵衛どんここへかけなさい、話は一杯飲みながら、ゆっくりしますから……」

といいながら前を見ると、ちょうど十兵衛先生の前の床几に一人の折助、おさだまりの紺絣に梵天帯、真鍮金具の木刀を一本ぶっこみ、もう大分飲んだと見えて、べろべろになっております。

下郎「ういーっ、ああいい心持ちになった、酒てえやつはいつでも悪くねえよ、げーぷ……」

○「おやこれは赤松さまのお仲間八五郎さんじゃあございませんか」

八「なにっ……お、だれかと思やあおまえは大島屋の黒鼠か」○「黒鼠とはひどいなどうも」

八「なにがひどい、黒鼠だから黒鼠というになにが不思議だ、ぐずぐずぬかすと旦那にいいつけて、おまえの店じゃあなんにも買わねえようにしてやるぞ、なーにわけはねえさ、俺が一言、大島屋の品はきずものだらけ、あんなものを買っちゃあ、あとでばかあ見ますといやあ、それっきりだ」

○「そんなことをいっちゃいけませんよ」

下郎は張子の虎のように、頭ばかり振りたてて、

八「なにいけねえ、なにがいけねえんだい、いけなきゃ一杯買ってくれ」

○「ははははは一杯くらいは買いますが、今日はもうたいそうよいきげんじゃございませんか」

八「ちっともよいきげんじゃあねえ、わずかこれっぽちの酒でいいきげんになる八五郎さまじゃねえんだ、赤松さまの八五郎、江戸っ子の八はこれっぽちの酒じゃあ承知できねえんだ」

○「わかりましたわかりました、赤松さまの八は毎度うかがって耳にタコが入っております」

八「やい黒鼠、てめえは八々って、いやに俺を見さげているが、八てえほどりっぱな名前はありゃしねえ、八という字はありがてえ字なんだ」

○「へえさようでございますかね」

八「知らざあ教えてやるからよっく聞け、そもそも東照権現さまが江戸へご入城になったのは、天正十八年八月一日だ、それがため江戸じゃあ、八朔といやお正月よりめでたいんだ」

○「なるほど」

八「それから天下の旗本八万騎、八百八町、関八州、寺で大きいのが、関東十八檀林、傍目八目、嘘八百よ、どうだい悪いことをして流されるところが八丈島、兜の上の八幡座、下着によいのが黄八丈、屋島へ義経八艘飛び、神さまでご利益のありがたいのが八幡さま、八十八夜、娘一人に聟八人、武蔵でいいところが八王子、俺の親父が八右衛門、そのせがれの俺が八五郎、見ろ、八という字は尊かあねえか、むやみに八々ぬかしやがるとばちが当たるぞ」

○「ははははは罰が当たるとはうめえさげだ」

と笑っている。

酒で釣りだす下郎の口

十兵衛先生も、おもしろいことをいうやつだとおぼしめして、聞いていらっしゃったが、八五郎の言葉のうちに、赤松さま赤松さまという言葉が入る。もしや赤松典膳の下郎ではあるまいかと気づいたから、

十「これ八五郎とやら……」八「なにっ……」
と見ると侍だから、八五郎びっくりして、
八「やあこれは旦那さまでございましたか、へえへえなにかご用でもございますんで」
十「いや別に用事というでもないが、その方の申すことはなかなかおもしろい。いま聞いておればこれっぱかしの酒ではよいきげんにはなれないと申したの……」
八「へえどうも恐れ入ります」
十「どうじゃ拙者がよいきげんになるまで酒を飲ますから、只今のようなおもしろいことを話して聞かしてくれ」
八「えっ、じゃあなんでげすかい、今わっちが口からでまかせにべらべらしゃべったことがお気に召して、よいきげんになるまで飲ましてやろうとおっしゃいますんで」
十「そうじゃ」
八「ありがとうございます、じゃあ早速とちょうだいいたします。しかし旦那、わっちがちょうだいした後で、下郎きさまが飲んだ酒だから、きさまはらっておけなんておっしゃるようなことはございますまいな」
十「決してさようなことは申さぬ、なんなら先へ払っておいてもよい」
八「なにそれには及びません……こう爺さん、聞く通りだ、心配なしにどんどんつけてくんねえ」爺「かしこまりました」
燗番の女の子を見つけ、
八「こう姐や、熱燗はうまくねえぜ、お如才ありますめえが、ほどのよい人肌にしてくんねえな」

一人でしゃべっておりますのを、十兵衛先生なにげないようにおさえて、
十「そこで八五郎とやら」八「へえ」
十「少々その方にたずねたいことというのは、先刻よりその方、赤松の、赤松先生のと申したな」八「へえ」
十「その赤松先生というはもしや奥州津軽の御浪士で、東軍流の達手ではないか」
八「へえ旦那さまはよくご存じでいらっしゃいます」
十「その先生に相違ないか」
八「決してまちがいございません、わっちはその赤松さまへご奉公申しておりますので……」
十「ふーむ」
いかな酔漢でも少し変に思ったと見えて、
八「旦那さまはどうして、家の旦那をご存じでいらっしゃいますので」
十「いやなに拙者は、諸国武芸修行に歩く者であるから、天下に名の聞こえた武芸者は、片っぱしから残らずたずねて、一本のお手合わせを願いたいと思うので、ことに赤松典膳殿と申せば泣く児もだまるというほどのお腕前、そのお名前はかねてより承知しておったれば、どうか一度お目にかかりたいと存じたに、ご浪人なされて、どこに居らるるやらお住所もわからずと聞き、遺憾に心得おったるところ、さては当地においでなされるか、して町道場でもお開きなされていらるるか」
八「いえさようではございません。先ごろ新参二十石でお召し抱えになり、ご当家さまのご指

南番をおおせつけられましたが、すぐと二十石ご加増で、ただいまでは五十石をちょうだいしていらっしゃいます」

十「ふむそれは始めて聞いた、さだめてご門弟もあまたおらるることであろうな」

八「へえへえそりゃあ大したもので、家中の半分は先生のお弟子でございます」

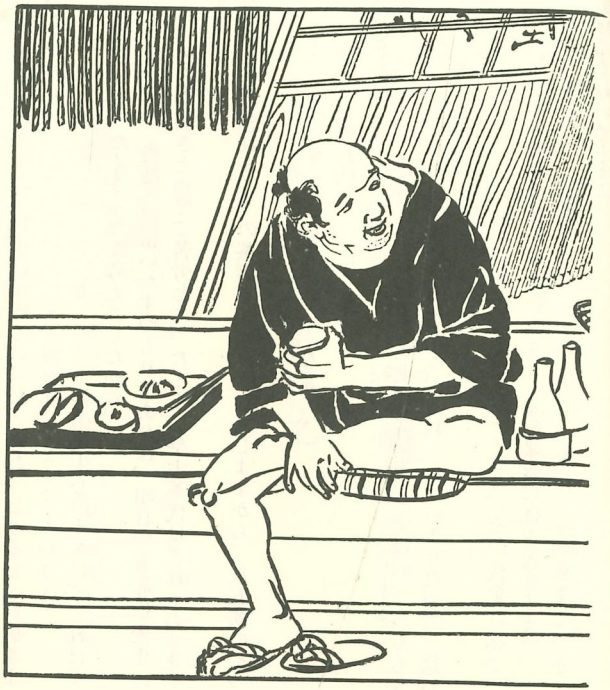
十「さようか、さぞかし殿さまはじめご重役一同のお覚えもめでたいことであろうのう」

八「そりゃあ旦那、

うちの先生はなんといっても苦労人だけ、ご如才もございませんし、またうちの先生は碁がたいそうお上手で」

十「そうそう、赤松先生は囲碁もおできなさるとうけたまわっていた」

八「だもんですから、お殿さまのお相手などもいたされ、自然たいそうなお気に入りでございます……、しかし味方があれば敵もあるもので、ご当家のご城代、対馬兵庫さまとはどうもそりがあわない



ようでございます。うちの旦那にいわせると、対馬は頑固でいけねえとおっしゃるし、対馬さまはうちの旦那を妓物だのなんだのとおっしゃって、たいそう仲が悪いようでございます」

八五郎たずねもせぬことまでべらべらしゃべってしまった。十兵衛先生心のうちに、これはよいことを聞いた、これだけ聞けばもうたくさんだと考えましたから、

十「いやさようか、拙者も二三日は、当地へ逗留いたすつもりであれば、明日でも赤松先生のご道場へおうかがい申そう。どうも引きとめてご苦労じゃった……、亭主茶代はこれへおくぞ」

○「ありがとう存じまする」

十兵衛先生、約束の酒代のことは忘れて、この茶店をでようといたしますから、八五郎のやつおどろいて、

八「もし旦那さま、ちょっとお待ちなすってください」十「なんじゃ」

八「なんじゃって、へへへそのお忘れ物……」

十「忘れ物、この方は別に忘れ物などしたおぼえはないが……」

八「ご冗談で、ただいまおっしゃいました、わっちへのご馳走のお勘定……実はわっちももう別に飲みたくなかったのですが、旦那がせっかくおごってやろうとおっしゃいましたので、飲めねえところを、こうして無理にちょうだいしておるようなわけで……」

十「ああさようか、この方が確かにおごってやると申したに相違ないから、その代金は払っておいてつかわすが、飲めないものを無理に飲むにもあたるまい、暴飲暴食は体を害するぞ」

八「へえ、しかしわっちの腹の痛まねえご馳走だと思いましたから、実はもう咽喉までつかえてうつむくことも出来ませんくらいで……」

十「その方にこの金をつかわすから……」

と小判一枚ぽんと投げだしてやりましたから、八五郎は目をまるくして、

八「旦那、これは一両で……」

十「まだ不足じゃと申すのか」

八「ど、どういたしまして……、不足なんて……」

十「不足でなければそれで払っておけ、あまったらその方につかわす」

八「へー、夢じゃないかしら……、べらべらとしゃべって一両、旦那こりゃ本物ですかい」

十「疑わしく思うなら返せ」

八「ど、どうつかまつりまして、ありがとうございます」

一両という金をもらったので折助はうれしくってまるで夢のようだ。

謀事は密をもって尊し

十兵衛先生その茶店を出て、すぐと亀甲屋へ引っかえしてまいりました。新三郎出むかえて、

新「先生お帰りあそばせ」

十「おお新三郎、藤四郎はいかがいたした」

新「先生に足どめを申しつけられ、はなはだ退屈いたしたものと見え、ただいま店のほうにいっ

たようでございます。すぐさま呼びにいってまいります」

十「いやいやおらぬとはなによりの幸い、新三郎喜べ、予は城下においてはからずも赤松の下郎八五郎と申す者に対面いたし、これこれの由うけたまわってまいった、城代家老対馬兵庫はさすがに赤松を奸物と見てとり、快く思いおらぬ様子であれば、ただいま当家の亭主に申しつけ、予の名前をもってひそかに兵庫を呼びよせ、敵討ちの手はずを申しつけてつかわすであろう」

新「なにからなにまでのご厚志、このご恩は生々世々忘却はつかまつりませぬ」

十「これと申すもその方の孝心に天が感応ましましたのであろう。もはや大丈夫じゃ、気を安らかに持て」

とそこで十兵衛、硯ひきよせ、さらさらと一通り書面をお認めになり、亀甲屋の主人万兵衛を呼んで、

十「その方大儀ながら使いをもって、これなる手紙を当吉川家の家老、対馬兵庫助のもとへ持たしてやってもらいたい。さすれば兵庫助はかならずこの方をたずねてまいるに相違ないから、そのときは、かならずこの座敷へ案内してはあいならんぞ、客のないほかの部屋へ案内いたして、その上でこの方へしらしてくれるよう」

万兵衛はご城代家老の対馬さまを十兵衛公が兵庫助兵庫助と呼びすてにするのだから、これはお身なりこそ悪いが、りっぱなお身分のある方に相違ないと、万兵衛もつつしんで、

万「かしこまりました」

とさっそく使いをもって対馬兵庫助の屋敷へつかわした。兵庫助、城下市の町亀甲屋に宿泊いたしおる武士から手紙と聞いて、はてどなたであろうと封押しきって見ると、思いもよらぬ柳生

の若殿十兵衛先生だから驚いた。この度予の出むいたるは余の儀にあらず、当吉川家へ新参お召し抱えになったる赤松典膳なる者は、国元津軽にあって、予の家来中山新三郎の父、新左衛門を討って立ち退いたる者、当家に奉公をいたしおる由、突きとめたれば、父の仇を討たさんため、新三郎を召しつれて、かくまかり越したのである。この儀についてその方へ申し入れたき儀あれば、監物殿へ内々をもって亀甲屋まで立ち越えるよう……という文面、兵庫助いよいよ驚いて、さてこそかの典膳、平生よりして佞奸邪智の曲者と見て取ったが、はたしてさる旧悪のあるやつであったるか、それとは心づかざりしが、最初お召し抱えご無用と、再三わが君へご意見申し上げたるを、お用いなかりしため、かかることとはあいなったり、なにはともあれ、柳生先生へお目にかからずばあいなるまいと、

兵「やあ馬丁馬をひけ、ご城下市の町亀甲屋万兵衛方へまいる」○「はっ」

馬丁が厩から南部の逸物をひきだしてまいると、兵庫助は年齢こそ六十を越しておれ、名に負う戦場往来の古強者、ひらりと鞍にまたがるが早いか、一鞭あてて、

兵「はいよーっ」

トットットットッ……と市の町さしてかけだしました。亀甲屋の表へ着くと、ぴたり駒をとめる、馬丁が前へまわって轡を取る。兵庫助は馬丁に向かって、

兵「この横町へまわって待っておれ、人目にかかっては、少しつごうが悪いから」

○「かしこまりました」

馬丁は馬と一緒に横町へ入ります。兵庫助はあらためて亀甲屋の表から、

兵「許せ」

なにしろご城代家老の対馬兵庫助だから、亭主の万兵衛それへ飛びだして、頭を畳へすりつけ、

万「これはこれはご家老さまには、ようこそお越し下されました、いざお上がりくだされまするよう」

兵「ただいまご書面をくだされた先生へ、兵庫助参上つかまつりましたとお伝え申してくれ」

万「かしこまりました、お客さまよりおおせつけられておりますから、どうかお上がりくだされまするよう」兵「さようか」

兵庫助亭主万兵衛に案内されてきたのは当家の離室、ほかに客とてはございません。

兵「先生はいずれにいらせられるか」

万「あちらの座敷においでなされまするが、ご家老さまへうかがいます」兵「なんじゃ」

万「てまえ方へお泊まり下されました、あの八木原重蔵さまというお武家さまは、全体どなた様でございまするか」

兵「八木原重蔵……この方さような名前の方は覚えないぞ」

万「いえ、ご家老さまへお手紙を差しあげられた方でございます」

兵「なに、……さては柳生十兵衛先生が八木原重蔵といってご逗留あいなっておると見える。いや亭主、変名あそばしておらるるところに、この方がご本名を申したら、いかなるお叱りをこうむるか知れぬけれど、八木原重蔵とばかりでは、自然お取り扱いにご無礼があってはならぬ。さらばご本名を聞かしてつかわす。あの方こそ当時将軍家へ剣術のご指南申し上げる柳生但馬守さまのご惣領、剣道の神といわれる十兵衛三厳大先生である。必ずともにご無礼のなきよう…」

万「ひえーっ、あれが柳生の若殿さまで」

兵「さようじゃ、心にも心しておもてなし申せよ、さこの方のまいったことを申し上げてくれい」

万「かしこまりました」

亭主の万兵衛驚いた。あんなちっぽけな隻眼の汚らしい人が、一万石の若殿さまで、剣術の神さま、へえ人は見かけによらないものだ、と独りで感心して、十兵衛先生の座敷へまいります。知らないうちはなんとも思わなかったが、一旦聞いて見ると、どことなく威光あたりを払うのありさま、万兵衛廊下に手をつかえ頭をさげて、

万「へへーっ」

十兵衛先生は笑いながら、

十「亭主、兵庫助がまいって予の本名を申したな」

万「いえいえ決して……」

十「ははははは、申したらいたしかたがない、しからば対面いたそう、兵庫助のおるところへ案内いたせ」万「へへっ」

これから十兵衛先生はなれへおいでになり、襖さらりと押しあけて、ずかずかとお入りになった。兵庫助一間あまりも飛びさがって、

兵「へへっ」

と平伏する。

十「兵庫助であるか、予は柳生十兵衛である、見知ってくれ」

兵「ありがたきお言葉、はじめてお目通りつかまつりまする。てまえは当周防の城主、吉川監

物の家老職をあい勤めまする、対馬兵庫助にござりまする。ご書面ちょうだいいたし、取る物も取りあえず推参つかまつりましたる次第、なにとぞご用のすじおおせきかされましょうなれば、ありがたいしあわせに存じまする」

十「大略の事は手紙をもって申しつかわしたれば承知いたしたであろう。監物殿お召し抱えにあいなったる赤松典膳こそ、予の家来中山新三郎がたずねまわる不倶戴天の父の仇、いかにもして討たしてやりたいと、予もともども苦心いたしおったるが、天新三郎の孝心をあわれみたまいてか、ふと当家に奉公いたしておることを突きとめたれば、さっそく乗りこんでまいったのである。尋常に討たせるならばよし、万一むざむざ典膳を討たせるは、吉川家弓箭の名折れなればと、生なかかばいだていたすにおいては、かくいう柳生十兵衛、吉川家を向こうにまわして、当城下に大修羅場を演じるまでも、新三郎に孝心をとげさせる決心じゃ、この儀しかと返答いたしくれ」

兵「はっ、なかなかもってかばいだてなど、つかまつる存意はござりませぬ」

十「しからば、きっと典膳を討たせると申すか、よも間違いはあるまいのう」

兵「はっ、不肖なれども殿ご出府の留守中は当吉川家の掟を双方の肩ににないまする兵庫助、決して嘘いつわりなどは申し上げませぬ。さように旧悪ある者を召し抱えましたるは、実に面目のござりませぬ次第、これもひとえにそれがしの眼の届きませぬためで、主人監物はじめ家中一同のあずかり知らぬところでござれば、お咎めはなにとぞ拙者一人へおおせつけ下されとう存じまする」

十「いや咎めだてなどはいたさぬ。どうか新三郎の孝道をまっとうさせてやってくれるよう、この方から頼み入るぞ」

兵「恐れ入りました。しからばこれより立ち帰って、ただちに典膳を召し捕り……」

十「いやいやそれには及ばぬ、典膳はこの方より事によせておびき出すから、その許はこれこれかくかくの手段をいたしてもらいたい」

とひそかになにかお頼みになった。兵庫助は一々心得て、

兵「委細承知つかまつりました。その辺は十分に手当ていたしおきますれば、決してご懸念くだされぬよう……」

十「ふむ何分ともに頼むぞ」

ここで兵庫助はお暇を告げて立ち帰り、すぐさま登城いたして主人監物殿へお目通りいたし、お人払いの上このよしを言上いたした。監物殿ももとより賢明の君、ことに十兵衛先生がわざわざお乗りこみにあいなったとあっては、捨ておくわけにまいりませんから、万事の手はずは兵庫助へおまかせなされた。

こちらは十兵衛先生、その夜あらためてご酒宴を開かれます。これは新三郎が敵討ちをいたす前祝のお志、やがてご酒宴もあいはてると先生は一間へおやすみになり、新三郎、藤四郎の両人は次の間へ臥ります。藤四郎は横になったかと思うともうグーグー大鼾で寝てしまったが、しかし新三郎は明日こそ、三千年に一度咲く花の盛りを見るのだと思うと、精神がたかぶってどうしても寝つかれません。ようようトロトロとなったかと思うと、いつの間にお立ちいでになったか十兵衛先生、秘蔵の三池典太光世の一刀を引き抜いて、

十「やっ……」

というかけ声もろとも、新三郎望んで斬りつけてきた。寝ていた新三郎、はっと思って寝たま

まひらりと体をかわし、枕もとの一刀取るより早く鞘をはらってチャリーンと受けとめた。
十「新三郎でかした」
新「これは先生でござりましたか、恐れ入りました」
十「それだけの覚悟があれば、明日の敵討ちはもはや大丈夫であるぞよ、安心いたせ」
新「はっ」
十「いやこれは失念いたした。かんじんのその方の腰の物を改めずにおいたが、これへ持て」
新「はっ」
それなる一刀を差しだしますと、十兵衛先生行燈を引きよせて、ためつすかしつ眺めておられたが、
十「ふむ、匂いといい焼刃鉄色、まことに見事な業物、相州物と見たるは僻目か」
新「恐れ入りましたるお鑑識、いかにも相州の住人九郎三郎秋広の作にござりまする」
十「ふむ、先刻の覚悟といいこれだけの業物を所持いたすからは、よも仕損じはいたすまい。しかしながらその場に立ちいたらば、その方は典膳よりもさきに死ぬ覚悟をいたせ」

見栄と慾とにだまされる

そのうちに早や鶏鳴暁を告げ、夜はしらしらと明けかかります。ところへ亭主は銚子盃のし

たくをいたしてまいりました。これは十兵衛先生、昨夜の中におせつけおかれたのでございます。藤四郎はそんなことは少しも知らない。
藤「先生、今日は赤松先生のおやしきへまいりましょう。たずねてまいったら、喜んできっとご馳走をしてくださるに相違ございません」
十「いや藤四郎、昨夜いろいろと考えてみたが、予も柳生但馬のせがれ、陪臣の典膳へ当方より出向くというのもいかがのものであろう」
藤「それでは赤松先生を、こちらへお呼びよせになったら、よろしゅうございましょう」
十「いやそれもあまり気の毒である。かよういたそう。予は当国で有名な錦帯橋を見物にまいるゆえ、その方は典膳方へまいり、このたび予の供をして当国へまいったるが、直接にこの方がたずねるのもいかがと心得たから、錦帯橋まで迎えにまいれと、かよう申して無理にでも橋まで連れてまいれ、もし彼柳生十兵衛などは知らぬと申すかも測られんが、それはかまわぬ、どうでも錦帯橋まで連れだしてまいれ」
藤「へえ」
十「その時お供があるかとたずねたらば、十兵衛一人じゃと申せ、決して新三郎がおると申してはあいならぬぞ、これには少々子細あることじゃによって、後でゆっくり話して聞かせる」
藤「かしこまりました」
少々物の理解にうとい男だけに、まさかにこれが敵討ちだとは気がつかない、例によって大小をたばさみ、大きな鉄扇をしっかと握りしめ、ただ一人武者小路の赤松典膳の道場へとやってきた。玄関さきに突ったって、

藤「ええお頼み申す」
だみ声を張りあげて案内をこいますると、
○「どーれ」
とでてきたは門弟と見え、稽古着に袴を短くつけた若侍、
○「いずれからお出でになりました」
藤「これはこれはお取り次ぎご苦労千万、拙者こそは津の国大阪おもてにすまいいたす樽屋藤四郎と申す者、赤松先生をたずねて、はるばるまかり越しました。どうかさようお伝えくだされ」
○「少々おひかえを……」
典膳の前へまいって、
○「先生へ申し上げます」
典「加納氏なんでござる」
○「只今これこれ申してまいりましたが、いかがいたしましょう」
典膳聞いて驚いた。さてはあの剣術きちがいがきたか、とんでもないやつが、舞いこんだわいと思ったが、なにしろ以前しばらく、厄介になった恩もありますから、無下にことわるわけにもならず、
典「さようか、しからば奥へ通して下され」
○「はい、……え、樽屋さまとやら、どうかお通りくだされい」
こう挨拶をされると、藤四郎うれしくてたまらない。
藤「しからばご免こうむる、えへん……」

と悠々と奥へ通るから、門人もあっけに取られて見ております。一間へ案内されて待っているところへ、赤松典膳、今日では五十石吉川家の指南役、門弟も相当あって、なかなか大した羽振りになっています。
典「おおこれは樽屋のご亭主でござるか……」
藤「先生、今日はご亭主だけはご免こうむります。どうか樽屋氏とお呼び下されい」
典「ははさようか」
典膳相変わらず武士のまねを発揮しているなど心のうちで笑いながら、ふと見ると、いやどうもすばらしい扮装でございますから、いよいよおかしくてふきだそうとするのを、やっとこらえておりまするると、藤四郎はすましたもので、
藤「ええ先生、その後はしばらく、……いつもご壮健でおめでとう存じます」
典「いやその方も達者で重畳、しかしたいそうりっぱになったな」
藤「ええお喜びください、只今ではもはや町人ではなく、ごらんの通りりっぱな武士、さる大名の若殿さまに懇望せられて、余儀なく仕官いたしました」
余儀なくがすさまじい。
典「ほほーきさまを懇望さるる方があるとは珍しい、していずれへ奉公いたした」
藤「珍しいなどと先生あまりひどいではございませんか、私の主人というのは先生もごぞんじでござりましょう、柳生但馬守の若殿十兵衛先生でございまするぞ」
典「ええっ、柳生十兵衛先生へ……」
藤「いかにも、この度も十兵衛先生のお供をして当地へまいったのでござりまするが、うけた

まわれば先生には、てまえの主人十兵衛とは兄弟分だと申しますことで、私もそれをうけたまわって、さすがは赤松先生、天下の名人をご兄弟分にお持ちなされていらるるのかと、つくづく感心いたしてしまいました」

典膳あっけに取られて、

典「これこれなにを申す、いかにも十兵衛先生のお名前は承知いたしおるが、いまだご面会はつかまつらん」

藤「いえいえそのお隠しなされるところがおくゆかしい。実は十兵衛先生、さきごろ大阪へお乗りこみになりてまえどもへお宿を申しつけられた、その節私先生と一本試合を願いました」

典「ははあそれはそれは、して勝負はいかがであった」

藤「へえ、まあまあ相打ちで、勝負はつきませんでした」

典「嘘をいえ」藤「へえ」

典「十兵衛先生は剣術の神さまともおおせられる方じゃ、その方と優劣がつかぬなどということがあるか、いい加減に弄られたものだろう」

藤「先生見ていましたか」

典「見てはいないが、おおよそ察しがつくではないか」

藤「恐れ入りました、しかし十兵衛先生も町人でこれだけ使えればあっぱれなものだ、その方の流儀は東軍流と見たが、師匠は誰だとおたずねになりますから、これこれで赤松先生に習いましたと申すと、ふむ赤松典膳か、あれは木挽町の道場へ立ちよったこともある、わしと兄弟のまじわりまで結んだとおっしゃいました。ちょうど西国を漫遊いたそうと思うところだによって、

ついでに岩国へ立ちよりたずねてやろう、その方供をいたせと申されますので、それでてまえ、十兵衛先生と二人で当地へまいりました」

典「さようか、しかし拙者は木挽町の道場などへ立ちよった覚えはないがな」

藤「ははははいくらお隠しなされても駄目でございます。ちゃんと十兵衛先生がおっしゃっていらっしゃいました。しかしこれからすぐ赤松のほうへ押しかけていってはさぞ迷惑いたそう、また柳生のせがれ十兵衛がこっちからたずねて行くのもいかがなものであるから、こういたそう、この方は錦帯橋見物に出かけておるから、その方は典膳を同道して橋まで来い、そこでやあこれはこれは赤松氏、どなたかと思えば、これは珍しい柳生氏というぐあいに、出あうことにいたしたいと、十兵衛先生が申された、さあ先生、兄弟ひさしぶりの対面にでかけましょう」

典「待て待て、その方の申すことは拙者にどうも解せない、それは真物ではない、偽の十兵衛先生であろう」

藤「いえどういたして飛んでもない、全くもって正真正銘まじりっけなしの十兵衛先生で……岡山などではご城内からお乗り物をもってご家老の宮下頼母さまがお出迎えでございました」

典「ふーむ……」

といったが、典膳は軒吹く風にも油断のない敵持つ身。

典「して十兵衛先生にはお供の者があるか」

藤「ござります」

典「なにっあると……それはだれだ」

藤「新……」典「えっ」

藤「新……新参召し抱えの私一人」
典「ほかにだれもおりはせんか」
藤「へえ、だれもおりません」
典膳つくづく考えた。これはかねて聞く十兵衛先生慢心のあまり狂気なされ、清正を門弟にしたの、義経を家来にしたのとおおせらるる由、藤四郎方へおとまりなされたときに、拙者のことを聞かれ、例の病いで拙者を兄弟分だなどとおおせなされたのであろう。なにはともあれ藤四郎の申すを幸い、十兵衛先生に知己となっておけば、どっちへころんだとて損はあるまいと、ふと思ったのが典膳の運のつき。

思いぞ晴れる錦帯橋の仇討ち

身の破滅とは知らぬ典膳、
典「しからば藤四郎、錦帯橋へまいり十兵衛先生に対面いたそう」
○「先生私もお供いたしたい」△「拙者もお供願いたい」□「それがしも……」◎「てまえも……」
典「ああどなたも同道さっしゃい」
とここに門弟六七人をしたがえ、藤四郎と同道にて、赤松典膳ゆうゆうと錦帯橋へ乗りこんでまいった。今や橋詰めまできたと思うと、だしぬけに現れいでたる柳生十兵衛先生、鉄扇をしっかと握って大音声、

十「藤四郎待てっ」藤「へえこれは先生……」
十「その方がこれへ同道したこの者こそ赤松典膳であるか」
藤「へえ先生には赤松先生をお忘れなされましたか、赤松先生、柳生先生でございます」
典「おおこれは柳生先生、その後はまことに御無沙汰、いつもながらご壮健の体を拝して大慶に存じます」
十「だまれっ、その方ごとき卑怯未練のやつと懇意にいたしたおぼえはないぞ、新三郎いでよっ」
とおおせられると、かたわらの物蔭よりばらばらっとおどりいでたる中山新三郎、汗どめの鉢巻きりりしく、襷十字に綾どり、一刀の柄前に手をかけて典膳をはったとにらみ、
新「やあ珍しや赤松典膳、なんじよもやわれを見忘れはいたすまい。すぎつる年、奥州津軽にある時、囲碁の遺恨を根に持ち、わが父新左衛門を討って逐電いたしたおぼえがあろう。その仇を討たんため、長の年月憂き艱難いたしたるかいあって、今日柳生先生のご助力により、なんじをこれへおびきだしたと知らざるか、いざ不倶戴天の父の仇、尋常に勝負いたせ」
典膳おどろくまいことか、さては敵の術中におちいったるかと、地団駄ふんでくやしがったが、おっつかない。このとき門弟ども、すわこそ先生の一大事と、いずれも身じたくに及び、一刀すらりすらりと引き抜いた。十兵衛先生この体を見てくわっと睨まえ、
十「やあ猪口才な蛆虫ども、みだりにかばいだていたすにおいては、柳生十兵衛、許しはおかんぞ、後悔いたすなっ」

この勢いに呑まれて、門弟どもじりじり後へさがった。折しも彼方よりはいよーっとばかり砂煙り蹴たてて馬を飛ばして来ったるは、これぞ当岩国、吉川監物殿の城代家老対馬兵庫助、筋金いりの鉢巻きに火事装束、上に陣羽織を着用なして、小脇には大身の槍をかいこみ、それへかけつけ来って大音あげ、

兵「いかに典膳、柳生十兵衛先生よりのお頼みにより、このところにおいて、中山新三郎と真剣勝負申しつける、もはや人数をもって要所要所を

かためあれば、逃げようとてにげられはせんぞ、早々勝負に及べ、兵庫助これにあって検分いたす。また典膳の門弟ども、師弟の情誼をもって助太刀せんとあれば、許し得させる。しかしながらかまえて中山新三郎に立ちむかうことはあいならん、新三郎には柳生十兵衛先生お助太刀なさるるによって、助太刀は助太刀同士、十兵衛先生に討ってかかれ、もしそむく者あらばかくいう兵庫助が、これなる槍にて片っぱしより芋刺しにいたしてく

れるぞ」

と呼ばわった、いや門弟ども胆をつぶした。柳生先生など、いくらかかったとてかなうものじゃない、ご免ご免とばかり、われがちに逃げだしました。

典膳このありさまに、もはやのがれぬところと思ったか、

典「さようのお手配りあいなりました上からは、もはやつつむも詮ないこと、いかにも武士道の意気地にて、あれなる新三郎の父、新左衛門を討ったるに相違なし、おおせにしたがって尋常の勝負つかまつらん。しばらくご猶予を願いたい」

と刀の下げ緒をはずして襷となし、懐中の手ぬぐいをたたんで鉢巻きし、自慢の一刀不動国行の、裏と表の目釘に湿りをくれてそれへ進んだ。このとき兵庫助の下知と見え五六十人の足軽、ここかしこより現れいで、周囲をひしひしと取りかこみました。典膳気を励まして新三郎にむかい、

典「いかに新三郎、なんじごかしくもわれを討たんなどと、片腹痛きことなれど、望みによって勝負いたしつかわす。さあ来い来れ」

新「なにをこしゃくなっ」

と新三郎も大刀の鞘をはらってぴたり中段にかまえる。典膳は上段に取ってじりじりと進んだ。すると錦帯橋に仇討ちがある、それいけっというので、土地の男女老幼ども、黒山のごとく群集。そのうちに両人「やあ」「おう」と懸け声して、たがいに進みよったその時には、群集もさすがに鳴りをしずめ、いずれが勝つかと、かたずを呑んで眺めております。新三郎は一所懸命、隙あれかしと狙うけれども、典膳にくらべてはどうしても腕が劣りますから、心がやたけにはや

るばかり、更に討ち込むことが出来ません。典膳してやったりと踏んごんで、ややもすると斬りつけようとする、あせればあせるほど、新三郎の勝ち味が薄くなりますので、十兵衛先生こは捨ておきがたしと見て取った。典膳の手練ももはや十分会得したによって、今はとばかり和泉守行定の小柄を取り、またもや典膳が電光石火と斬りおろす一刹那、

十「えいっ」

と鋭く投げつけた。天下一の手は冴えたり、狙いたがわず典膳のこめかみをずぶーりと突きさした。急所の痛手に眼くらんで、典膳よろよろっとよろめくところを、新三郎すかさず大喝一声、おどりかかって典膳の肩先四五寸ばらりずんと斬りさげた。さすがの典膳も、もはやこれまで、ずどんと地響きして打ち倒れたから、十兵衛先生をはじめとして、四方を取りかこんだ群集一同、したりやしたりと褒めそやした。兵庫助は馬上よりこの体をながめ、白扇さっと押し開いて、

兵「やあやあっぱれあっぱれ、それ早く……」

新「はっ」と新三郎は、ただ一刀に典膳の首を斬って落とし、さて刀の血をぬぐって鞘におさめ、鉢巻き襷をとって、まず十兵衛先生の前へまいり、

新「先生のおかげをもちまして、首尾よく父の仇敵を、討ち取りましてござりまする。厚くおん礼申し上げます」

十「いやあっぱれであった」

新三郎つぎに兵庫助殿の前へまいり、これまたおん礼申し上げると、兵庫助も新三郎の腕前をほめまする。すぐと検死の役人がまいり、典膳の体を一応あらためた上、屍骸はお取り捨てとあいなりました。兵庫助は右の由一応太守へ言上いたさんと、十兵衛先生に別れ、足軽をつれ、城

内さして引きあげてしまいました。ところへ亀甲屋の主人万兵衛、羽織袴のいでたちで駕籠をもって迎えにまいり、

万「ええご本懐をおとげあそばし、さぞご満足でございましょう。あれへお駕籠をもってまいりましたから、お三人さまともどうかお召しくださるよう」

十「おお亭主か、それはなにより大儀であった、その方にもいろいろと、力添えになってかたじけない。改めて礼をいたすぞ」

万「恐れ入りました、どうかお駕籠へ……」

十「心得た」

十兵衛先生は新三郎と駕籠にお乗りなさろうとあそばすと、

藤「ええ先生しばらくお待ち下され」

十兵衛先生ふりかえって御覧になると、藤四郎が橋詰めでちゃんと座って膝に手をおき、まっさおになって、眼ばかりぱちくりさせております。

十「その方はなにをいたしておる、早くまいれ」

藤「ところが立てませんので……」

十「立てない、なぜ立てないのじゃ」

藤「へえ、見ん事抜けました」

十「なにっ、なにが抜けた」

藤「へえ腰が抜けまして、どうしても立つことが出来ません」

十「意気地のないやつだな」とずかずかそれへおいでになり、襟首をつかんでぐいと引き立て

ると、ようよう立てた。

十「どうじゃ」

藤「先生は剣術もご名人だが、腰を入れることもなかなかご名人でいらっしゃいますな」

十「たわけたことを申すな、はやく駕籠に乗れ」

藤「へえ」

これからいたして三人は、駕籠で亀甲屋へ引きあげてまいりました。かわるがわる入浴して、祝いの酒宴をいたしておるところへ、対馬兵庫助が、太守吉川監物公のおおせによって、乗り物をかつがせ十兵衛先生お迎えにまいりました。先生お断わりを申し上げたく思われたが、このたび新三郎仇討ちについて、兵庫助の尽力一通りでございませんから、この人のてまえむげに断わることもできず、しからば監物殿にお目通りいたそうと、その駕籠に召され、新三郎だけをつれて登城なされた。監物殿大いにお喜びになり、どうか当地にとどまって予に武芸指南をいたしてくれいとおおせられた。

しかるに十兵衛先生は、あいも変わらぬ例の脱線ぶりを発揮しているのだから、監物殿もあきれはて、いいかげんに応対しておられます。しかし新三郎へは、この度の働きをお褒めになって、いろいろ下され物がありましたが、この辺は略して申し上げます。なおお盃をちょうだいして亀甲屋方へおもどりにあいなり、

十「さて新三郎、その方も首尾よく父の仇を討ったれば、この上予の供をして、諸国漫遊したとて詮ないことであろう。明日にも出立して、故郷津軽へ帰り、主人越中守殿または近親の者へ、右の次第を物語りいたせ」

新「はっ、お言葉にはございますけれど、私はどこまでも先生のお供を、つかまつりとう存じます」

十「いや、その方の話によれば、只今のところにては、中山の家名断絶いたしおると申すではないか、しからばなおさらのこと、一日も早く立ち帰って、家名を再興いたすのが、亡き父への手向けであろう、予より越中殿へ手紙をつけてつかわすから、立ちもどると決心いたせ」

新「さまでにおおせくだされまするからは、ひとまず故郷へ立ち帰ることといたしましょう」

十「むむそういたせ……ああ藤四郎」

藤「へえ」

十「どうじゃその方はこのさき予の供をいたしたいか」

藤「いえ、もうお供はこりごりいたしました。当地までお供をいたしましたばかりで、五六年寿命をちぢめました。私もお暇をいただきとう存じます」

十「ははは、さようか、しからば立ち帰るがいい、しかしその方へ土産としておもしろい話をしてつかわす」

藤「へえ、それはどういうお話で」

十「古池の蛙が子供を生んだ」藤「へえ」

十「蛙の子はおたまじゃくしといって、ちょっと見ると鯰によく似ておったから、鯰をうんだと喜んでいるうちに、手足ができて、ぴょいぴょい飛びだしたから、親蛙は驚いて、やはり蛙の子は蛙だと申したということじゃ、どうだわかったか」

藤「ちっともわかりません」

十「感じのうといやつじゃ……」

藤「へえ、その蛙がどうかいたしましたので」

十「そうではない、宿屋の亭主は侍風体をしたところで、宿屋の亭主だけの器量しかない。これからのちは、侍になどなろうという了簡を、起こすなという謎だ、わかったであろう」

藤「恐れ入りました」

藤四郎すっかり恐れ入ってしまった。その翌日、中山新三郎と一諸に岩国を出立、大阪へ立ち帰ります。新三郎は大阪から一人で江戸へまいり、旧主人の津軽越中守さまお屋敷へまかり出て、首尾よく十兵衛先生のお助けにより、岩国の錦帯橋で、敵討ちの素志をとげたおもむきを訴えいでましたから、越中守さまことのほか喜ばれ、なお、十兵衛先生の添え手紙もあることでございますから、新三郎へは家名再興をお許しになり、改めて三百石つかわされました。

えへんパッサリ天下無敵の豪傑じゃ

さて柳生十兵衛先生には、新三郎、藤四郎の両人と別れてのちは一人旅、もう旅なれておられるから、さほど不自由とも思わず、わずかの荷物をかついで、岩国の城下をご出立になりました。これから山口の城下へ入って、中国の強藩毛利のようすをさぐろうというお考え。ぶらりぶらり歩いてきた街道の松並木、見るとかたわらに一軒の茶店がございます。

十「ああ許せ」
亭「ええいらっしゃいまし、どうかお掛けあそばして」十「もう何刻かの亭主」
亭「さようで、かれこれ八つ刻（午後二時）にもなりましょうか、たいそう日あしが短くなりました」
十「そうじゃのう、ここから船木の宿まではよほどあるかな」
亭「さようでございます。三里と申しますが、三里まではございません、まず二里半と申すところで……」
十「さようか、どうも道が悪いのう」
亭「へえさようでございます。しかしこれから一里おいでになりますと、砂川というところへまいります。そこには渡船場がございまして、その川さえ越してしまえば道もよろしゅうございます」
十「ははあ、すると日のあるうちに船木までいけるな」
亭「ええそりゃあもう旦那さま、ただいまも申し上げましたように、三里といっても二里半しかございませんから、いくら日が短くなったとはいえ、ゆっくりとお着きになれます」
十「さようか、どうも今日はひどくくたびれたが、早く船木まで行きつきたいものだ」
十兵衛先生渋茶を呑んで、かわいた咽喉をうるおして居られまするとと、折からこの茶店の表からヌウと入ってきた一人の武士、身のたけ六尺二寸もございましょうか、顔といったら赤銅色に黒くやけ、眉は毛虫のはったごとく、鼻のひろい、口の大きい、おまけに非常な反っ歯、黒木綿の紋つきに、義経袴をはき、天秤のような大刀を帯して、小刀でも普通の者の大刀くらいはござ

いましょう。肩に両掛けをかつぎ、手には八角に削りあげた赤樫の棒、手元と先に金輪がはまっているやつを杖についております。
武「ああ亭主ゆるせ」
声もまるで雷のようだ。
亭「へえこれはいらっしゃいまし、どうぞお掛けあそばして」
武「その方が掛けろと申さなくとも、かく入って来れば腰をかけるに決まっているぞ」
亭「へえ恐れ入りました」
武「なにも恐れ入るには及ばぬではないか、早く茶を持参いたせ」
亭「ただいま差しあげます……へえ、どうも、お待ちどおさまで」
武「これから船木までは何里あるかな」
亭「へえ、只今もこちらの旦那がおたずねになりましたが、三里と申しますけれど、二里半ぐらいしかございません」
武「まだ二里半もあるか、いや今日はどうもひどくくたびれたが、どうじゃ亭主、この辺に相当腕のたつ武芸者は住まいおらぬか、それもただの武芸者ではおもしろくない。まず先生とか豪傑とか、いわれるくらいの者はおらぬか」
亭「この付近には、剣術の先生などはおいでなさいません、山口までいらっしゃいますと、なかなか強い先生が、たくさんいらっしゃるようでございます」
武「さようか、どうも名人豪傑というものは少ないもので、この方など日本六十余州をまわることこれで五度目だが、一度として負けたことがない。いま少し強いやつに出会いたいと思うが、

拙者が来たと聞くと、皆こそこそ姿をかくして、試合を避けるのだからなあ、この腕が夜泣きして困るわい」

茶店の亭主この話を聞いて、

亭「へえすると旦那さまは、なかなかお強うございますな」

武「まず剣術をもって拙者の右にいずる者は、日本広しといえども恐らくはあるまいな」

亭「へえ大したもので、そのくらいのお腕前なればご遍歴中、定めて面白いお話がたくさんございましょう。ここでは怪物を見現したとか、又あすこでは大蛇を退治したとかいうような……」

武「そりゃ数えきれぬほどある、その中でも下野の国、日光山の裏山では、天狗と試合して、とうとう天狗を打ち殺したが、あのときはわれながら勇ましかったよ」

亭「へえ天狗を、打ち殺しておしまいなすって……」

武「そうじゃ、そのほかに大蛇を引きさき、あるいは狼を踏みつぶすなぞは、珍しくないことだ」

亭「へえさようでございますか」

と感心する亭主を煙にまいて、しきりと大言壮語しておりましたが、十兵衛先生の姿をみとめて、

武「ああいやそれなるお武家、貴殿も武芸修行の御仁とお見受け申したが、定めて諸国ご遍歴中、勇ましいお話がありましたろう、あらばうけたまわりたい」

十「いえいえどういたしまして、私は武芸修行者などではございません。恥ずかしながら大小こそ差してはおれど、剣術のけの字も存ぜぬ寺侍で……さようにごていねいのご挨拶では恐れ入ります」武「うむ、寺侍か」

十「さようで」武「いずれの寺侍かな」

十「江戸芝三縁山増上寺の寺侍で、八木原重蔵と申し、このたび西国のさるところへ、用事あってまいるものでございますが、懐中には大金を所持しておりますから、途中盗賊でもあってはならぬと、こけおどしのための大小、実は抜くすべも存じませんので」

武「いやさようであったか、なるほど、寺侍は寺侍相当の知恵がでるものだな。そういうことなれば、拙者も九州へまいる者であるから同道して来い。この方さえついておれば、賊の百や二百くらい現れたとて、これなる棒で一人のこらず皆殺しにいたしくれる」

十「さよう願えますれば、私においてもどのくらい力強いか知れません。ええ先生のお名前はなんとおっしゃいますので」

武「この方か、この方は出羽最上の浪人、溝口源五左衛門藤原正勝と申し、力は百五十人力にして、鞍馬八流の奥義をきわめた豪傑だ」

十「へえさような大先生の、お供をいたしてまいりますれば、親船に乗ったも同然、どのようにか心強うございましょう」

源「むむ拙者にあったるはその方のしあわせ、運のいいやつじゃ」十「さようでございます」

源「どうじゃ、ぶらぶら出かけるといたそうか」十「お供つかまつります」

源「その方持ち合わせがあれば、茶代を一緒にはらっておけ」十「かしこまりました」

源「それから、わしの荷物もかついでまいれ」

こやつ無礼なやつだと思われたが、なかなかおもしろいやつらしい。こいつと一緒にまいった

らば、道々さだめておもしろい芸当をしでかすであろう、藤四郎を大阪へ帰してから、まことに興がさめたように心得ていたが、こいつはいい相手ができたわいと思っていらっしゃる。

お供はつらいねと、十兵衛先生

自称豪傑は、こいつはいいお供を召しかかえた、これから先々の路用万端をもたして、おれはおんぶでいけるわいと喜んでいる。

十兵衛はやがて茶代を払い、ご自分のお荷物の上に、この武士の両掛けまでかついで茶店を立ちいでました。先生もとより力量もあれば、剣術も日本一でございますが、かつぎ物になっては、町々の立ちん坊よりは下手で、四五町もいくと肩が痛んできた、あっちこっちと、かつぎかえて見たりなどしているために、どうしても彼の武士より足がおくれます。すると源五左衛門は立ちどまってふりかえり、

源「これこれ重蔵重蔵、早くまいらぬか、なにをいたしておるのじゃ」

十「へえ、なにぶん荷物が重いので……」

源「それ位の荷物が重くてどうなる、意気地のないやつだ、早く歩け歩け」十「へえへえ」

十兵衛先生もうこらえきれなくなって、提げてみたりかついでみたり、しまいにはずるずる大道を引きずっていく。源五左衛門は例の棒を杖にすたすたと先にたって、かれこれ道の一里もきたと思うと、砂川の渡しへ着きました。

源「重蔵」十「へえ」

源「早くまいれ、船がでるようじゃ」

十「かしこまりました」

両人がすたすた岸辺までいくうちに、船頭が棹を取って、ぐーっと一つ突っぱったから、船は岸辺をはなれて、チャチャチャと二三間出ました様子。源五左衛門これを見て、

源「やあ船待て、船頭船をだすことまかりならん、天下の豪傑主従にて乗りこむ、もどせ返せ、もどさぬとあれば、その方のそっ首を引っこ抜くぞ」

船のなかで船頭が、

船「へん人形じゃあるめえし、むやみと首なんぞ引っこ抜かれてたまるけえ、べらぼうめ……もしお武家さま、船は一旦出たからは、返すのもどすのということは忌み言葉でげす。後船を待ちなせえ、一日に一艘でおしまいになるんじゃございません、何度もでるんでげす。……ざまあ見やがれっ、はははははは」

源五左衛門聞いて怒るまいことか、真っ赤になって、

源「やあ天下の豪傑に向かって後船を待てとはなにごとだ。すみやかに船をもどせばよし、もどさぬとあらば許しはいたさぬぞ、もどせもどせ」

するとこのとき、この船に乗りこんでいた二人の虚無僧がございます。その一人が、

虚「ああお船頭」船「へえ」

虚「われわれも先刻から待った覚えがあるが、渡し一里といって、日短のときはまことに困る

もの、もどると申しても五六間のところ、ご苦労だが乗せてあげてくれ」

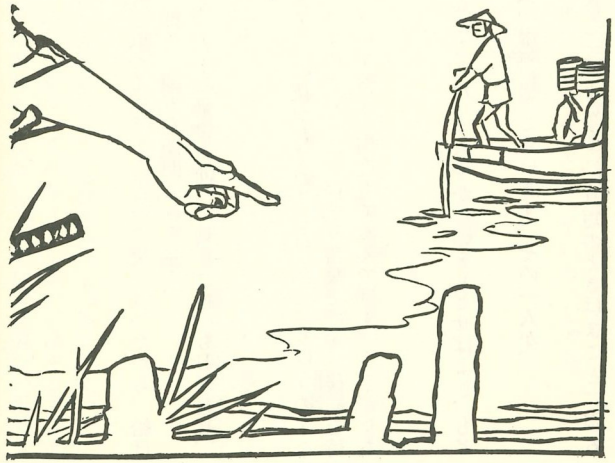
船「へえなにね、わっちもお客さまのことでげすから、ただもどしてくれならもどしてもやりましょうが、首を引っこ抜くの、天下の豪傑が乗るのだなどと、生あ吐くのがしゃくにさわりやすからもどさねえんで。あいつあしばらく川岸にさらしておくほうがいいでがしょう」

虚「いやそれは悪い、あのような武士であるから、後でどのような乱暴をしかねまいものでもない、もどしてやんなされ。ではわしがもどしてやるから、おまえは一服するがいい、棹をこっちへ貸しなさい」

船「なにもどすならわっちがもどしましょう」

虚「ままいい、棹を貸しなさい」

と一人の虚無僧は船頭の棹を取って、船の舳に突ったちなかなか見事に船をあやつ



り、だんだんとこっちへもどしてきた。源五左衛門それと見て、

源「いや虚無僧きさまはなかなか感心なやつだ、はやくもどせはやくもどせ」

虚「ただいまもどして進ぜるから、しばらくお待ちなさい」

源「なにをぐずぐずいたしておるのじゃ、はやくもどさぬか」

というううちに、船は岸辺の四五尺手前までツーツーッともどってきた。源五左衛門よほどせっかちと見えてくだんの棒を力に、ぱっと船へ乗りうつってきた。よくあるやつ

で、汽車などでもまだ停まらぬうちや、動きだしたときに飛び乗ったり飛びおりたりする人がありますが、あれは慎みたいもので、それがためとんだけがをすることがあります。さほど急いで乗り降りしたところで、時間でいえば一分と違わない、そいつをせっかちにあぶない芸当をやったためにけがをしてはつまりません。源五左衛門もその通り、わずか四五尺のところを待たずに、ひらり船へ飛びうつった。その勢いで船がツーと向こうへ逃げたから自分は体の中心を失って、あれっという間に、川の中へドブン……ブクブクッといって、二三度浮き沈みして、だいぶん水を飲んだ様子。虚無僧大いに驚いて手に持った棹を突きだし、

虚「それ、この棹へおつかまりなさい」

それでようよう救いあげられた源五左衛門、自分の粗忽はそっちのけにして、

源「やあ虚無僧、よくも拙者を川へ突きおとしたな、さあ容赦はならぬ。手討ちにいたすからさよう心得ろ」

ぶるぶるふるえながらたいそうなけんまくでどなりつけました。

槿花一朝、豪傑の夢

虚「この体にかの虚無僧、これはしたりお武家、ご酩酊と見える、今しばらくお待ちなさればかようなあやまちはなかったものを、船の着かぬうちに乗りうつろうとなされたから、水中へおちたのでござろう。それをなんぞ拙者のせいのようにおっしゃるは迷惑千万」

源「だまれ、この方が船へ乗りうつらんとする油断を見すまして、その方がわざと棹を突っぱったればこそ、拙者が足だまりを失って水中におちたのだ。町人百姓なれば許してもつかわそうが、虚無僧はもと武士とのことであれば、このままにはできぬ。さあ尋常の勝負に及べ」

虚「これは近ごろもって迷惑……」

源「勝負いたさんとあれば、船中乗り合いの者ども一人のこさずなで斬りにするぞ」

乗り合いの客はおどろいた。

○「おいおいなんにも知らねえ俺たちまで恨んで、なで斬りにするといっていやがる」

△「わけの分からねえやつにかかっちゃたまらねえ。逃げだそうか、けがでもしちゃ大変だから……」

船中なんとなくざわめき立った。するといま一人の虚無僧が、

虚「これこれ一竹、かまわんから片づけてしまいなさい。ぐずぐずしていては面倒だから」

一竹「さようなれば兄上片づけてしまいましょう……お乗り合いの衆、少々手間取れますが、しばらくそれにてご見物ください、拙者がいま一遍あの侍に水を飲まして眼をさまさせてやりますから。これ侍、さほどまで勝負を望むとあれば相手になってやるからしばらく待て」

と棹を船頭へ渡して、ひらり岸辺へあがった。一竹と呼ばれた虚無僧、腰に帯した尺八を抜き取って身がまえた。源五左衛門びしょぬれながらも大刀の柄に手をかけて、

源「おのれ先刻から聞いておれば、片づけるの水を飲ますのなどと無礼申しおったな、覚悟し

ろっ」

と天秤棒に等しき大刀すらり抜きはなって、大上段に振りかぶった。船中の乗り合いこの体を見て、

○「なんだあの野郎、一方が尺八だのに刀なんぞ抜きゃあがって、もし一竹さんとやら、しっかりやっておくんなせえ、後ろにゃ俺がひかえてるぞ」

△「おいおい兄弟、大きなことをいうな、てめえなんぞ後ろにひかえておってなんの役にたつんだ」

○「なにい、あぶなくなってきたら真っ先に逃げだしてやらあ」

わあわあと騒ぎたてる。しかるに岸辺では自称豪傑溝口源五左衛門、やっと大喝一声まっこうより斬ってかかるを、虚無僧ひらりかわして手元に飛びこみ、源五左衛門の利き腕をぴしりっ打った。腕前のできる人に打たれたからたまりません。腕がしびれて持ったる大刀ガラリそれへ取り落とした。これはとあわてて拾いにかかるところを、電光のような当て身を一つポンと当てられたから、源五左衛門うーんとその場へ気絶してしまいました。この体に乗り合いの者一同わっと声をあげて褒めそやします。

一「兄上どうも思いのほか弱い侍で」

兄「ははは、未熟なる腕前でありながら、尋常の勝負などとは片腹痛いことだ、これこれ一竹、そのままに打ち捨ておけ、しばらくさらしておけば息を吹き返して驚くことであろうから」

一「かしこまりました、お乗り合いの衆、どうもお待たせいたした」

と船に乗らんとする、しじゅうの様子を見ておられた十兵衛先生、

十「いやどうも心細い豪傑もあったものだ、これで大蛇を引きさき狼を踏み殺せるのか知ら……ああこれ虚無僧しばらく待て」

一「なんだ」

ふりかえって見ると隻眼小兵の侍。

十「いま気絶したこの侍は、それがしの主人でもあれば師匠でもあるのだ。師匠とも主人ともいうべき人を殺されてはこのままにしてはおかれぬ、讐討ちをするからしばらく待て」

一「なんだ師匠でもあり主人でもある、このばか侍のかたき討ちをする。これこれたわけたことを申すな、師匠のこやつがこれほどもろく打ち負けるものを、きさまが向かったとてかなうと思うか、それよりも水の一杯も飲ませて介抱してやれ」

十兵衛先生、こやつ無礼なことをいうやつとおぼしめしたが、

十「いやたとえかなわぬまでも仇討ちするのが武士の道だ。一寸ここへまいれ、なにその方ごとき者は、すぐにやっつけてしまうから……」

一「いわしておけば無礼なことを申すやつじゃ、兄上いかがいたしましょう」

兄「主人が主人なれば家来も家来だ、望むというのであるから、やってしまえ」

一「かしこまりました」

一竹引き返して、

一「これ、さまで望むなら相手になってつかわす、どこからなりとかかってまいれ」

十「いやきさまのほうから打って来い、これなる鉄扇で扱ってつかわすから」

一「おのれへらず口をたたくやつだ、観念しろっ」

と尺八を取って十兵衛先生の真っ向からやっと打ってかかった。ひらりかわして、一竹の手元へ飛びこんだその早技、ポンと水月の当て身をくれたから、一竹もろくも尺八を握ったままでむーんとそれへ気絶した。この体を船中にあって眺めていた一竹の兄、大いに憤り、

兄「おのれ憎いやつ、舎弟のかたきだ観念しろ」

とこれまた尺八を取って打ってかかるを、十兵衛先生ぱっと引っぱずし、泳ぐ所を利き腕一つ打ったから、持ったる尺八ガラリそれへ取り落としたが、ぱっと後ろへ飛びさがり、吹き替えの尺八取りだすより早く、またもや鋭く打ってかかる。十兵衛先生、鉄扇をもって手軽にポンポン払いのけ、隙を見て手元に飛びこむが早いか、

十「えいっ」と一喝、左の拳を突きだしたと見るや、兄も同じくばったり倒れて、そこに気絶してしまいました。乗り合いの者はあっけに取られて眺めておりますと、

十「ああこれ船頭、二人とも殺したぞ」

船「うへっ……ど、どうぞ、い、命ばかりはお助けを……」

十「いやその方どもをどうしようというのではない、水を一杯汲んでまいれ、活かしてやろう」

船「へえ」

船頭恐る恐る茶碗に川水を汲んで持ってまいりまするると、十兵衛先生、虚無僧兄弟、ならびに溝口源五左衛門に活をお入れになったので、三人とも夢からさめたように、きょろきょろ顔を見合わしております。

十「ははははどうじゃな、気がついたか」

三「へへっ……どうも恐れ入りました」

十「ところでこの場はそれがしが仲裁いたすから三人とも睦まじくいたせ」

兄「恐れ入りました、どうかよろしくお願い申しまする」

十「どうじゃな豪傑、いまこれこれで、その方のかたきはそれがしが討ってやったから、この場もやはりそれがしにまかせるか、それともいま一遍これなる虚無僧に殺されて見るか」

源「いやどうも恐れ入りました。なかなかもってわれわれなどの及びませんところ、どうかよろしきようにお取りはからいを願います」

十「ああさようか、これ虚無僧」兄「はっ」

十「これはな、溝口源五左衛門藤原正勝といって、日光山の裏山で天狗を退治し、その他大蛇を引きさき、狼をつかみ殺し、これまで諸国を武術修行して、数度遍歴いたしたが、手にたつ者とては一人もない、名前を聞いただけでいたるところの武芸者が、道場を閉めてにげだすというくらいの豪傑の大先生じゃそうじゃ、のう豪傑、それに相違あるまい」

源「へへっ恐れ入りました。あれはみないつわりでございましたので」

十「いやいやそうではあるまい、只今これなる虚無僧と試合いたしていたところを見たが、なかなかあっぱれな腕前、実に感心いたしたぞ」

ひやかされて源五左衛門、今までの威勢すっかりなくなり、両手で頭をかかえて小さくなっております。

見る目美し兄弟愛

この時かの兄と呼ばれた虚無僧、十兵衛先生の顔をつくづくと眺めて居りましたが、やがて、

兄「ええ先生にうかがいたてまつりまする。あなたはもしや岩国において、中山某なる孝子にお助太刀あって、仇討ちをなさしめたまわれた、柳生十兵衛大先生ではございませぬか」

十「いやさようなものではない、拙者はこれなる天下の豪傑、溝口源五左衛門藤原正勝大先生の門人である」

兄「いえいえお隠しなされましても、ご面体ならびにお腕前、たしかに柳生大先生と見たてまつりました。てまえどもは京都丸山妙光寺配下の普化僧、一道、一竹と申しまする兄弟、なにとぞご本名をお明かしくだされますれば、ありがたいしあわせに存じまする」

十兵衛先生にっこりして、

十「そうまでに申すなら、本名を名のってつかわす、いかにもそれがしは柳生十兵衛であるぞ」

いわれて三人の者はっと驚き、中にも遥かこなたへ飛びさがったところの兄の一道が、

一道「かかる大先生とも存ぜず、先刻より無礼のだんだん、お許しくだしおかれますれば、ありがたきしあわせに存じまする」

十「いやいやさような事をかれこれと咎めだてする予ではない。これ豪傑、予は芝三縁山増上寺の寺侍といったが、全くは柳生十兵衛と申す者じゃから、これからとてもよろしくお引きたてを願いますぞ」

源「うへへっ……」

源五左衛門泣きだしそうになって恐れ入っております。

一道「ときに先生、てまえは以前、豊後大友家の浪人岡三十郎、またこれなるは舎弟三平と申す者でございまするが、讒者の舌さきにかかって主家を退転いたし、かく普化僧となって諸国をめぐり、名ある武芸者をたずねて、一本の教えを受けおる者にございまする。しかるに思いもかけず先生にお目通りいたしましたるはこの身の幸い、なにとぞわれら兄弟へもお供おおせつけ下されまするよう、ひとえに願いあげたてまつります」

十「さようか、実は今まで二人の供を連れて歩いたところ、岩国から両人とも帰したので、まことに無聊に苦しんでおった、ところが途中の茶店でこれなる溝口大先生に、お供おおせつけられたるはよいが、荷物をかつがされたのには閉口いたした。おまえたちも荷物さえかつがせなければ一緒にまいってよろしい」

一道「どうつかまつりまして、われわれこそ先生のお荷物をかついで、お供いたしとうございまする」

十「さようか、ではよしよし、まいろう。これこれ豪傑、その方も一緒にまいれ、着物がぬれてさだめて冷たかろうが、次の宿までがまんしろ」

源「へえ、先生どうかもう豪傑豪傑とおっしゃることだけはご免くだされ」

十「ははは、では豪傑の看板は取りはずしか、それもよかろう。船頭大きに待たせてすまな

かった」

船「ど、どう致しまして……あなた様が音に名高い柳生大先生さまで、道理でお強い方だと思いました。さてさて皆もう少しそばによってくだされ、柳生大先生がお乗りこみだ。ええ先生これへ敷き物を敷いてございますから、どうかこれへ……虚無僧さんはそっちの艫のほうへ」

一「委細心得た」

船「それから、おい豪傑、おめえはそこの肥桶の隅へ。船がゆれると少しチャプつくかも知れないから、そのときは用心してくんされ」

源「いやひどいことをいうやつだ。船頭ちと待ってくれ、拙者の提げている十貫目の樫の棒はどこへやった」

船「冗談いっちゃいけねえ、十貫目の樫の棒だなんて、あれは桐の木に樫の色をつけたんじゃねえか」

源「これはけしからん、たしかに樫で鉄輪だけでも三貫目はあるんだ」

船「ははははそんなごまかしをいったってだめだぞ、さっきおめえさんが船へ乗りそこねて、河の中へ飛びこんだとき、おめえさんだけ沈んだが棒は沈まねえ、おいらあおかしいと思って棹で引きよせたら、樫じゃねえ桐の色つけだ、おいらあおかしくなって、突っぱなしたら、ふわりふわり流れて行ったよ、はっははは」

源「これは面目ない……それから先生拙者の荷物をお渡し願います」

十「ははは荷物は色つけでないと見えてばかに重い、とうていかつぎきれないから、十町ばかり前の辻堂の横へ打ち捨て来たぞ」

源「これは情けない事をなさいましたな、あの荷物がなくてはてまえは道中いたしかねますから、これでお別れして荷物を拾ってまいります」

十「ははは、それは気の毒であった、では縁あらばまた再会いたそう」

源「はい……どうも今度はひどい目にあってしまった」

と自称豪傑の溝口源五左衛門、すっかり箔をはがされ、ほうほうの体でもと来た道へ引っ返しましたから、その後ろ姿を見た乗り合いの者、思わずプッとふきだしました。そのうちに船は向こう岸へ着いたので、まず十兵衛先生を先にたて、一同上陸いたし、いずれも船木の宿へ入ります。十兵衛先生は両名の兄弟をしたがえられ、和泉屋久右衛門方にお泊まりにあいなりましたが、その夜兄弟に向かわれて、

十「予の供をいたすもよろしいが、その風体ではまことに困るから、もとの武士に立ち帰るようにいたしたらどうじゃ、次第によってはその方らは十兵衛がいずれかの藩へ推挙いたしてつかわすから」

一道「ありがとう存じまするが、すぐこの場で支度を脱ぎ捨てるというわけにはあいなりません、よってわれら兄弟のうち一人が先生のお供をつかまつり、一人が兄弟両人の法衣袈裟その他の物を持って、京都妙光寺へ納め、すぐまた立ちもどって、またまた兄弟打ちそろい、先生のお供をいたしとう存じます」

十「いやそれはいい考えじゃ、しからばさようにいたせ」

一道「かしこまりました」

一竹「兄上、では私があなたの袈裟法衣をお預かりいたし、京都へ立ち越えることに致します

から、あなたはこのまま先生のお供をなさいまするよう」

一道「それは気の毒だから、わしがその方の袈裟法衣を預かって京都へまいろう」

一竹「いえいえ兄上にさような事をいたさせてはあいすみませぬ、てまえが……」

一道「いやそうではない」

この美しい兄弟の情愛をごらんなされた十兵衛先生。

十「これこれ兄弟の者、さようかばいあっていては、いつ果てしのつくものでもないから、かようにいたせ、予がこれにて二本の籤をこしらえるから、これできめてはどうじゃ」

兄弟とも手をうって、

一道「それはまことにありがたいことで……」

そこで十兵衛先生二本の籤をつくって、兄弟の者に抽かせましたところ、京都行きは兄の一道、即ち三十郎にあたって、弟の一竹の三平は、十兵衛先生のお供をする事になりました。

三十「では先生、私は明日お別れいたして、京都へまかり越します」

十「さようか、しかし袈裟法衣を納めたらば、ただちに引き返してまいれ、予はこれから九州に入り諸国をめぐって、島津領分へ入るつもりであれば、あとでたずねてまいったならば、土地の重役にたずねい、予の行き先はただちにあいわかろう」

三十「委細承知つかまつりました」

とその夜は別れの盃をくみかわし、翌日は兄の岡三十郎は三平の袈裟法衣を受け取り、十兵衛先生及び舎弟の三平に別れをつげて、船木の宿を出立いたしました。これぞ兄弟この世の別れであったとは、のちにぞ思い合わされました。

三十郎に別れてのち十兵衛先生は、岡三平を供に連れて、山口の城下に入り、毛利公のようすを探ってそれより馬関へまいり、便船を求めて豊前の国へ渡られました。これより有名なる宮本武蔵にご対面の上、吹き針の名人有馬喜兵衛と試合のひとくだり。

一堂に会す四名人

豊前の大浦へ船の着くまでは別に変わったお話もございません。それより小倉に入る、当地は小笠原左近将監忠実侯のご城下、当ご領内柳ヶ瀬には、岸柳島の旧蹟をのこす有名なる新免二刀流の開祖宮本武蔵政名、入道して二天玄信と申し、お城下萩の小路というところに庵室をかまえて風月を友とし、静かに余生を楽しんでおります。二天玄信においては十兵衛先生が訪ねられたと聞いて大いに喜び、庵室に案内して手づくりの田舎料理を馳走し、地酒をくんでもてなされる、されば十兵衛も大きに喜んで、よもやまの打ちとけたお話、ところへ庭の柴垣ホトホトと打ちたたく者がありますので、武蔵それへ立ちいでて、

武「どなたじゃ、押せば開く柴折戸、遠慮なく入らっしゃい」

○「しからばご免くだされ」

と入ってまいりましたるは、年のころ三十前後のりっぱな武士、武芸修行の者と見えて、試合用の竹刀木刀を袋に入れてたずさえております。やがて頭をさげて、

○「ええそれがしは越前敦賀の山中に閑居いたしまする、伊東弥五郎景久入道一刀斎のお取りたてをこうむりましたる、小野治郎右衛門と申しまする者、宮本先生ご在宿なればお目通りつかまつりとう存じまする」

武「ほほう、そこ許が音に聞く伊東の弟子、小野治郎右衛門殿であられるか、武蔵はわしじゃ、ようたずねて来られた。ちょうど今柳生十兵衛殿も訪ねて見えられたところだから、まずこちへ上がられるがよい」

やがて足を洗って上がってまいった治郎右衛門、はるかこなたに両手をついて、

治「これは宮本先生には初めてお目通りつかまつりまする、何分ともによろしくお願い申し上げまする」

武「いやいやもはや世に捨てられた二天玄信、騏驎も老いては駑馬にしかずとか、かように老碌いたしてはかえってこちらからよろしくお願い申さなければならぬ」

治「恐れ入りましてござりまする」

武「さてこれにおられるは柳生十兵衛殿であらっしゃるぞ」

治「ははっ、これは柳生先生にござりまするか、てまえは小野治郎右衛門と申しまする者……」

十「はあそこ許が小野治郎右衛門殿であられるか、小野派一刀流の達人とかねがねうけたまわっていた、ずっとこれへ……」

ここで三傑がおちあいましてさまざまの物語をいたしておりまする、とまた庭の方からぬっと顔を現した一人の老人。

老「玄信ご在宿か」

武「これはいいところへ見えられた、さあさあ上がらっしゃれ」

老「どうやらご来客の様子じゃから、後刻また来るといたそう」

武「いや来客は来客ながら、これにあらせられるは柳生十兵衛殿、ならびに小野治郎右衛門氏だ、まあこれへ来てご挨拶さっしゃい」

十「武蔵先生、あれなる老人はいずれの御仁じゃな」

武「あれは豊後の住人にて有馬喜兵衛信義と申し、試合最中針を吹いて、敵を倒すという不思議な術を会得した者でござりまするて」

十「おう、かねて聞き及んでいた有馬喜兵衛先生、吹き針というものを見たいものであるが」

武「さあ有馬、これへ来さっしゃい」

喜「しからばご免こうむる」

と有馬喜兵衛もその席へつらなり、ますます話に花が咲いて、刻の移るも忘れましたが、

十「ときに有馬氏」

喜「はあ」

十「これまでうけたまわっていたそこ許の吹き針というものを、一つ見せては下さるまいか」

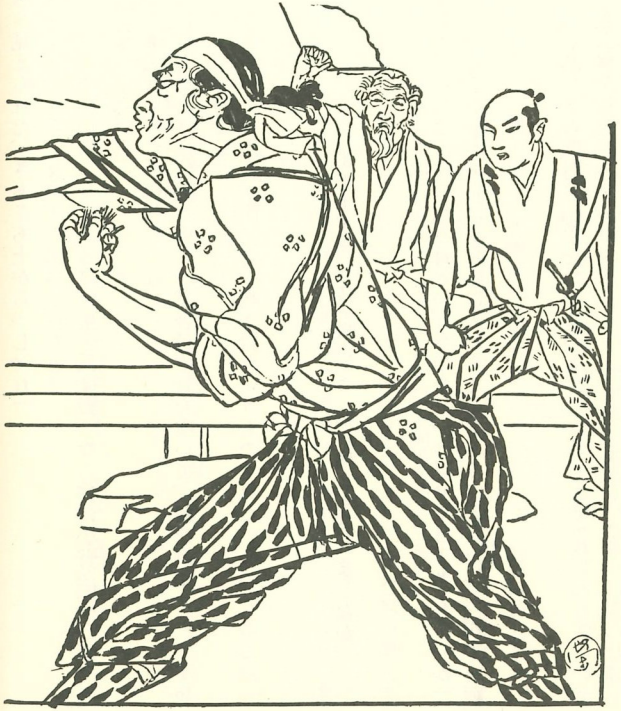
喜「これは恐れ入る。しかしご所望とあらばごらんに入れるでござろう、どなたかお相手を願う」

すると治郎右衛門が、

治「しからば有馬先生、未熟ながら拙者お相手をつかまつる」

喜「よろしい、玄信、貴公検分役を頼みいる」

というので武蔵が検分の役となり、喜兵衛、治郎右衛門の両人庭へおり立って用意に及ぶ。この吹き針というのは、ご婦人方が裁縫にお使いになる針とは違って、長さは二寸五分、穴無しでございますのを、五十本または百本と束ねて左手に持ち、右手には短い袋竹刀を持って立ち合う。やがて隙を見て左手の針を口中にうつし、相手の体へ雨のごとくに吹きつける。たとえ一本でも相手の体に吹きつけたときには勝ちと



きめ、またその吹きつける針をはらい落とされたるときには、敗けることに決めておきます。

どうもうまいことを考えたもので、こんな針を顔や体に吹きつけられては大変だ、ところが治郎右衛門においてはさらに怖るる様子なく、鉢巻き襷をいたし、かねて用意の袋竹刀を取ってそれへ出た。喜兵衛においても同じく袋竹刀の短いのを右手にひっさげ、左手にはかの吹き針をたずさえて立ち出でる。十兵

衛武蔵の両先生は、縁側へ立ち出でられて、この勝負いかにと検分いたされる。

やがて一礼をかわした喜兵衛に治郎右衛門の両人、さっと左右に立ち別れた。まず治郎右衛門が中段にぴたりかまえれば、喜兵衛においても相中段にかまえ、じりじりっと詰めよってにらみあう、しばらくはえい、やあの懸け声ばかりであったが、治郎右衛門どこにか隙を見いだしたか、大喝一声真っ向微塵と打ちこんだ。

喜兵衛においては心得たりと受け流す、流せば突き、突けば開くその早業、ポンポンポンとなお二三合打ち合ったと思うまに、ヒラリ体をかわした有馬喜兵衛、左手の針を口中へ移したと見るが早いか、雨霰のごとくに銀糸を吹きだし、無数の針がうなりを生じて、ヒューヒュー治郎右衛門の身辺に降りそそいだ。治郎右衛門これはとばかり一間がほど飛びさがってその針を前後左右にはらい落としましたが、検分いたしておりました武蔵玄信先生、たちまち声をかけまして、

武「勝負見えた」

と持ったる扇子を上げましたから、両人はっと飛びのき、まず治郎右衛門が、

治「宮本先生、ただいまの勝負はいずれが勝利とごらんあそばしましたか」

武「さればその許の負けじゃ」

治「えっ拙者の負けで……」

武「いかにも、有馬がたしかに勝っている」

治「これは先生のお言葉ともおぼえませぬ、拙者まだ、一本の針も受けておりませぬが」

武「これこれさように強情をはるものでない。その許はたしかに十二三本の針を受けているはずじゃ、鉢巻きを調べて見るがよい」治「はっ」

治郎右衛門気がついて鉢巻きを取って見ると、なるほど鉢巻きにはかの吹き針が十二本立っておりましたから、大いに赤面して、

治「恐れ入りました」

としりぞいた。入れかわって十兵衛三巌、

十「有馬氏、お手のうち見事でござる。しからば拙者がお相手いたそう」

喜「これは恐れ入る」

と喜兵衛信義においても、今度はいっそう用意を厳重にして立ち出でました。

月下に受けつぐ二刀流の奥義

十兵衛先生にも襷鉢巻きをいたし、袋竹刀をたずさえてそれに下りたちました。

十「有馬氏、その許の吹く針は何本をもって吹き止めるといたされまするな」

喜「さよう、常は二百本所持いたすがことごとく吹きつけたるは、これまでに只の一度でござる」

十「それは何人と試合されたときでござった」

喜「されば、二百本の針をことごとく吹きつけ申したは、越前敦賀の山中に隠遁されておられる伊東先生、すなわちただいま拙者と試合いたしたこの小野氏の師匠、弥五郎景久入道ただ一人

でござった」

十「ほう弥五郎先生には二百本用いられたといわれるか。してその節の勝負はいかが」

喜「その節には所持の二百本ことごとく吹き尽くし申したが、一本としてあたり申さぬ、実にあっぱれなる武芸の達人と降参つかまつった。その他百本をもって相手いたしましたは塚原卜伝、今一人は京都今出川に道場を開かれる吉岡兼房の両先生だけで、他はことごとく五十本をもって勝ちを取り申した。で先生には五十本をもってお相手をつかまつりまする」

いわれて十兵衛先生、

十「拙者あながち五十本とは限り申さぬ、何本たりともご随意に願いたい。されば拙者も袋竹刀を取りやめ、手なれの鉄扇をもってお相手つかまつろう」

十兵衛ちと、腹の虫にさわるものがあるから、おまえなどは、この短い鉄扇で十分という気概を示されます。

喜「これは恐れ入った。しからば二百本をもってお相手いたす」

とちょっと愛嬌を振りまいたものの、心中ではよしっこの小僧、されば一つ驚かしてくれようと、十分に身じたくいたして、やがて東西に立ち分かれました。

喜兵衛は中段、十兵衛は例によって片眼はずしの正眼、じりじり寄り合ったと思うまに、十兵衛三巌大喝一声、ヤッと打ちこめば喜兵衛ひらりとかわす、喜兵衛のかわすまにもう胴に来る十兵衛先生の早技、喜兵衛これを丁と受けて打ちこめば、十兵衛先生引っぱずして手元へ飛びこむ、開けばつけ入る上段下段、秘術をつくして闘ううちに、喜兵衛の口はいつのまにか早くも左手の針をふくんだ、あなやと見れば秋の薄が、風に乱れて飛ぶと申しましょうか、霧のごとしと

たとえましょうか、唸りを起こして飛びくる針の物すごさ。

十兵衛先生、一間あまりも飛びさがって、その針をば丁々発矢と打ち落とし、隙をねらって手元へ飛びこむ。喜兵衛はこれはと驚いて、右手の竹刀で受け流しつ、またもやはげしく針を吹く、こちらはもとよりまえと同じく、また飛びすさって丁々々、……打ちはらい打ちはらい、再び手元へ飛びこもうといたしたときに、喜兵衛はバラリと竹刀を投げすて、一間あまりも飛びすさって頭をさげ、

喜「やあ恐れ入った、あっぱれなるお手のうち、なかなか拙者の及ぶところではござらぬ」

十「いや有馬氏、まだその許の手に四五十本の針が残っているはず、なぜそれをお吹きなされぬ」

喜「いやいやこの上何本吹きだすとも、お身にあたろうとは思われぬ、驚きいったるお腕前、喜兵衛ほとほと感じ入ってござる」

と残っておりました四五十本の針を残らず投げだしました。さすが喜兵衛も一流の達人、もうこの上幾本吹きつけたとて、恐らく十兵衛にあたるまいと知ってではありますが、若い者には花を持たせる老人の温情もこもっていたのでありましょうか。

ここで四人はあらためて酒酌みかわし、楽しく語り合いましたが、治郎右衛門は暇乞いしてその場から越後路へと帰り、有馬喜兵衛もほかにたずねる人があるといって立ちもどったから、後は武蔵と十兵衛の差し向かい。

武「先刻のあっぱれなるお手のうち、老人感心いたした。いま十年若ければ、お相手もあいなろうが、なにを申すも老齢の身はいかんともいたしがたい。ついてはこの度せっかくおたずね下

されたる印に、拙者の会得いたしましたる、新免二刀流の奥義をお譲り申し上げたく存ずる」

聞いて十兵衛三巌大いに喜んで、

十「それは千万かたじけのう存ずる、ぜひご教授にあずかりたい」

というので、両人庭へ立ち出でましたが、この時秋の日は暮れかかったから、さしのぼる月の影を便りとし、宮本武蔵においては長短二本の木太刀をもって、やっと気合いを入れると、弓のごとき腰はたちまち伸び眼は爛々とかがやきわたり、青海の波をたたえた額の皺も消えて、その勇ましさは天正の昔、かの岸柳島において父の仇、佐々木岸柳を討ったるときもかくやありけんと思うばかり。その前に立って十兵衛先生には新免二刀流の奥義、すなわち、陰陽天地のかまえ、十字のかまえなど、いろいろと伝授を受けられました。

先生の生涯中には、別にこの奥義をもって勇名をあげる機会はなかったが、これが高弟荒木又右衛門に伝わって、鼻の仇を伊賀の上野で討ったときには、右手に二尺七寸三池典太、左手に二尺一寸伊賀守金道の小刀を揮って、河合又五郎に助太刀する三十六人の武芸者を斬って落としました。これは余談に渡りましたが、その夜両名人にはよもすがら酒を飲んで語りあかし、それより惜しき別れをつげて、十兵衛先生にはひとまず旅宿へ立ち帰られました。

美人が無うてなんの酒ぞや

ここには岡三平が待っております。四五日逗留して、近くの名所旧蹟を見物の上、小倉の城下を出立いたし、泊まりを重ねて肥後国熊本へ乗りこんでまいりました。これより先、細川家においては、領地へも立ちよられると聞いているから、太田源左衛門という家臣をもって、道筋へ出迎えておりました。十兵衛先生にも細川侯の厚意を喜ばれ、源左衛門の案内にてご城内へ立ちよられ、細川越中守殿に対面いたされました。

十兵衛この度の漫遊は、将軍家内々の下知によって、西国九州諸大名のようすを調べんがために相違ないと、細川家では早くも見抜いておりましたから、公儀に対して二心なきことを示そうと、日々手厚いもてなし、その上城内の要害はもちろん、軍事の機密というような所まで少しも隠さず見せました。

ご承知のごとく熊本城は竹垣の城と申し、加藤清正が苦心に苦心をかさねて築造いたした名城、それを細川家では少しも隠さず、隅から隅まで十兵衛先生に見せたから、十兵衛も大いに満足し、四五日逗留いたしまするうちに、ふと風邪の心地から、なんとなく気分がすぐれません。

細川越中守殿これを聞かせられて大いにご心配になり、当熊本において十兵衛の体に万一のことあっては、将軍家はもとより、父但馬守にも申しわけなし、十分手当ていたすようにと、ご家

来へおおせ渡されたから、毎日ご典医三名が付きそいとして、十兵衛先生のそばに付ききりでございます。そのご典医の一人が、これは薬ばかり差し上げるよりは、当地にて有名なる八代の温泉へ入湯いたされたがよろしいとのことに、この儀を十兵衛先生に勧めると、拙者もさよう心得ていたときなれば、しばらく入湯してゆるゆる養生いたしたいという挨拶。

しからばというので、細川家よりお指図があって、先生には医者一人と三平を召し連れ、八代の温泉宿、鳴海屋久平方に滞在、もっともさまでに重体でもなかったことだから、二週間ばかりのうちに以前のお体に本復いたした。この儀主治医より申し送りましたから、越中守殿も大きにご安心あいなりご本復お祝いとして、家老月岡刑部を差しつかわされ、この上とも十分養生の上、出立いたされるようという口上でございますから、十兵衛先生も喜んで、なおしばらく逗留いたしておられましたところ、ここにはからずも一つの騒動が起こりました。

というのは、この鳴海屋の奥座敷に、これも湯治のために逗留していたのが、薩州鹿児島、島津修理大夫殿のご家来にて、知行千三百石、末席ながらも家老の一人、川村新左衛門という人、家来五人を引き連れて、一ヵ月ほど前からまいっておりましたが、もはやお暇の日限も少なくなったから、明日は一同当地を引きあげて帰国いたそうと、温泉土産のかずかずを求め、いよいよ支度も出来たので、

新「これこれ近藤、山田、その他一同の者これへまいれ」

皆「はっ、なにかご用で……」

新「先刻も申した通り、明日帰国の上は、またお役目せわしくあいなろうから、今日一日は無礼講だ、決して咎めはいたさぬから、その方たちの好むことをいたして遊んだがよかろう」

皆「ありがとうございまする、してご主人さまには……」

新「この方がおってはかえって窮屈であろうから、近所を見物いたしてまいる、いやいや決して供などするに及ばん」

皆「しからばお言葉に甘えまして、われわれは宿に残って酒宴つかまつりまする」

新「おうそれがよろしい」

というのでこの新左衛門、家来を残しておいて、ぶらり宿を立ち出でられました。さあ喜んだのは五人の若侍、今日こそ主人より許しのでた無礼講、元気さかんな連中とて、たまったものではありません。

○「こらこら女中、早く酒を持ってまいれ、それからうまいものをたくさん持ってこい、酒は小さい器では面倒じゃから、一升徳利に一杯入れて、燗をして持ってまいれ、肴もその通りじゃ、全体きさまのうちの器は万事小さくていかんぞ、おいどんなどは国にいるときは、焼き魚に鯨一匹ずつ食うていたのじゃぞ。早くしろちゅうに……」

もとより薩摩侍のことですから実に活発だ、いずれも飲みかつ食う間に、もう十二分に酔いがまわり、まわらぬものは舌と体だけでございます。

酒は礼に始まって乱に終わると申しますが、この連中は乱にはじまったのだからたまらない。なかにも近藤大五郎という侍が、もっとも酒の上が悪い、眼をすえて蟹のようにブツブツ泡を吹きながら、

大「おいこら山田、酌はたぼと申して、どうも酒の席に女子のおらんちゅうは、どだい興のないものじゃ」

山「いや貴公のいう通りじゃ、男子ばかりでは酒が旨うない、美人無うてなんの酒ぞや、女子を一人呼ぼうではござらぬか」

大「おいどん一人ひっぱって来るぞ」

山「いかんいかん、貴公は当家の女中でも連れて来るちゅうじゃろう、石臼のような女中などは来んほうがええぞ」

大「うんにゃ女中などではない、すこぶるええ美人を一人見つけておいた、あいつを引っぱって来る」

山「この間われわれがええと申した湯女か」

大「さようなやつじゃない、あの向こうの座敷に居おる美人じゃ」

山「ふむなるほど、向こう座敷の婦人か、しかしあれには頑固らしい老爺がついちょるから、来いちゅうてなかなか来おるまいて」

大「なに、酒の相手に来いといっては来まいが、琴を一曲所望だと申せば、あの老爺自慢いたしおるから、喜んで来るに相違ない」

山「ふむ、これは貴公ちかごろにない上分別じゃ。全くあの老爺は娘の琴が自慢と見える、この間拙者が廊下を通りかかると、同宿の町人や当家の女中を無理に引きこんで、娘の琴を聴け聴けといっちょったぞ、これは琴を所望といえば、必ずつかわすに相違ない、万事貴公にまかすから、うまくやってまいれ」

大「よし、委細心得た」

近藤大五郎、よろよろとした足どりで、五六間はなれた座敷へやってまいりました。ここに逗留している老人と娘というのは、何者であるかと申しまするに、そのころ筑後柳河立花山の城主にして、御高十一万三千石、立花左近将監宗茂公の家来に、変名三勇士というのがあった。竹川新四郎兵衛、四月朔日佐総兵衛、宮子五六兵衛の三人、そのなかの一人の宮子五六兵衛は、元亀天正の乱世のうちに人となり、関ケ原さては慶長元和再度の大阪陣など、いわゆる千軍万馬の間を駈けまわった戦場生き残りの勇士、今ははや九十に手が届いております。家督はせがれへゆずり、浮世の昔を忘れてこの風流三昧、このたび保養のためお八重さんという当年十七歳になる孫娘と、そのほか乳母若党下郎などを連れて、これも一ヵ月ほど前からここに来ています。ところがお八重さんは、まことに琴に堪能であるところから、五六兵衛老人これがたいそう自慢、つれづれに毎日のように、琴を弾じさせては楽しんでおります。

罠にかかった可憐な小娘

今日も一通りの調べが終わったところへ、廊下へ手をついて頭をさげたのが、前申し上げた薩摩武士の近藤大五郎。

大「ええご同宿の方へ申し入れる」

そこにおりました若党源六、

源「はいどなた様でございまするか」

大「われわれは薩州鹿児島の城主、島津修理大夫家老、川村新左衛門の家来、近藤大五郎と申す者、主人はじめ毎々向こう座敷において、ご令嬢の妙なるお調べをもれうけたまわり、一同ほとほと感心いたしております」

源「これはお褒めにあずかり恐縮いたします、してなにか御用でもござりまするので……」

大五郎えへんと取っときの咳一咳して、

大「されば、われわれども当宿は今日かぎりにて、明早朝には国元へ立ち帰りまするについては、主人の申すに帰藩いたせば、もうあのような美音を聴くことかなわず、どうかお別れに際し、失礼ながらてまえ方の座敷へお招き申して一曲願いたい。ご同宿の誼をもってこの儀まげておきき入れくださるわけにはあいなるまいか、その方まいって御意得申して来いと申しつけられ、かくまかり越したる次第、ご承知くだしおかれますれば、ありがたきしあわせに存じまする、とにかくお待ち受け申しますれば、どうかよろしく……」

大五郎口上だけはりっぱに申し述べたが、返事も聞かずにそのまま已れの座敷へもどってしまった。源六は後で、

源「どうも粗忽な武士もあったものだ」

とあきれていると五六兵衛、

五「ああ源六、ただ今まいったあの侍は何者じゃ」

源「はっ、薩州の方でかようかよう、お嬢様のお琴を所望いたしながら、こちらからの返事も聞かずに帰ってしまいました」

五「どうもそそっかしい侍もあったものだな。しかしせっかく所望いたすと申してまいったも

のを、まいらぬのもなんとやら、八重やそなた行って一曲なにか聞かせてやりなさい」

八「お祖父さま又あんなことを……、向こうのお座敷は殿方ばかりでございますから、わたしははずかしゅうございます」

五「さ、男ばかりで琴を弾じる婦人もおらず、毎度お前が弾くのを漏れ聞いて、楽しんでいたと申すのではないか、それに明日は帰国するから、名残りに聴きたいと申される心がやさしい、そんなことをいわずとまいって、なにか一曲弾じてやんなさい。もちろんそなた一人はやらん。乳母をつけてやる、もし酒の相手をしろとか、なにか悪ふざけでもいたすようだったら振りはらってもどんなさい。只今の口上の通りであって、こちらで断ったらばなにほど失望されるか知れん。これこれ松や、その方八重についてまいり、あやまちのないよう、見張りいたしておれ」

松「かしこまりました、さあお嬢さま、ご隠居さまがあのようにおっしゃるのでございますから、おいであそばせ」

お八重も余儀なく身じたくに及びます。若党の源六はまずこっちから琴を運んでまいったから、五人の侍大いに喜び、

大「どうだ山田、拙者の腕はこの位なものじゃ、今に美人が来たら、拙者は第一番に酌をさせるぞ……」

わいわいいっているところへ、乳母の松が静かに障子を開いて、

松「お嬢さまの未熟なる琴、ご所望くだされましたのは、こちらさまでございまするか」

大「いやこれはどうもご苦労千万……、いざどうかこれへお入りくだされ」

松「有り難う存じまする、つきましてはせっかくのお召しでございますれば、お嬢さまよりもご

挨拶申し上ぐべきでございますれど、なにぶん殿方ばかりのお座敷ゆえ、てまえかわって申し上げます、早速ながら拙き一曲お聴きに入れまする……、さあお嬢さまお入りあそばせ」

といえど、お八重はなんとなく恥ずかしくためらっているところへ、不意に駆けていった近藤大五郎、あれっと驚くお八重の手をとって、

大「いやこれはよくおいで下された、さあどうぞこちらへ……、なに、琴などはどうでもよろしい、まず拙者のそばへ来て、酒のお相手願いたい」

他の四人もわれがちに、

○「さあさあこれへおいでなされ、いや拙者のところへ」

△「これはよくおいで下された」

と四方から引っぱりあう、お八重は驚いてあれーっと悲鳴をあげます。乳母のお松はきっとなってお八重を後ろにかばいながら、

松「これはしたり皆さま、琴を所望といつわって、さような猥らなことをあそばすとは、ご無礼でござりましょう。かような座敷には一刻もおられませぬ。さあお嬢さまさっそくおもどりあそばせ」

と畳を蹴って、この座敷を立ち去ろうといたしました。

汝等ごときはお手玉侍

大酔いたしおる五人の若侍、乳母お松のいうことなど耳に入るはずがない、お八重の袖をとらえてずるずると引きもどす。

松「なにを無礼なさいます」

とてむかいする乳母をポンと向こうへ突き飛ばして、五人一度にお八重にしがみつく。このすきにようよう起きあがったお松は、まっさおになってバタバタと駆けもどり、

松「ご隠居さま、大旦那さま、た、た、大変なことでございます」

五「なに大変とは……」

松「お、お嬢さまが、今、て、手籠めにあって……」

五「えっ、それは……」

とかたわらにあった大刀引っさげ、急ぎ駆けつけて、いきなり近藤大五郎の利き腕とるより早く、庭先目がけてドーンと投げつけた。

○「やっ、汝、老いぼれのくせに邪魔しちょるか……」

組みついて来る一人を、そのまま組ませておいて、襟首引っつかみ、これまたその場へ叩きつけた、残る三人とても、まるで三歳の童子を扱うがごとき五六兵衛の腕前に、五人は酔いもすっ

かりさめ、庭の隅へ一かたまりに縮みあって、頭や腰をなでております。五六兵衛はそれらには目もくれず、

五「これ嬢や、なにもこれしきのことに泣くということはない、その方も立花の勇士、宮子五六兵衛の孫ではないか、どこかけがでもいたしたか、ふむどうした」

八「いえけがはいたしませんが、大勢してあまりの無礼……」

五「それはわしも腹が立つ、手をとられても身の穢れだ、これこれ松、早く嬢を風呂へ連れていって浄めてやれ」

お松かしこまって、

松「さあお嬢さま、こっちへおいであそばせ」

五「早くあちらへいけ、……こりゃばか者ども、本来ならば一人として助けおくべきやつではないが、この度は湯治中でもあり、当家の迷惑を思うて、生命だけは助けつかわす。もし残念と思わば、何時たりともしかえしにまいれ、なんじらごときは、お手玉あそびにちょうどよい。拙者は立花藩中変名の三勇士といわれる宮子五六兵衛という者だ。

年はとれどもなんじらごとき蛆虫にひとしいやつら、束になってまいったとて、恐れはいたさん、決して遠慮はいたさんから、何時なりともまいるがよい。大ばか者めっ」

と叱りつけ、立派に本名を名のって自分の座敷へもどってしまった。

五人の侍ようようのことで座敷へはいあがり、顔を見合わせてしばらくは言葉もでませんくらい、しばらくしてから、

大「山田、ひどい目にあったのう」

山「だから拙者が、いかんちゅうたのを貴公きかんから、こういうことになったのだ」

大「こいつなにいいおる、貴公まっさきに同意したではないか、……大川貴公額に大きい瘤をこさえたな」

○「あの老いぼれに投げられたときに、向こうは庭の青苔、あすこなら痛くないと思っていると、それは庭一面の岩の上じゃった。それでここをまともに打ちつけたから、ガアンと音がしたぞ、いやひどい目にあった」

△「ところでご同役、もしご主人がお帰りになったら、なんと申し上げるか」

大「しかたがないから、ありのままにお話し申そう」

山「それはいかん、われわれ五人が一人の老いぼれに投げられたとゆうたら、それこそ大目玉をいただくぞ」

大「それは困ったな、しからばなんといたそう」

と大いに心配いたしているところへ、さらり障子を開けて入って来たのは川村新左衛門、じろりと五人をにらみつけた。五人はいずれも平伏して、

皆「ええお帰りあそばせ」

新「これこれ近藤、この狼藉はいかがいたしたのであるか」

大「へへっ、取りみだしたるところをお目にかけまして恐れ入りました。実は山田が酩酊いたして剣舞をやるなどと申して、立ちあがりましたるとたん、われとわが袴を踏んでころびましたるために」

新「だまれっ、この方はなにも存ぜぬと思い、さようないつわりを申すか、その方らは予の留

守中、同宿の者と喧嘩をいたし、ただ一人の老人に、五人が手玉に取られたと申すではないか。ただいま立ちもどって廊下へ差しかかったところ、大勢の者の立ち話を聞けば、薩摩武士五人がただ一人の老人に投げられ、蛆虫のなんのと罵られながら、平身低頭いたし、庭の隅にふるえていたととりどりのうわさ、立ちもどって見れば案に相違なく、この場の狼藉、かつはなんじらの顔にところどころ傷のあるところを見ると、酩酊のあまり他人に喧嘩を吹きかけ、かえってその者に辛き目見せられたものと見て取った。どうじゃ、新左衛門の見る目に、露いささかの誤りはあるまい」

皆「へへっ、恐れ入りましてございます」

新「ただ恐れ入っただけではわからぬ。子細うけたまわったその上にて、この方にも覚悟がある、さあいかがいたしたか申してみい」

この時近藤大五郎進み出で、

大「ええかようにあいなる上は委細かくさず申し上げます」新「うむ」

大「実はご主人お出かけの後で、われわれ酒肴を命じ、楽しく酒宴いたしおりましたるところ、かれこれ五間六間ばかり向こうに、柳河の家来で娘を連れて、同じく湯治にまいっている老人がございます」新「ふむ」

大「ご主人もご承知でございましょう、朝となく夕となく琴を調べている座敷で……」

新「ふむ存じておる」

大「その老人が物をも言わず突然この座敷へ入ってまいり、こりゃその方ども今少し静かにいたせ、娘の琴の調べの妨げになってはならぬから、調べのすむまでだまっていよとかように申しま

す、あまり無礼の言葉に、われわれ立腹いたし、これはけしからん、かくこの座敷を借りおる間はわれわれの城廓、みだりに踏みこんで静かにせよとは無礼でござろう。それもわれわれが放歌高吟でもいたしていたならばともかく、かく酒宴いたして、世間話をいたしているだけが、なぜ娘御の琴の調べのじゃまになるのか、われわれの方こそ聞き苦しきへたな絃の調べ、かえって耳ざわりになると、あまり先方が無礼でござりましたゆえ、いい返してやりました」

新「ふむ」

大「しかるところ彼の老人大いに立腹いたし、娘の琴をへただなどとは容赦あいならんと、いきなり私の襟首を取って庭の彼方へ投げつけました。それで四人の者も無礼なやつと立ちあがりましたれど、悲しいことには一同いたく酩酊いたしおりますれば、身体自由ならず、ところへ彼の老人の若党下郎など十人あまりも駈けつけまいって、ともどもわれわれを辛き目にあわし、その上さんざん暴言を吐いて引き取りましたが、思えばまことに残念千万、このまま泣き寝入りいたしては薩摩隼人の不面目、かなわぬながらも先方へ斬りこまんと、ただいま相談中のところでございました」

聞いて川村新左衛門大いにいきどおり、

新「憎くき立花の家来かな、いかなるやつかは知らねど、かかる恥辱を与えられてゆるすことはまかりならん。さようなればこの方より決闘状をもって、勝負いたしてくれる、それなる硯を持てい」

新左衛門薩摩武士だけに気があらい、大五郎の言葉を事実と思って、宮子五六兵衛の許へ決闘状を持たしてやりました。宮子五六兵衛においても、さようの儀ならば立花家にてさるものあり

と知られたる宮子五六兵衛が、戦場往来の勇を見せてくれんずと、さっそく承知の旨を申しつかわしたから、さあ川村ほか五人においてはこしゃくなやつ、ただ一刀に討ちはたしくれんと身じたくして、今にも飛びだそうといたしております。

武士の風下にも置けぬ奴

このことが早くも同宿の者の耳に入りましたから、それ決闘がある、とばっちりを受けてはならんと、気の早い者は逃げだすという騒ぎ。鳴海屋の亭主は大いに驚き、双方の間へ入って仲裁いたそうとするが、なかなか川村のほうで承知をしない。いずれも襷鉢巻きの用意をいたし、袴の裾を高く取って一刀の目釘に湿りをくれ、廊下へドカドカ立ちいでた。五六兵衛においては女子供にけがさせてはならんと思うから、旨をふくめて立ち去らせ、若党下郎が助太刀いたすというを固く押しとめて、九十に近い老人だがなかなかどうして頑固なものだ。自分ただ一人、同じく一刀取って待ちかまえている。折しも、離れ座敷において徒然なるまま、三平を相手に烏鷺を戦わせておられた十兵衛先生、なんとなく人のざわめき立つ様子に気をつけ、

十「三平」三「はっ」

十「どうも当家の表座敷がそうぞうしい様子じゃが、ちょっと見てまいれ」

三「かしこまりました」

三「平一刀取って離れを出ましたが、直ぐに取ってかえし、

三「先生へ申し上げます」十「どうした」

三「同宿の侍同士がなにか間違いを生じ、決闘をいたすとかにての騒ぎでございます」

十「ふむそれは聞き捨てならぬ、よし、予がまいって仲裁いたしてつかわそう」

と立って表座敷へ来ると、中庭においては川村新左衛門が家来五名を引き連れ、長い刀を引き抜いている。こちらは白髪の老人ただ一人、同じく一刀の鞘をはらって仁王立ちに突っ立っております。その間を当家のあるじ久平と番頭がまっさおになって、あっちを宥め、こっちへ謝り、米つきバッタのようにぴょこぴょこ頭をさげてまわっておりますが、川村のほうではどうしても聞き入れない。真っ先に立った新左衛門、

新「やあ立花の家来宮子五六兵衛とやら、よくも拙者の留守中に無断にてわが座敷へ踏みこみ、家来五名を手籠めにいたしたな、このままにいたしては薩摩武士の名折れにあいなる、よって尋常の勝負をいたす、さよう心得ろ」

五「だまれ家来が家来なれば主人も主人、物の道理のうときなんじらに、くどくど申し聞かせたとて、口に風邪をひかせるばかりだ。望みによって不足ながら相手になし、幾十度の戦場を往来してまいった、宮子五六兵衛の腕前を見せてつかわすから、いずれからなりと斬ってかかれっ」

新「ぬかしたりな老いぼれ、それぶち斬ってしまえっ」

と下知をした。このときこちらの縁側にあった十兵衛先生、雷のごとき大音をあげ、

十「やあ双方の者しばらく待て。いかなる間違いから決闘に及ぶかは存ぜねど、客しょうばいの当家において血を流そうなどとは不心得千万、静まれっ静まれっ。われこそは柳生十兵衛三巌

であるぞ、拙者の言葉を用いぬにおいては、かくいう十兵衛相手になって、なんじらの素っ首引き抜いてくれるからさよう心得い」

聞くより川村新左衛門は申すに及ばず、宮子五六兵衛においてもはっと驚いた。まず新左衛門、

新「これは初めてお目通りつかまつる、拙者は薩州鹿児島、島津修理大夫家来、川村新左衛門と申す者、武士道の意気地やみがたく、これなる老人へ決闘を申し入れたのでござりまする。なにとぞお見のがしを願う。ただし当家の庭先に血を流そうといたしたるは、重々拙者のあやまち、さっそく場所を取りかえまするによってこの儀ご承知願いたい」

十「いやならん、いかなることよりかかる仕儀にあいなったるかは知らねど、一応双方の申し分をうけたまわろう、その上にて決闘せずばかなわぬとあらば、十兵衛検分いたして進ぜる」

すると五六兵衛が、

五「これは柳生の若

先生にてあらせられるか、初めてお目通りいたす、拙者は立花の家来、宮子五六兵衛と申しまする者」

十「ふむ、かねてより立花家の変名三勇士の一人と聞き及んでおったが、なぜかような穏やかならんことにあいなったのでござる」

五「恐れ入りました。なにも拙者より望んでいたしたわけではございませぬ、実はかくかくしかじかの次第……」

とこの度の騒動の原因を逐一ありのままに述べました。

十「ふーむ、それははなはだけしからぬ、これ川村氏とやら、己れの過失をいわずしてみだりに決闘申し入れるとはよろしゅうござるまい」

新「はっ、拙者はさようなこととは少しも存ぜず……こりゃ近藤」

大「はっ」

新「このご老人の申されるところと、その方らの言葉とははなはだ相違いたしておるがどうじゃ」

大「へへっ恐れ入りました」

これを聞いて新左衛門かっと目を怒らし、

新「いやなんじらは実にけしからぬまねをいたす、己れの非を飾らんために、口から出まかせのいつわりを並べたて、よくもわれをあざむきおったな、もし柳生先生お出でくださらねば、なにご存じない宮子ご老人へ刃傷に及ぶところであった……、ええ宮子氏どうかごかんべんにあずかりたい、実は拙者の家来どもかようかようのいつわりを申したるにより、それを真実と思うて

一図に立腹いたし、貴殿へ決闘申し入れたる次第、なんとも申しわけござらぬ、どうかごかんべんにあずかりたい」

五「いやいやさようにことがわかれば老人の冷水、たってどうこうはござらぬ。これもひとえに柳生先生がおいで下されたるからの災難のがれで……、あつくお礼申し上げます」

新左衛門いたく赤面して、五人の者に向かい、

新「その方らのごときは、武士の風上どころか風下にもおけぬやつ、今日かぎり暇をだすから、どこへなりと立ち去れい」

五人の者は泣きっつらを蜂にさされたも同様、この体に十兵衛先生、

十「いや川村氏、そこ許の立腹はもっともながら、この度だけはこの十兵衛に免じて、お許し願いたい」

新「はっ、これは恐れ入ったるお言葉。……ゆるしがたきやつながら、この度だけはゆるしてつかわしましょう、……これなにをいたしておるか、柳生先生へお礼申し上げろ」

大「へへっ、お情けあるお取りはからい、ありがたく御礼申し上げます」

十「酒の上とは申せ、婦女子をとらえてけしからぬ所業に及ばんとせしばかりか、己れの主人をあざむいて、他人に迷惑をかけるなどとは、言語道断のふるまい、以来つつしみなさい」

一同「へへっ」

五人の家来一遍にちぢみ上がって恐れ入りました。そこで十兵衛先生の取りなしによって、今後両人、水魚のまじわりを結ぶため、和睦の酒宴とあいなりましたから、鳴海屋の主人もほっと胸をなでおろし、先生に向かってお礼を申し述べます。そのときに宮子五六兵衛、

五「先生へ申し入れます。はなはだ恐れ入ったる次第にございますれど、これをご縁としてなにとぞ一度、筑後柳河へおいで下されたく、五六兵衛ご案内つかまつる」

十「いやかたじけないが、この度はとりあえず薩摩へまかり越したく思うにより、帰り路にでもご厄介にあいなる、その節はよろしくお願いいたす」

新「しからば先生には薩摩へお立ち越えにござりまするか、それはなによりのこと、拙者は明日帰国いたそうと、その支度中でござりまするが、さようなれば先生ご出立の日までお待ち申し、ご案内つかまつりましょう」

十「さようでござるか、しからば拙者も明日出立と取り決めるでござろう」

新「それはなによりの幸いでござりまする、宮子殿、貴殿もご見物がてら先生のお供いたされてはいかがで……」

五「ご親切の段かたじけのうござるが、この度は足弱を連れておりまするから、ご免をこうむる。しかしいずれ一度はまいりたく存じおりますれば、その節は必ずお訪ねいたそう」

一髪よく大象をつなぐ

三人の者はその夜のふけるまで武芸の話、十兵衛先生ことのほか興をもよおされ、後日の再会を約してその翌日、川村新左衛門主従の案内にて、岡三平を供につれ、薩州鹿児島へ向けご出立

にあいなりました。全体島津家は鎖国主義で領分外の者はむやみと立ち入らせません。出入りなかなか厳重にございまするが、この度はほかならぬ、家老川村新左衛門の案内ですから、通行になんの面倒もなく、大手をふって鹿児島へ乗りこんだ。

その夜は新左衛門己れの屋敷にお宿を申し、翌日は帰藩届けとともに、柳生十兵衛入国のおもむきを家老島津兵庫までとどけ出る。兵庫からはすぐさま主人薩摩守殿へ申し上げました。薩摩守殿ならびに、ご子息修理大夫殿大いに喜ばれ、さっそく城内へご案内いたせとの御諚、右のおもむきを新左衛門から十兵衛先生へ話しますと、

十「さようでござるか、しからば案内を頼む」

新「かしこまりました」

と新左衛門、十兵衛先生を案内して、城内へおもむきました。十兵衛先生あたりの様子をうかがうに、さすがは鎮西の大藩、岡山城内にてかの熊沢了介に対面いたしたる節、後世徳川幕府の恐るべき大藩二つあり、その一つは毛利にして、いま一つは薩摩の城主島津薩摩守といったが、なるほど実に城内の要害と申し、武士の気質まで、油断ならぬ大藩じゃとひとり心にうなずきながら、ご本丸、奥御殿、大広間へ案内されると、正面には島津薩摩守ならびにご子息修理大夫、両側には家老をはじめとしてお目見得以上の者が、綺羅星のごとく居並んでおります。中央に座をかまえられた十兵衛先生、うやうやしく頭を下げて、

十「これは太守におかせられてはごきげんうるわしく、十兵衛大慶至極に存じあげまする」

すると薩摩守殿、

薩「十兵衛殿にも壮健で重畳、この度はあまねく諸国漫遊の由、とくより承知いたしておった。

これを機として、ここしばらく当地にとどまり、武術の指南いたしてもらいたい、この儀頼み入れる」

十「委細かしこまりたてまつる。しかしながら十兵衛このたび江戸おもて出立いたしたは、唐天竺までも押しわたり、広く柳生流をひろめんためでございますれば、もし明日が日にも出立するやも計りがたし、この儀あらかじめお含みおき下さるよう」

薩「その儀は承知いたした。早速なれど天下の名人といわれたる、十兵衛殿の手のうち拝見いたしたいがいかがであるか」

十「これはまた異なことおおせあるものかな、そもそも武道の奥義は糸竹管絃と異なり、他人に所望されて現すべきものではござりませぬ。坐臥常住いささかの油断なき、すなわち禅の不動体をもって武道の奥義といたす。世上往々腕前を見せよと所望せられて、勇をあらわし妙を示すの儕輩は、その実真の武芸者とは申されませぬ。武勇の誇りたかき薩州の太守が、この十兵衛に手のうちを見せよとのお言葉は、近ごろもって迷惑に存じたてまつる」

これを聞かれて薩摩守殿、心中では猪口才なことを申すやつじゃとおぼしめされたが、さあらぬ体にて、

薩「なるほど、しからば真の武芸者とは、常住坐臥いつにても、油断なきことを申すのであるか」

十「御意にござりまする」

薩「うむ、さすがは天下の名人、よくぞ申された、それ誰かある、十兵衛殿へ盃を」

○「はっ」

と一人の家来が用意の盃をもって、

○「柳生先生お受け下され」

十「ちょうだいいたす」

と盃を手にする折しも、いかなる合図があったか、左右の襖のかげより真槍をしごいた二人の侍、間髪もいれず、十兵衛先生目がけてさっと突いた。

その迅きこと電光石火のよう、あわやと思う間に、十兵衛先生膝一つ崩さずそのままでぱっと体をかわし、早速の目つぶし、持ったる盃一人の面上へ発止と投げつけ、よろめくすきに槍をポンとはね返した。これはと驚く間に、右の手では彼の一尺二寸の大鉄扇をもって、今一人の突いてきた槍のけらくび丁とおさえ、畳の上にぴたりおさえつけて離しません。槍を飛ばされたほうは尻餅をつき、おさえられたほうは槍の柄につかまって眼を白黒しております。十兵衛先生鉄扇の手をゆるめずに、じろり眺めやっておりましたが、

十「わっははははご当家は由来、武勇をもって天下に名高きお家柄、しかるにこの十兵衛の腕を試さんとなさるるに、かかる未熟不鍛錬の者をもっていたさるるとは笑止千万。こりゃご両士、さようなことにて人間は突かれるものではござらん、出直しめされ、わっははははは」

傍若無人のふるまいに、一同の家来、いずれもはっと顔色をかえて、主人のご様子をうかがいました。薩摩守殿ポンと膝をお打ちになり、

薩「なるほど、常住坐臥に油断なき十兵衛殿のお手のうち、ああっぱれなるものかな、この上は十兵衛殿、指南の儀たって頼み入る……こりゃ未熟者、さようなことで人が突けると思うか」

その場の照れかくしに、十兵衛先生のまねをいっていらっしゃる。両人の者こそいい面の皮で、

ほうほうの体で次の間へ逃げこんでしまいました。

薩「いやただいまはご無礼いたした」

おそばの者に向かって、

薩「改めて十兵衛殿に盃を差し上げい」

○「はっ」とここでいよいよご酒宴とあいなりましたが、このまま川村新左衛門の屋敷へ、おとめ申しておくのは礼を失するというので、重役一統評議の上、同じ家老でも一万二千石、伊集院刑部という人の屋敷を、十兵衛先生ご逗留中の宿と定めました。薩摩守はどうかして、十兵衛先生を引きとめたく思われましたので、刑部に向かわれ、

薩「十兵衛をなんとかいたして引きとめおく手段はないか。聞くところでは尾張大納言殿、数ヵ月の間ていねいなる扱いに及ばれたが、十兵衛はついに一手も指南いたさなかったと聞き及んでいる。なんとかいたし、引きとめたい。それにはなにか名案があるまいか」

刑「さようでございまする、うけたまわるところでは先生にはいささか発狂のお気味にてたいそうなわがまま、ご親父但馬守殿もなんとも致しかねてお捨ておきとの事でござりますれば、どうもわれわれごとき者が、いかほどお留め申そうとしたところで……」

薩「引きとめられんと申すか、そこはなんとか計略をもって、どうじゃな」

刑「はっ計略と申しても……おおよいことがござりまする」薩「どういう計略じゃ」

刑「されば、昔より大象も婦女の髪にはつながれるという、十兵衛先生とても、もとより木石ではござりませぬ。花もはじらう、美人を先生のお手もとへつけておかば、いつかその情愛の糸が縺れると申すもので……この儀いかがでございましょう」

薩摩守殿はたと膝を打たれて、

薩「ふむ、それは刑部しごくよい思いつきである、万事その方心得て取りはからえ」

刑「委細かしこまりたてまつる」

と刑部は御前をさがって来たが、これがどうも実にむずかしい問題でございまする。

お見事なる一番槍

刑部つらつら考えましたが、余人と違って十兵衛先生、まさか遊女をそばへつけておくわけにもいかない。思案にあまって奥方を呼びまして、さてさて、これこれこういう君のおおせであるが、いかがいたしたものであろうと、相談に及びますと、奥方は声をひそめて、

奥「さようなればこうあそばしませ。娘の竹尾もはや十八歳にあいなりますから、彼女を先生のお給仕万端に、つけおくことにあそばしたらよろしゅうございましょう」

刑「ええっ娘を……竹尾を遊女の身代わりにか……それは成らん、あられもないこと……」

奥「それは近ごろお言葉とも存じませぬ、お給仕も相手によれ、かりそめならぬ将軍家ご指南役、柳生さまの若殿ではございませんか。娘がそのお方のご寵愛をこうむり、奥方ともあいなれば親の面目でこそあれ、少しも恥ではないと存じます。第一君へ忠義を尽くすのでございますから、今日より竹尾を先生のそばへつけておくよう、お取りはからいなされませ」

この辺のところ今日と比べまして、まことに隔世どころか、絶世の感がございます。

刑「ははあ、わかったわかった、しかし娘が承知いたせばよいが、気の進まぬものを無理におしつけるようではのう」

刑部殿、当時としてはなかなか進歩的なフェミニストです。

奥「なにゆえでござりまする」

刑「竹尾は親の慾目か知らんがあのような美しい縹緻、それをむざむざあのような隻眼小兵の十兵衛殿へというたら、竹尾が真珠を豚へやるつもりか、など申そうも知れず……」

奥「それは違おうかと存じます。男子で容姿だけよい者がなんになりましょう。男振りのよい方にかぎって、かえってろくな者はいないと申すではございませぬか、考えてもごらんあそばせ、ミス薩摩とうたわれた妾が、あなたのところへ輿入ったのも、決して殿御ぶりに惚れたからではございませぬ。不束ながらこの妾、顔の美醜によって夫を定めるような、さような愚かな者に竹尾を育てはいたしませぬ」

ものすごいばかりの奥方のけんまくに、刑部は心中、

刑「これだからわしは薩摩藩、恐妻会の会長にまつりあげられたのだ」

などと愚痴ったかどうか知りませんが、とうとう奥方の言葉に従うことといたしました。

そこで娘竹尾にもよくその旨を含めましたがもとよりそのころのお嬢さん、男女同権や、主体性云々などとはおっしゃいません。耳を真っ赤に染めて畳の上に「の」の字を書くばかり……これが承諾の意志表示でございます。

しかし人は十人十種、すきずきがあるというので、竹尾のほかに家中の娘のなかから、美人の

聞こえあるもの六名を選んで、つごう七名が万事お給仕をすることになり、なおまた若いものだけではいかないからと、その楫を取る老女一人をつけて、先生のお居間に差しまわしました。

しかし刑部は気が気ではない、もしや先生がこの儀についておいかりになられたらどうしようかと、びくびくものでおりますと、幸いになんのお咎めもなく、そのまま城内においでにあいなり、薩摩守殿ならびにご子息修理大夫殿へ、剣術を指南なされる、帰ればおそばの女中どもを相手に双六歌合わせなどをあそばし、又これらのお女中が、琴三味線を合奏するのを聴いて、楽しくお暮らしなされているから、刑部もほっと胸なでおろし、まあこれならばよいあんばいと思いながら、ときどき老女をよんで、先生にはだれを寵愛なさる様子かと尋ねると、一向さようなご様子はございませんとのこと。

刑「ははあ不思議だのう、この上とも気をつけなさい」

老女「かしこまりました」

十兵衛先生鹿児島へご到着あそばされて、もう五月になりますが、おそばのお女中に対してのふるまいに、少しも変わったことがない、刑部は気が気でない。

刑「奥やちょっと来なさい」

奥「はいなに御用でございます」

刑「先生のことだが……ぜんたい先生は女嫌いでいらっしゃるのであろうか、それともお気に召した者が一人もないというのであろうか」

奥「只今そのことについて、申し上げようと存じておりましたが、どうやら娘が懐妊の様子でございますよ」

刑「えっ懐妊……もちろん相手は先生であろうな」
奥「それは確かに先生で……もう今月があの帯でございます」
刑「ふーむ、それはどうも驚いた。さっそく竹尾をここへ呼びなさい」
竹「お父上、なんぞご用にござりまするか」
刑「竹尾、そち懐妊ったというが、相手は十兵衛先生に間違いあるまいな……」
竹「はい……」
いかに親の申しつけであったとはいえ、そこはまだうら若い娘、さすがに竹尾もはずかしそう、さし俯向いて顔はもみじを散らしています。
刑「うむ、して先生にはいつからお戯れがあった」
竹「はい……お父上のお申し聞けによって、給仕にあがったその晩からでございます」
刑「なに、さっそくあの晩から……うーむ、さすがは先生、剣術ばかりでなく、槍術にかけてもあっぱれ達人とおぼえられる、まことにお見事なる一番槍……、刑部ほとほと感じ入ったる次第……」
刑部は驚き桃の木山椒の木、さっそく十兵衛先生の前へ出て、娘竹尾懐妊の由を申しあげると、この時ばかりは先生も、顔を真っ赤に染められて、
十「刑部許してくれい」
刑「どう致しまして、この上からは不束なれど、娘を差し上げとう存じまする」
十「それはかたじけない、万事よろしきよう取り計らってくれ」
刑「委細かしこまりたてまつる」

と刑部はさっそく、六人の娘たちは親元に引き取らせ、この由を太守薩摩守殿へ申し上げますと、殿におかれてもお喜びにあいなり、

薩「しからば予が仲人になってつかわそう」

とおおせられ、まもなく黄道吉日を選んで、盛んな婚礼が行なわれます。ことに殿からお祝いの品が数々あって、お屋敷さえ下しおかれ、すべて島津公のお客分としてのお取り扱い、そのうちに竹尾は月満ちて珠のような男の子が生まれました、十兵衛の喜びは申すまでもない。このことを刑部より殿へ申し上げると、

薩「しからば予が名前をつけてつかわす」

とおおせられ、親しく高麗太郎となづけられました。

降りかかる兵児の火の粉

それから早速乳母をやといあげ、万事大切にかしずきましたが、何分にも高麗太郎が弱いたちで三月ほどたつと、ふとした病いで亡くなった。ところが母の竹尾も、産後の肥立ち思わしからず、ただぶらぶらしておられる矢さきに、この悲しみが起こったのだからたまりません。とうとうわが子のあとを追うて黄泉の旅、亡き人の数に入ってしまいました。

あまりのことに、さすが豪勇無双の十兵衛先生も、終日怏々として一室にとじこもり、何事か

考えられては、ほっと深い溜め息をもらされまするから、しじゅうおそばにおった岡三平、もしこれがため、先生の御身の上に万一のことでもあってはと、いろいろと気紛らしの世間話など申し上げては、先生の心を慰めている。折しもときは十二月の下旬、鹿児島は人も知る暖国で、あまり雪などは降らないと申しますが、今日は朝のほどより、寒気ことのほかきびしく、ちらちらと散らついてきた雪は、たちまちあたりを銀世界と化して、その眺めは珍しい、ことに先生のお屋敷というのが高台にありまして、遠く望めば煙吐く桜島、目の下には薩摩湾の波青く、得もいわれぬ風情でございますから、十兵衛先生も思わず縁側へ立ち出でて、その景色に見とれていると、家来の三平が、

三「ええ先生」 十「なんじゃ」

三「世に雪月花と申しまするが、なるほどこの雪景色は、また格別ではございませんか」

十「むむ実に得もいわれぬ眺めじゃのう」

三「つきましてはこの雪景色を肴に、刑部さま又は川村さまをお招き申し上げて、一盞召しあがられましてはいかがでござりましょう」

十「おおこれはよいところへ気がついた、いかにもさよういたそう、さっそく支度いたすよう申しつけてくれ」

三「かしこまりました、折悪しく平助はただいま他出いたしておりますから、私が伊集院さま、川村さまの両家へ行って、お迎え申してまいります」

十「いやその方がわざわざ行かなくとも、平助が立ち帰ってからつかわしたらよかろう」

三「いえわずかのところでございまするし、平助も立ちもどると、すぐさま使いに出してやる

のもふびんでございますから、私が一走りいってまいりまする」
十「さようか、大儀じゃのう」
三「どういたしまして、しからば先生いってまいりまする」
十「気をつけてまいれよ」
三「かしこまりました」
岡三平、女中へ酒肴の支度を申しつけておいて、その身は大小をたばさみ、袴の股だちを取りあげて、立ち出ずると向かい風、灰のような雪が、ピューッと真っ向に吹きつけて来るから、三平傘を半開きにいたして、雪の中を少し急ぎ足になって、すたすた十四五町も来たと思うころ、行く手にあたって傘の頭を、がっちり衝いた物がございますから、驚いてはっと一足さがる間もなく、
○「こりゃ気をつけんか」
とどなる声がする。三平見ると、薩州で有名な兵児侍が六七人、突っ立っております。妙な侍もあったもので、なにゆえ兵児侍というかと申しまするに、薩摩では本来、青年のことを兵児という、しかるにそのころ兵児の強がり連中は、いわゆる衣は肩にいたり袖腕にいたるの風俗で、白木綿の帯を一反も腰へぐるぐると巻きつけ、いざといえばその帯を切って、鉢巻きにもすれば襷にもする。傷を受けたときには繃帯にしたり、鼻緒の切れた時は鼻緒をたてるという、しごく重宝な帯、これがついには一つの看板となって、中には白絹を巻きつけるぜいたくな者もできた。俗にこの帯をしている連中を兵児組とか兵児侍とかいうようになった。
いずれも屈竟な若侍ばかりですから、その威勢のよいことといったらすばらしいもの。そろいもそろって朱鞘の長い刀を門にさし、この雪に傘もささず、琵琶歌かなにかを朗々と謡いながら、大道せましとやって来た一人の鼻っさきへ、はからずも傘の頭をぶっつけたのだから驚いた。三平悪いことをしたと思って急ぎ傘をたたみ、
三「これはどうもあいすまぬことを致しました。向かい風で雪が吹きつけるものですから、つい御無礼をいたし、なんとも恐れ入った次第……」
○「だまれっ、こりゃ大道を歩くに向こう見ずに歩くちゅうばかがいるか、かんべんあいならん、手討ちにいたしてつかわす、それへ直れ、それがいやなら、尋常の勝負しろ」
三「只今のは、たしかに拙者のそそうでござれば、重々お詫びつかまつる、どうぞごかんべんを……」
○「いや、どうしてもかんべんすることはまかりならん、これが傘であればよいが、もし真剣であったら、わしの顔へ突っ立ったぞ」
三「ははははこれはご冗談を、まさかに抜き身をかざして歩くという者はありますまい、傘と思えばこその油断で」
○「うむ、しからば傘じゃからかまわんというか」
三「いや決してさような……」
○「いやいやそれに相違ない、真剣ならばかようなことはせないが、傘だから突いたちゅうは、いよいよもってけしからぬぞ、なんの意趣遺恨あって拙者の鼻を突いた、もうどうあってもかんべんあいならんから、さよう心得ろ」
三「これは御無体でございましょう、てまえが悪いと思えばこそ、かように謝っているので

ござる、どうかごかんべんのほどを……」

○「ふーむ、そういうきさまは他国者じゃな」

三「いかにもてまえは他国者でござります」

○「家中の者ならば許してもやるが、他国の者に薩摩武士が、傘の頭で鼻っ先を突かれたといわれては、家中一統の恥辱、第一わが君のご恥辱になる、こりゃどうあってもかんべんすることならんによって、この場で果たし合いをいたせ」

三「さようの儀はどうかご免くだされ、他国者の拙者なれば、もし間違いあってはあいならんと、平生より注意に注意いたしおったのでござるが、今日は急用といい、かような吹雪でありましたから、ついご無礼をつかまつりました。てまえの悪いところは幾重にも謝ります」

○「やかましいわい。一旦かんべんならんといったら、どうあってもかんべんならぬ、尋常の勝負が出来ぬとあらば、手討ちにいたしてつかわすにより、それへ直れ」

三「これは御無体でござりましょう。こと穏便にいたしたいとかく謝っておりますものを、さように御無体を申さるるならば、てまえにもいい分がござるぞ」

○「なにっ、いい分があるちゅうか、あらば申して見い」

三「よくものを考えられよ、てまえはこの通りの向かい風、御身らはいずれも背負い風、それに傘もご持参ないではないか、向こうを見ずに歩くとは貴殿たちのことであろう、拙者がまいると見たらば、一足くらいお避けくださるのが武士の情けではござらぬか。もし真剣ならば顔に突ったつとおっしゃった、すれば貴殿は真剣で顔をつっ刺されても、避けることが出来んとおおせられるのか、不意といわばいえ、もし君の御馬前をかため、戦場へ出でられたときに、不意に敵が

槍をしごいて鼻っさきへ突いてかからば貴殿はなんとなさる。なんのため剣術を学ばれるか、さような不覚なことで武士などとは片腹いたい、そちらこそ気をつけて往来さっしゃい」

○「いやこやつ、言わしておけば生意気な事をほざく、覚悟しろっ」

というより早く、抜き打ちにすばりっ斬りつけて来た。ひらり体をかわした三平、

三「なにを乱暴するっ」

と持ったる傘で利き腕一つポーンと打った。兵児侍はもろくも刀をそれへ取り落とし、これはと拾いにかかろうとする弱腰を、一つ足をあげて蹴とばしたから、はずみを食らって四つんばいのまま、タタタタのめって向こうの軒下にいた斑犬の鼻さきへにゅーと顔を持っていった。斑犬め驚いて、その侍の鼻柱へワンとくいつきました。

三「ざまあ見ろ、その方らは犬と喧嘩いたしているのが、性にあっているのだ」

と笑いながら立ち去ろうとしたから、連れの侍が承知しない。いずれもピカリピカリと引き抜いて、

△「待て待て、おのれはよくもわれわれの朋友に辛き目みせたな、覚悟しろ」

と真っ向より斬りつけて来た。三平もいたしかたない、一足さがって同じく一刀抜き放し、

三「その儀ならば相手になってやる、さあ来い来れ」

△「なにをこしゃくな」

大喝一声斬り込んで来るのを、引っばずしておいて、

三「えいっ」

と横にはらった腰車、見ん事胴へ斬りこんだから、

△「わあーっ」と血煙あげて打ち倒れた。

□「朋友のかたき観念しろっ」

と続いて斬って来る奴を、心得たりとがっちり受けとめて、二三度打ち合わすと見る間に、三平が踏みこんで斬りつけた刀を受け損じたから、肩さき七八寸、袈裟がけに斬られて、これもバッタリそれへ倒れる。

これがため真っ白の雪は見る見るうちに唐紅にそまった。残る侍ども、それっ手強いやつだ油断するなと、ただ一人の三平を取りかこんで前後左右より斬りつけて来る。三平さらにひるまず、血のたれる刀を振りかざして獅子奮迅、又もや一人をそれへ斬って落としたが、そのときに踏みこむ足の勢いあまって、雪に辷ってずるずると前へすべった。このときなりと背後へまわった一人の兵児侍、やっというと、三平が左の肩先目がけて斬りつけました。

三「無念っ」

と三平、タジタジ退るところを、前からいま一人の兵児が、えいっと叫んで梨割りに斬りつけた。なにかはもってたまるべき、よろよろと倒れかかったが、あくまで剛気な三平、倒れながらもやっと横に薙いだ刀に、又もや一人は、胴を斬られてドンと倒れた。三平も急所の傷手に同時にドッカリ倒れる。すると残りの三人が、

×「こやつが、こやつが」

と所きらわずめった斬り斬りつけたから、かわいそうに三平は、全身なますのごとく刻まれて、二十四歳を一期に、あえなく絶命いたしました。船木の宿で別れた兄三十郎は、いまだに杳として音沙汰なく、血縁の縁うすきもまた、哀れと申すほかございません。

ここは冥土かそれとも娑婆か

あたりは見るも惨憺たるありさま、もう見物はどこからともなく山のごとくに集まり、それ喧嘩だ果たし合いだとわあわあ騒ぎたてています。折しもかなたより降る雪を蹴たてて、こちらをさして駈けてまいりましたのは、一人の仲間体の男、身のたけは六尺あまり、梵天帯はゆるんで、紺法被が左右にはだけたその間から、逆だつ胸毛をそよがして、

仲「おいみんな、どいてくんねえ。おいどいたどいた」と群集をかき分け、一目見るや、

仲「やっ、遅かった遅かった、とうとう岡さんを殺したな」

と三平の屍骸のそばへ進みより、

仲「もし岡さん、と、飛んだことになりましたなあ、もう一足早く来たらば、こんな浅ましい最期はさせなかったろう、ちぇーっ残念だ」

歯を咬み鳴らして口惜しがる。それを三人の兵児侍が見て、

×「こりゃ下郎、こいつはきさまの主人か朋友か」

仲「なにっ……そうぬかしやがるからは、てめえらがこんなむごいことをしやがったんだろう」

×「だまれっ、われわれへ無礼をいたし、あまつさえ、朋友を四人まで殺害いたしたるによって、残るわれらが復讐いたしたまでじゃ、ぜんたいこやつはどこのなんちゅうやつじゃ」

仲「なんちゅうもかんちゅうもあるもんか、俺が敵討ちをするからそう思えっ」
とだしぬけに握り拳をかためて、飛びこみざま、一人の横っつらをポカーリッ殴りつけた。
×「痛いっ……こやつ無礼者、その儀ならば容赦はいたさぬ、覚悟しろっ」
と又も引き抜く一刀を、振りかぶってヤッと斬りつけて来たのを、ひらり体をかわして空を斬らせ、よろめく侍の利き腕とって、肩にかついで巌石おとし、ドーンと大地へ叩きつけた。残るふたりの侍この体に眉さかだて、
○「下郎覚悟っ」
左右より斬ってかかる、心得たりと同じく腰の木刀抜き取り、ふたりを相手に必死の働き、たちまち一人の利き腕をぴしりっ打ったから、ガラリと刀を取り落とす、驚いてさがろうとするところを、すばやく飛びこんで脳天ポカリと打ちこんだ。なんじょうたまらん、脳骨くだけて、ぎゅーともいわず即死をとげました。このありさまにいま一人は怖れをいだき、刀を引いて卑怯にも逃げだそうとするやつを、おのれといって、木刀でヤッと横に払えば、肋骨二三本ポキリと折れて、これも血へどを吐いて絶息する。最後に投げられたやつは、こはたまらんとばらばら逃げ出すのを、
仲「卑怯者め」
と追いすがり、襟髪とらえて引きもどした。
△「ど、どうぞお助けを……」仲「えいっ」
耳にもかけず、水月の当て身というやつを一つくれたから、すぐにそれへ気絶してしまった。
最前よりこのありさまを見ていた見物人、ただあっけに取られているばかり。すると右の仲間は、

三平を加えて八人の死骸をずるずる一つとこに寄せあつめ、兵児帯をときはじめました。見物の中の一人が、
見「おい見ねえ、あの折助め、三人まで人を殺しておいて、剽盗でもする了簡だろう。ひどいやつもあったものだ」
仲間においては、といた兵児帯をつなぎ合わせて二筋とし、一筋で四人ずつ、二筋でつごう八人の死骸を一塊りに縛りあわせ、はしを結んで肩を入れ、うーむというと、見る見る八人をかつぎ上げました
仲「おいちいとご免ねえ、道をあけておくんねえ」
とすたすたかついで行きますから、見物は恐ろしい力のあるやつもあったものだと、いよいよあっけに取られておりますのを、目にもかけず、すたすたとかつぎもどって来たのは、十兵衛先生の屋敷、門をば入って中庭のほうへとまわってまいりました。この時庭に面した座敷にあって、川村新左衛門、伊集院刑部の両人の来るを待たれながら、独酌でグビリグビリとやっていた十兵衛先生、八人の死骸を担いだやつがのこのこ入って来たから、これには先生も驚いた。
十「こりゃなんじゃ」
仲「へえ先生ただいまもどりました」
十「おうその方は平助ではないか」平「へえ」
十「へえではない、全体これはどう致したのじゃ」平「どうも飛んだ間違いが出来ました」
平助はドッカリ八箇の死骸をそれへおろし、その中よりズルズルと一人の死骸を引きだしました。

十「やっ、それは三平ではないか」
平「へえ、どうもお気の毒なことが出来ました。先生どうかお聞きください、私は今日三平さんからいいつけられて、大殿さまへのお稽古はご免くださるようにと、月番重役の佐野帯刀さまお屋敷へ、お届けにまいりました」
十「ふむ、いかにも今日のお稽古はお休み下さるよう申しつかわせと、三平にいいつけた」
平「そのお届けにまいりまして、大手前まで戻って来ると、向こうから来る町人の話に、いま馬場先で侍同士の果たし合いが始まったとの話、まさかに三平さんとは思いませんから、そう急ぎもせずまいって見ますと、どうでございましょう。三平さんが四人の兵児侍を斬り捨て、自分も斬り死にをとげていました」
十「ふーむ」
平「ああ遅かった、いま一足早かったらばと、残念に存じましたが、いまだ相手の三人が残っておりましたから、こいつらが三平さんの仇敵だと、私が三人ともつぶしてしまいました」
十「つぶした」
平「へえ、なにこんなやつの三人ぐらいは、蚤をつぶすより造作もございません」
十「しかしなにがもとでさような大事を惹き起こしたのじゃ」
平「これはどうも飛んだことをいたしました、三平さんの死骸を見て、一時にかっとしたものですから、それを聞かずにまいりました」
十「それは困ったな、なにゆえ果たし合いを致したかと、殿からおたずねのあった時に、十兵衛申しわけがない」

平「さようなれば一人生かしましょうか」
十「なにっ生きるか」
平「へえ、一番あとに残ったやつが生きます。ついでにつぶしてやろうと思いましたが、こいつだけ助けておきました」
十「さようか、しからば生かしてくれ」
平「かしこまりました」
と平助、七人の兵児侍の顔を検めていたが、やがて髷っ節をつかんで、一人のやつをグイと邪慳に引きずり出しました。
平「やっ」
と活を入れる。これは当て身を食っただけですから、案の定その場で生きかえって、いやに眼をパチクリさせています。
△「ええここはどこでござる」平「なに……」
△「いやさ冥土か娑婆か……」
平「なにをぬかしやがるんだ、しっかりしてあれにいらっしゃる方を見ろ」△「ええ……」
このとき十兵衛先生、きっと兵児侍を見すえまして、
十「こりゃ予は柳生十兵衛であるぞ」
△「へへっ……」と平伏した。
十「その方らはなぜ予の家来岡三平と、ご城下において果たし合いをいたしたのじゃ。それにて子細を申し立てい」

と言われて、兵児侍まっさおになり、

△「恐れ入りました。実はかくかくの次第にて……」

と三平と傘の衝突から、三平が謝るのを同じ連れの一人がどうしても聴き入れず、刀を抜いて斬ってかかったため、ついにかような次第と、子細のこらず申し述べました。

十「きっとそれに相違ないか」

△「決して相違ございません、どうかお許しのほどを」

といわせも果てず、仲間の平助にぎり拳をかためて、この野郎とヤッと脳天を打ちましたから、兵児侍の眼球は飛びだし、二言といわず死んでしまった。どうも平助の剛力は人か鬼かと疑われるくらい、十兵衛先生も驚いた。

十「もう殺ったのか」

平「へえ用すみになりましたから、世話なしに冥土へやってしまいました」

十「いやきさまはどうも乱暴なことをいたすやつじゃな、しかしこのまま打ち捨ておくわけにはあいなるまい」

とさっそく右のおもむきをお目付けへ届けです。目付けは大いに驚いて下役の者を連れ、十兵衛先生の屋敷へ出張いたすと、これこれにて果たし合いいたし、三平が七人の者を斬り殺し、己れも又斬り死にをとげたと申し述べました。目付けは四人までは三平が殺したのだが、残り三人は仲間平助が殺したということは知っているが、十兵衛先生のお言葉ですから、なんの吟味もいたさず、かえって兵児侍の無礼を詫び、七人の死骸を引き取って立ち帰りました。

振られたと降られたで、飛んだ間違い

このうちにこの騒ぎを聞きつけて、川村新左衛門、伊集院刑部をはじめ、家中の人々がお見舞いとして集まってまいりましたが、いずれも三平の死を惜しまぬものはございません。死骸はさっそく刑部の菩提所に頼んで、手厚く埋葬いたしました。ところが十兵衛先生この度の騒動に、下郎平助の腕前の尋常ならぬに不審をいだき、彼はかならず由緒ある者に相違あるまいと、ある日、平助をお招きになり、

十「平助その方は元からの下郎ではあるまい、ことに先日の腕前、いかほど力量が勝れているとは申せ、力ばかりであのようなりっぱなことは出来んぞ、現に活の入れようなど一々法にかなっていたところを見ると、相当剣術の心得もある者と察する、包まず話して聞かせい。場合によっては十兵衛取り持ちいたし、いずれへなりと推挙いたしてつかわすが、どうじゃ」

聞いて平助はっと平伏いたし、

平「恐れ入りましてございます。しからばてまえの身の上話、どうか一通りお聞きくださいまするよう」

とこれから平助が申し述べるところを、代わってお話しいたしますと、この平助という者は、当島津家江戸詰めの侍、中村平太夫と申し、幼いとき父母に死なれて、一人の叔父の手もとへ引

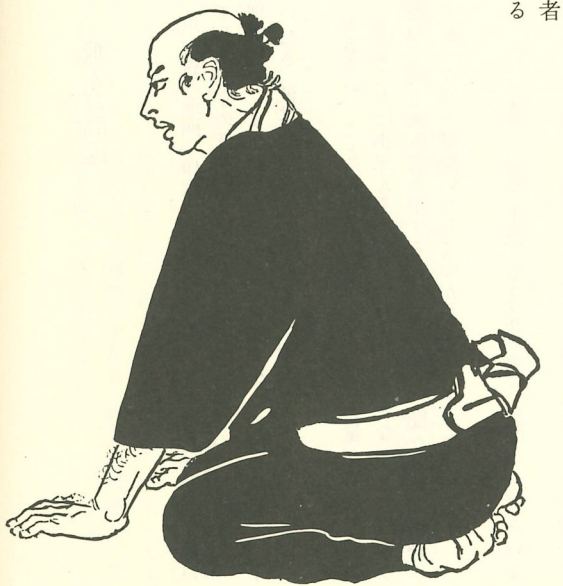
き取られ、ここにて文武の道を励んでおりましたが、生来、力量衆に勝れ、武芸においても儕輩を抜いて、毎日かよう剣術の道場でも、師範代をいたすほどになりました。されば叔父もあっぱれな人物ができた、中村の家もこの者によってきっとりっぱに家名をあげるに相違ないと喜んでおりましたところが、平太夫十九歳の春のこと、稽古がはてて同じような年輩の者が、道場のまんなかで茶を飲みながら、いろいろな世間話。

○「山本貴公あれからまいったか」

△「どこへ」

○「ははは空とぼけるな、たいていわかっているではないか、一昨夜もこの方が貴公のもとを訪ねたところ、先刻でたきり行く先もいっておかなかったというこだ」

△「ああそこへいったよ」



○「いったよじゃない、こっそりわれわれに隠れて行くなぞは罪が深いぞ」

△「ところが振られて帰ったのだ」

そばで聞いていた平太夫には、この問答がちっともわからない。

平「貴殿方のお話はなんのことでござるか、山本氏どこかで雨にでもおあいなされたので」

△「なぜ」

平「ただいまうけたまわっておれば、降られて帰ったとおっしゃるが、てまえも一昨夜は叔父の用件にて、佐竹公のお屋敷へまいり、夜遅く向こうを立ち出でましたが、ちょうど十六夜の月で、春には珍しい、からっと晴れた空でございました」

△「ふふっ……松田、中村氏の話を聞いたか」

と、一同面白半分、平太夫の不粋なところを笑ってやろうと、その夜、道場を立ち出でやって来たのが、そのころ今の人形町へんにあったという遊廓、新吉原の前身でございます。

さあこれが病みつきとなって、平太夫にわかに、遊蕩に身を持ち崩しましたから、叔父さんが立腹して、しばしば厳しい意見を加えるが、馬の耳に念仏、牛の角に蚊ほどの効き目もございません。とうとう勘当の身となってはじめて夢のさめたごとく、そこはりこうな人だけに、これはわが生涯のあやまちとすっかり悔悟いたし、にわかに下郎となって伝手を求め十兵衛先生のご親父、柳生但馬守殿のお屋敷に名も平助と改め仲間奉公に住みこみました。平助があやまちを悔いて、柳生但馬守の道場へ下郎となって奉公したのは、どうかいま一段と腕前をみがいて、旧主島津家へ呼び戻され、中村の家名をりっぱに立てたい望み、されば他の仲間や下郎のように骨惜しみをして、少しの間でも油を売ろうとする事はございません。ちょっとの暇さえあれば、道場へ入ることの出来ない身分ですから、窓の外に立って大勢の稽古に目をそそいでおります。なにがさて一万石の道場、見ているだけでも相当の修行になります。

ところが但馬守殿は、早くもこの平助の挙動不審を見て取られ、こやつあるいはわが柳生流の極意を、盗みとりに来たやつではあるまいかと、その後といえども注意を怠らずにおられまると、相も変わらず用事のひまには、一心に覗いている。ある日平助が庭掃除をしていると、但馬守殿縁側へお立ち出でにあいなって、

但「これ下郎」

振り返って見ると大殿さまだから、はっと驚いた平助、

平「ははっ」と箒を投げ捨てて、平伏いたしますと、

但「その方はなんと申す者じゃ」

平「へへっ恐れ入りたてまつります。私名前の儀は平助と申しまする」

但「ふむ、その方いつごろより当家へ奉公いたした」

平「二ヵ月前より奉公申しております」

但「この間よりちょくちょく道場を差しのぞいて、門人等の稽古をぬすみ見るのはその方であろう」

平「はっ、恐れ入りました、どうかごかんべんのほどを……」

但「察するところ、わが柳生流の極意を、ぬすみとろうとするのであろう、どうじゃ」

平「いえ、決してさようなことはござりませぬ……」

但「しからばなにゆえ猥りに道場を差しのぞくか」

平「はっ、それは私、生来手荒いことを好みまして、ご門人さまが竹刀をもってポンポンお打ち合いになるのが面白く……」

但「だまれ、さようないつわりごとに欺かれる但馬でないぞ。第一その方の眼の配り、ただ面白くて差しのぞくものではない、恐れながら武将の棟梁へご指南申し上げる柳生但馬、なんじらごとき下司下郎に、極意をぬすまれてなろうや、手討ちにいたす、さよう心得い、誰ぞある、まいれい」

○「はっ」

家来両三名ばらばらっと駈け来った。

但「それなる下郎を縛りあげい、手討ちにいたす」○「はっ、これ下郎神妙にいたせ」
とたちまち平助を縛りあげてこちらへ引っ立てて来た。但馬守殿、小姓の渡す佩刀を手に取って、庭下駄をはき、ズイとそれへ立ちいでられ、
但「下郎覚悟いたせ」平「へへっ」
平助心中にああ情けないことだ、いま柳生さまのお手にかかって、首をはねられるというのも、叔父の意見もきき入れずに、放蕩三昧にふけった天罰、やむを得ない事だと観念して、悪びれずひかえておる。ずいぶんこのころの主人の勢いとなると無法なもの、後ろへ廻った但馬守が、
但「えいっ」と一声するどい気合い——稽古のときでさえ但馬守にこの気合いをかけられると、たれもが胆を抜かれて思わずびっくりとする。
まして真剣を持ってかけられた真の気合い、平助ふるえあがるかと思うと、さはなくして泰然自若、一向平気でおりますから、但馬守感心いたされ、縛ってあった縄をプツリと切り放されて、
但「下郎あっぱれの胆じゃ。命はたすけつかわす」平「えっ」
平助夢に夢見る心地。大地に平伏して、
平「ありがとう存じまする」
但「下郎には珍しきあっぱれの魂、よも腹からの下郎ではあるまい。子細を申して見い、事によっては但馬、力になってやろうぞ」
と慈悲の言葉。平助思わずうれし涙をはらはらと流して、今日までの事情を残らず物語り、
平「ただ腕をみがきたいばかりに、ご道場を差しのぞきましたので、決して極意をぬすみ取ろうなどとの念は、露いささかもござりませぬ」

但馬守は平助の言葉を聞かれて、
但「ひとから意見せられて、改心いたしたは真の改心でないが、なんじは自分から改心いたしたという、この上はよも前のごとき失策はいたすまい。その心に愛でて、今日より但馬の門人中に加えつかわす、十分稽古を励め」
平「ははっありがとう存じまする」
と平助いよいよ但馬守の恩義に泣きました。禍福はあざなえる縄のごとし、と申すのはこの事でございましょう。昨日までは仲間であった平助、今日からは元の平太夫となって柳生さまの門人、だればかることなく、道場に出て稽古ができるようになりました。

聞いてビックリ下郎の素性

しかし平太夫は仲間姿こそしておりませぬが、朝は早朝に起きて道場の掃除、その他の用事をいたし、その暇には道場でポンポンと稽古をはげむ、夜は人の寝しずまるまで燈火をかかげて、万巻の書に眼をさらすという勉強ぶり、かく春を送り秋を迎えてはやここに満三ヵ年、足かけ四ヵ年の間一日の怠りもなく、勉強いたしたから大した腕前。ある日但馬守、平太夫を招かれて、
但「さて平太夫、修行と申せば死ぬまで修行であるが、まずその方だけの腕前になれば、いずれへまいっても恥ずかしくはあるまい、いつまでも留めおきたくは思うが、限りのないことだに

よって、もう島津家へ立ち帰り、一時も早く叔父を喜ばし、父母の位牌へ詫びをいたせ。陪臣のその方へ免許皆伝を与えることは、柳生但馬守としては出来がたいが、柳生流の奥義は教えてつかわす」

平「ありがとう存じまする」

但「また島津殿へ予から申しつかわさば、ただちにも帰参はかなうであろうが、それではなんじのためによろしくない。その方これから国元へ立ちもどって、もとの下郎すがたとなり、いずれかへ奉公の上、なにか手柄でも立て、帰参のかなうようにいたすがよかろう」

と柳生流の極意をお伝えになった。中村平太夫泣いて喜び、厚く礼を述べて師の言葉に従い、国元へもどって、下郎の平助となり、いずれかへ住みこみたいと思っているうちに、この度柳生十兵衛先生しばらく鹿児島にご滞在と聞き、わが身の出世もさることながら、師君とも申すべき但馬守殿へいささかのご恩報じ、十兵衛先生のもとにご奉公申して、かげながらお守護したいと伝手を求めてこの屋敷の下郎奉公に住みこんでいたのでございますが、十兵衛先生は磊落なたちだけに、下郎などへは目もとめられないから、この平助がさようなもので、父の門人であるとはさすがに気がつきませんでした。

ところが岡三平は早くも平助のなみなみならぬ様子を不審に心得、だんだんたずねて見ると、これこれとの平助の身の上がたり、さようなればおりを見て拙者から先生へ申し上げ、当家へご推挙くださるよう頼んで進ぜようと、表面は平助平助と呼びすてにしていながら、かげでは兄分として、平助殿平助殿と崇め、兄弟のようにむつまじくしておりました。

しかるに三平はこの度の騒動ではかない最期をとげましたから、平助の平太夫は驚いて、兵

侍を三人まで打ち殺し、三平の仇敵を討ったのでございます。右の子細をはじめて十兵衛先生に話したから、

十「さてはなんじは父上のお取りたてをこうむった者であったか、今日まで何事も知らずにおったは十兵衛の眼の届かないところであった、さようならば予より島津殿へ推挙いたしてつかわそう」

平「ありがとう存じまする」

十「ついてはなにもその方の言葉を疑うわけではないが、予も一応その方の腕前をためした上に推挙いたすであろう、さっそく用意いたして庭さきへ出なさい」

平「ありがたいしあわせ」

と平助さっそく襷鉢巻き、竹刀を取って庭さきへ立ち出でました。十兵衛先生は鉄扇を取って同じくそれへ出でられ、

十「平助遠慮いたしては真の腕前はわからぬ、十兵衛と思わず十分に打ちこんでまいれ」

平「かしこまりました」

平助竹刀を中正眼水月の位に取って、じりじりっと詰めよって来た。

十兵衛同じく鉄扇を取ってぴたりと片目はずしの正眼にかまえたそのありさまは、さながら大盤石のよう、兎の毛で突いたほどのすきもない。わずか一尺二寸の鉄扇なれども、さながら丈余の大鉾のごとく、しかも平助の眼と鼻の間へ押しつけられるように思いなされ、それが邪魔になってどうしても飛びこめません。ことに先生が「えっ」と気合いをかけられる度に、平助の胆を冷やして、恐ろしいともすさまじいともたとえようがございませんから、平助竹刀をそれへ投げ捨

てて、ツツツと五六歩後へさがり、平伏して、

平「恐れ入りましてございまする、大殿に勝りたまえるお腕前とは、かねてうけたまわりおりましたが、かくまでとは存じませんでした、なかなかもってわれわれ風情の及ぶところではございません、このままお許しくださるよう」

十「いやさすがに父上が、わが柳生流の奥義をお許しなされただけあって、あっぱれなる腕前、十兵衛感心いたした、それだけの腕であれば、十兵衛推挙したとても更に恥ずかしゅうない。明日は殿へお目通りいたし、その方の帰参あいかなうよう、取り計らってつかわすから安心いたせ」

平「ありがたきしあわせ、何分ともによろしくお願い申し上げます」

その日は平助を相手に、いろいろのお物語がありましたが、あくる日は登城の上、薩摩守殿へ平助のことを申し上げました。すると、

薩「予の旧臣にさような勇士があるとは心づかなんだ、さっそく召し返しつかわせ」

とのお声がかり。

重役より改めて平助こと、中村平太夫を召し返され、新知二百石を賜りました。平太夫の喜びはいかばかり、これひとえに十兵衛先生のおかげなれば、このこと江戸おもての恩師但馬守さまならびに養育の恩ある叔父へ知らせなければならぬと思い、しばらくお暇を願って江戸へ立ち越え、但馬守ならびに叔父にも対面して、右の子細を物語り、帰藩の上いよいよ忠勤を抽んでましたため、家栄え、子孫繁昌いたしたと申すことでございます。

よれよれ侍は吉岡兼房

さて十兵衛先生におかれては、もはや当地に止まるべきにあらず、近々東上とおぼしめしのあるところへ、越前福井のご城主、松平権少将忠直公、老臣青江弥兵衛なる者をお使者として、先生のもとへつかわされた。その口上は、

「このたび吉例により福井八幡宮の神前において、天下に名ある武芸者あつまり、奉納試合をもよおすについて、ぜひとも先生のご出席ご検分を願いたい」

というのでございます。そのころ福井八幡宮の奉納試合といえば、およそ天下の武芸者は、ここにまいらぬをもって、恥といたしたくらいのものでございます。しかもこれが、三年に一度という定例になっておりますから、奉納試合とは申せ武芸者はこの大試合を、腕だめしの晴れの場所と心得、諸侯においても、自分お召し抱えのなにがしが、福井の奉納試合において、だれとだれに勝ったといえば、禄はいくらか加増してつかわさねばならないくらい。

従って多くの武芸者は、どうかしてこの福井八幡の試合には、よい成績を得たいものであると、三年の間苦心艱難してきたえあげた腕だめしをする。又この勝ち負けを審判する人が、これ又あっぱれな武芸者でなければなりません。

先年までは伊東弥五郎先生が勝負の検分役であったのだが、今度はもはや老齢のことであるか

ら、どうかご免をこうむりたいと申し出でましたから、忠直公におかせられては、弥五郎にかわって検分の役をつとめる者は、当時鹿児島おもてに滞在しておるときく、柳生十兵衛よりほかにあるまいとおぼしめし、いよいよ十兵衛先生を福井おもてへ迎えることになり、ここに吉岡兼房、小野治郎右衛門と、巴試合というお話にあいなります。

十兵衛先生越前忠直公のお招きは望むところと、さっそく承知のおもむきを答えられて、島津公にお目通りの上、右の子細を言上して、お暇の儀を願い出でられたから、薩摩守御父子におかれては、しからば奉納試合あいすまば、ただちに、立ちもどりくれるようにと、快くご承知になりました。

そこで十兵衛先生には、かりにも聟舅の約を結んだ伊集院刑部をはじめ、その他の者にも別れを告げられると、一同はわれもわれもとお供の儀を願い出でましたが更にお許しがなく、ただ越前よりの使者、青江弥兵衛を供に連れて、いよいよ潮の花咲く鹿児島をご出立、もっとも薩摩のご藩船に召され、あれから長崎にご到着、ここで一両日船がかりをいたし、又も長崎の港を出帆して、玄海の荒浪を乗っきり、瀬戸内海に入って大阪にお着きになるまで、海路なんのとどこおりなく、元気はますますさかんでございます。

大阪で船を乗りすて、薩摩倉屋敷からの出迎えもことごとく断わり、例の戎橋の樽屋藤四郎方へお出でなされた。

十「許せ」

○「へえ入らっしゃいまし、お早いお着きさまで……」

と云いながら、ふと顔を見た藤四郎、

藤「やあこれは先生ではございませんか」

十「いかにも十兵衛じゃが、その後東軍流はどういたした」

藤「いえもうあの岩国の一件でこりごりいたしましたから、先生のおおせのように、蛙の子は蛙となり、かように風体までも元の宿屋の亭主になりましてございます」

十「いやそれでよい、宿屋の亭主でさえおれば、胆を冷やすようなこともなく、身も安穏でけっこうけっこう、これから決して下らぬ望みを起こすでないぞ」

藤「恐れ入りました」

十「今夜はその方かたに厄介になる」

藤「ありがとうございます」

と藤四郎ていちょうにもてなしいたし、いま両三日ご逗留をというのを、先を急ぐからと後日を約して出立、これからは陸路、越前の福井へ着きました。もう柳生十兵衛先生ご到着というので、福井の藩士は大勢途中まで出迎える、なお城内では窮屈であろうというので、城下の浄光院という大伽藍、これへ案内いたした。

やがて二日間は、道中の疲れもあるからというので休養、三日目にあらためて、越前少将忠直公へお目通りをいたす、忠直公は遠路安着のお喜びを申される、十兵衛先生もご挨拶があって、それよりご酒宴をもよおされましたが、そのうちに天下の剣客連、柳生十兵衛先生越前へ乗りこまれたと聞き、さあ集まって来るわ来るわ、それも残らず、一流一派の達人ばかりでございます。

福井へ来ればまず第一に、浄光院の十兵衛先生のお宿はといってたずねるが、しかし十兵衛はこれらの武芸者の名前を、取り次ぎの者に一々控えておかせ、その身は病気と称し、決して対面いたしません。

そのうちに八月十四日、明日はいよいよ福井八幡神前の大試合という前の日のことでございます。浄光院さして乗りこんでまいったる一人の武芸者、年は五十あまりにして、身に垢じみた粗衣を着し、袴もよれよれになったのをはいて、短い木刀を一本むぞうさに帯して玄関に立って、

○「ええ、少々申し入れる、当寺に柳生先生ご滞在の由、聞き及びましたるにより、ぜひお目通りつかまつりたいと、かくまかり出でました。右のおもむきお取り次ぎくだされい」

取「せっかくのお越しではござるが、先生にはご到着の日よりお風邪気味で、ことに明日は大切の日なれば、ただいまご薬用お手当て中にござりますゆえ、おあいになりません。ご尊名を認めおきまして、後でごらんに入れます」

○「それは残念千万、しからば吉岡兼房とお認めくだされたい」

取「へいへいあなたが吉岡先生で……」

取り次ぎは今さらのように驚いて、吉岡の顔を見あげました。

それもそのはず、当時京都今出川において、近畿の騏麟とまでいわれた、吉岡又三郎兼房先生ともあろう方が、かような見苦しい風体でやって来るとは思いもかけなかった。取り次ぎの侍は目をまるくして、

取「へえ先生が吉岡先生で……」

兼「これはしたり、幾度おたずねなさる、先年、十兵衛殿京都ご通行のみぎり、拙者茅屋をお

訪ねくだされたる由、そのせつあいにくと拙者旅中にて失礼をいたした、そのお詫びかたがたお訪ねいたした次第でござる」

取「どうぞ少々お待ちくださるよう、ほかならぬ吉岡先生でございますから、一応お伺い申してまいります」

兼「さようか、しからば何分よろしく頼み入る」

取「かしこまりました」

と奥へ入って、右のおもむきを十兵衛先生へ申し上げると、

十「なに京都今出川の吉岡がまいったとな、これは珍客、こちらへお通し申せ」

取「かしこまりました……ええ吉岡先生、どうぞお通りくだされまするよう」

兼「ご病気中さしつかえないか」

取「先生のご病気は、もはやご全快にござりまする」

兼「お早いご快気だの。ははは」

笑いながら奥へ通り、初対面の挨拶をいたし、両雄膝をまじえて、よもやまの話をいたしていると、また玄関へさして、

×「お頼み申す」

と案内申し入れたるは、年齢三十四五歳とおぼしき色白のりっぱな侍。取り次ぎの者立ちいで、

取「いずれからのお越しでござる」

×「当寺に柳生十兵衛先生ご滞在の由、ご面会いたしたく、この儀よろしくお取り次ぎくだされ」

取「どなたでござるか」
×「拙者は豊前小倉において一度お目通りいたした小野治郎右衛門と申す者」
取「ちとお待ちくだされたい……今日はばかに名高い先生ばかり来るぞ」
と驚きながら、右のおもむき十兵衛先生へ申し入れると、
十「小野氏がまいったか、ほかならぬ仁だ、これへ通せ」
取「委細承知つかまつりました……ええ小野先生、どうかお通りくださいまするよう」
治郎右衛門奥へ通り、十兵衛先生に対面の上一別以来の挨拶をなし、兼房ともども種々の物語の後、
十「吉岡先生その許には囲碁はいかがでござるな」
兼「いささかわきまえておりますが……小野氏は」
治「てまえも好むところで」
十「さようか、しからば幸いであるから、一席かこもうではござらぬか、これよ、盤面を持て」
○「はっ」
次にひかえた家来が、けっこうなる碁盤をはこびます、十兵衛先生白石をお持ちになり、兼房黒石を持ってパチリパチリと打ちはじめた。そろいもそろって好きというのですからたまりません。はじまったが最後、三人ともまるで夢中になってしまって、食事もなにもあったものではない。接待係は大弱りで、膳部を暖めたり冷やしたりしていると、はや夜は白々と明けわたり、その夜は徹夜勝負が終わりません。その中にとうとうと鳴りひびくは八幡社奉納試合をしらせる太鼓の音。

八幡社前三名人のリーグ戦

武士は轡の音に眼をさますという、寝食を忘れて夢中で碁をかこんでいた十兵衛先生、この太鼓の音にはっと気がついて、
十「吉岡殿今日は大切な奉納試合の日、残念ではあるが、いたしかたがない、打ちどめ勝負なしといたそう」
兼「今少しのところだが、やむを得ん、さよういたそう」
とようやく切りあげがついたから、接待役もほっといたし、すぐに朝飯のしたくをしてすすめる。そこで三人とも早々したくをいたし、八幡社前へまいって見ると、もう黒山のごとき群集。正面には葵御紋の幕を打ち、上座には越前福井の城主、松平越前守権少将忠直公、床几に腰をおろしてご見物、おそばには安藤左京、古川監物、宮島新左衛門、長岡帯刀、田宮六郎右衛門等をはじめとして、老臣の面々肩をならべてひかえる。
西の方を見てあれば、紅白だんだらの幕はりわたし、家中一同ここにて見物、南の方には当日出席の武芸者の溜まり所あり、東には武芸十八般の行司検分役、いずれも熨斗目麻上下を着用なしてたむろする。また太鼓櫓には陣太鼓、陣鐘、法螺などすべて合図の道具をそなえ、場内諸所には旗じるしを押したてて、これがへんぽんと朝風に舞うありさまは、さながらの戦場そのまま

にて、勇ましともなんともたとえようがございません。

待ちに待ったる十兵衛先生、ならびに吉岡又三郎兼房、つづいて小野治郎右衛門には、さっそくお目通りがありまして、当日の勝負に勝ったる者へは、それぞれご褒美をくだされ、また最優勝者は、将軍家お手直しに推薦あいなるという、御上意が下りましたから、出席の武芸者はいやが上にも勇みたち、試合のはじまるを今か今かとあい待っております。

やがて櫓で鳴りだす貝鉦太鼓、ドンドンブーブーと勇ましく合図があって、第一番の番組が張りだされる。張りだされたものは、それへ立ち出で、剣、槍、薙刀、棒、鎖鎌と、おのおの得意の技倆によって勝敗を争います。これを一々申し上げていてはなかなか果てしもないことでございますから省略いたしますが、入れ代わり立ち代わり勝ちを争うありさまは、龍攘虎搏もかくやと思うばかり、それが三日にわたっての大試合でございます。

するとちょうど三日目のこと、もはやほとんど勝負も終わろうとするときに、読み立てる番組の声に応じて、右の方より現れ出でたるは、年齢三十五六、これぞ忠直公に神陰流のご指南申し上げる、坪谷惣左衛門の高弟で、高木喬一郎と申し、越前藩中にも屈指の達人、また左の方より立ち出でたるは、ようよう十七八の前髪の若衆、紅顔の美少年とはかような者を申しまするか、派手やかな衣服、鎖鎌を持って立ち出でました。

この美少年こそ、ついこの間まで上のお側を勤めたる浅見利之助と申す者、鎖鎌はまことに見事な腕前、この度も試合中の呼び物となっておるくらいでございます。ことに太守は利之助がごひいき、利之助が勝てばよいが、どうぞ勝ってくれるようにと思っていらっしゃいます。この勝負の行司は坪谷惣左衛門、熨斗目麻上下で、袴の股だちを取りあげ、扇子を持って中央にひかえ

る、両人たがいに挨拶に及んでさっと左右に立ち別れた。

いうまでもなく、この鎖鎌というものは、一丈余の鎖のさきに鉄の振り子がついていて、それで相手の顔面を打つように、ヒューヒューと振りたてます。もし刀にでも当たろうものなら、振り子はたちまち刀へぐるぐるとまきついてどうしても離れません。また振り子はうまくのがれてもすぐ鎌が飛んで来るという、すこぶる危険なものでございます。ただし試合のときは鎌も鎖も、振り子も、やはり本物を使うのではございません。

さて利之助は美少年には似もやらぬ腕前で、じりじりじりと鎖を伸ばして行く、喬一郎は振り子を打ちはらうと、すぐに鎌が飛んで来る、鎌をはらえば振り子が来る、またも払って今度はこちらから打ちこんで行く。互いに千変万化の秘術を尽くして打ちあいましたが、更に勝負が決しません。一同手に汗をにぎって見物いたしているうちに、喬一郎大喝一声、横に払った竹刀が利之助の胴に入った。とたんに利之助の振りだした振り子も、喬一郎の横顔へはたと当たった。このとき行司坪谷惣左衛門、持ったる扇子をさっと喬一郎にあげましたから、太守はたちまちお褥のそとへ乗りだして、

忠「これこれ惣左衛門」惣「はっ」

忠「ただ今の軍配は違いはいたさんか、この勝負は相打ちであるぞ、それをなにゆえ喬一郎にあげた」

惣「おおせにはござりますれど、これは喬一郎の見事な勝ちにござりまする」

忠「いうな、利之助が振ったる振り子は、胴を打たれると一緒に喬一郎の横顔に当たっている、その方見えなかったか」

惣「それは存じておりまする」

忠「存じていながら、なにゆえ軍配を喬一郎に挙げた、なぜ相打ちといたさなかった」

惣「恐れながら、同時に打ち合ったから相打ちとのみは申されませぬ。ただいま喬一郎は思い通りのすきをねらい、利之助の胴へ十分に入れております。もしあれが真剣なれば、不憫ながら利之助は胴斬り真っ二つとあいなって倒れましてございましょう。また利之助の振り子は物のはずみに喬一郎の

横顔へ当たりましたのでござりますれば、これは疵を受けたとするも、ほんのかすり疵、技倆の現すところ、双方実に天地の相違、利之助はいまだ喬一郎には、違く及ばぬと存じまする」

忠「いやはずみではない、利之助の振り子はもし真剣ならば、喬一郎の頬骨を打ち砕いているであろう」

惣「いやそれはわが君のお鑑識ちがい、広言には似たれども、君のおおせによって、当試合の行司役をうけた

まわりました惣左衛門の見る目には、一点の相違もございませぬ」

忠直公いまいましくおぼしめされて、かたわらに控える検分頭、柳生十兵衛先生をかえりみられ、

忠「十兵衛、その方はただいまの勝負をいかに見た、たしかに相打ちであろうがの」

十兵衛先生にっこりと笑みを含んで、

十「これは君のお鑑識ちがいでござりまする。さすがに坪谷惣左衛門は、神陰流の達人だけあってあっぱれな行司、ただいまの試合はたしかに、竹刀を持ったる喬一郎とやら申す者の勝ちにござりまする」

忠「さようか」

とどこまでも残念そうな御面持ち。すると同じくかたわらにひかえていた吉岡兼房すすみ出で、

兼「これは近ごろ柳生先生のお言葉とも覚えませぬ、はずみであれば、当たった振り子に力が足りないとならば、もしあの振り子が飛び道具であるときはなんとなさるるか」

兼房の言葉に忠直公は力を得て、

忠「これ十兵衛、もし利之助のたずさえた鎖鎌の振り子が、鉄砲であったらばどうじゃ」

十「これはしたり兼房殿、その許鉄砲と竹刀との試合を、同じものにごらんあるか。もちろん千軍万馬の間を往来すれば、鉄砲と太刀との試合はないとはいえぬ、その節にはまたそれ相当の、防戦の手段を講ずることが出来るでござろう、太刀打つ術がいかに巧みなりといえばとて、それで武芸に鍛錬とはいいがたい、変に応じ機に臨んで敵を打ってこそ、武芸の神髄に達したものというべきではござらぬか。

ただいま喬一郎は利之助が鎖鎌であるゆえに、十分ねらいを定めておいて、胴に斬りこんだのは、あっぱれ手練のいたし方と存ずる、もし利之助が鉄砲をもって向かったるそのときには、火縄を移すまでに手もとへ躍りこみ、利之助を真っ向唐竹割にいたしたかも測られぬ、喬一郎は利之助にくらべれば、はるかに武芸鍛錬の者と存ずる」

と滔々と淀みなく武芸の道を説かれた。兼房とても、天下に名をうたわれた武芸者でございますから、これしきのことは十分に知っている、知っていながらわざと十兵衛に反対した、というのは、十兵衛を十分に怒らしておいて、どれほどの腕前であるか、一番試して見ようという腹がありますから、いま十兵衛先生の言葉を聞くと、わざと冷ややかに打ち笑い、

兼「いやいま先生と弁論を戦わしましたところで、畢竟するに水掛け論、それよりは今この場において、先生は喬一郎、拙者は利之助に代わって、一手試合をつかまつりましょう」

十「これはおもしろい、お相手いたすでござろう、早々お支度なされ」

兼「委細承知、小野氏貴公この試合の検分を願いたい」

治「これは恐れ入りました。未熟なる拙者が両先生ご試合の検分などとは、近ごろおこがましゅうござれど、おおせにまかせ検分役相勤めまする。しかし柳生先生にはご承知くだされましょうや」

十「拙者においても望むところでござる」

治「かしこまりました」

と小野治郎右衛門、越前公へ一礼いたし、袴の股だち高く取って、右手に扇子をたずさえ、ゆうゆうとそれへ現れでました。いずれ劣らぬ名人と名人の試合でございますから、越前公はも

ちろん、居ならぶ臣下、さては諸国より集まりたる武芸者にいたるまで、この試合いかがならんと、固唾をのみ、手に汗をにぎって見物いたしております。

まもなく十兵衛先生には鉢巻き襷の用意りりしく、袴の股だちを取り、袋竹刀をたずさえて立ち出でた。吉岡兼房においても、同じく襷鉢巻きに及び、これは吉岡一流の小太刀を取って立ち出でる、互いの挨拶型のごとくあって、いざいざというちに、さっと左右に立ち別れた。まず十兵衛先生は中段にぴたりかまえると、兼房においても同じく中段の心の位につけ、

十「えいっ」兼「やっ」

としばし気合いの声、体は更に一寸も動きません、ただ相手のすきをうかがっているばかり。まったく出来る人の試合はやたらに打ち合わないから、素人の目にはなにがなんだかちっとも分からない。ただ見ればなに石山の秋の月、何事によらず未熟な人の目には、物の深いところが判るものではない。双方しばらく睨みあっていたが、そのうちに十兵衛先生、中段の構えをじーっと上段に直して来た。兼房は中段に構えたが、ツツと小太刀を引くとツツツツと後方へさがり、

兼「まいった」十「まいった」

互いに同じことを言っている。素人にはさっぱり解らない、これは両雄の位どりで、いずれも甲乙ありません。見物一同思わずほっと太息をついた。

十「小野氏、その許一手まいられい」

治「さようなればお相手いたしまする、吉岡先生どうかご検分くださるように……」

兼「委細承知いたした」

入れかわって小野治郎右衛門、鉢巻き襷をいたし同じく袋竹刀を取ってそれへ立ち出でた。や

がてヤッという気合いとともに左右に立ち別れ、じりじりっとかまえをつけた。しばらくは双方すきを覗いあいましたが、まもなく十兵衛先生、ヤッという気合いもろとも真っ向より打ってかかった。治郎右衛門ぴたり受けとめる小野派一刀流の極意。ヤッと横にはらえば十兵衛先生軽く受けながす、打てば、ひらき、ひらけば打つ、七八合打ち合ったときに、

十「まいった」

と先生竹刀をポンと投げだした。このありさまに数千の見物、思わず知らずわーっと声をあげました。

十「いや小野氏、どうもあっぱれであった、ただ今の試合、十兵衛たしかに敗れた」

治「恐れ入ったること、てまえなどの及ぶべきではござらん」

と治郎右衛門意外のことに拍子抜けして退きます。これはなにも十兵衛先生が負けたと申すわけではない、ただこの度の試合において、最優等者は、将軍家お手直しに推薦するという上意もあるのでございます。しかるに当時将軍家のご指南番というは、十兵衛先生のご親父但馬守宗矩公がございますから、先生にして今また治郎右衛門に打ち勝たば、己が将軍家指南役となって、父但馬守に楯つく形となるばかりでなく、流儀も同じでありますから、それよりも人物の正しい、腕前のたしかな治郎右衛門に勝ちをゆずって、一刀流の名誉にしてやろうとの深い考えからでございます。

次には兼房と治郎右衛門の試合、兼房は又もや小太刀を取って進む、十兵衛先生がこの試合の検分役でございます。双方ともやはりにらみあって更に動かない、ただ「えい」「やっ」とかけ声ばかりであったが、しばらくすると検分役の十兵衛先生、

十「勝負見えた」
と軍配を小野治郎右衛門にあげるとたんに兼房も、
兼「まいった」
と太刀を引き、治郎右衛門も同じくさっと竹刀を引いた。それがちょうど機械じかけのように、同時も同時、まったく一瞬間の相違とてもございません。されば正面桟敷においてごらんあいなっていらるる越前公には、ちっともわけがわからない。
忠「これこれ十兵衛、只今の試合はどっちが勝ちじゃ」
十「はっ只今の試合は治郎右衛門の勝ちでござりまする」
忠「ははあ治郎右衛門の勝ちか、しかし兼房はどこも打たれた様子はなかったぞ」
十「はい君には打つかあるいは打たれなければ勝負はないとおぼしめされるかにござりまするが、真の剣術は形に現れただけを見て、勝負をきめるわけにはあいなりませぬ。ただいま兼房の負けたるは気合い負けと申し、治郎右衛門の気合いは、十分に兼房の左の小鬢はずれにねらいがついております。兼房これはなんとしても受けとめることかなわずと知ったればこそ、まいったと申したのでござりまする」
忠「ふーむ、さような事があるものか、これ兼房」兼「はっ」
忠「その方はただ今の勝負に、負けたと申すか」
兼「恐れ入ります、ただ今の試合はたしかに拙者の負けでござりまする。治郎右衛門は後世おそるべきもの、あの時の気合いはたしかに拙者小鬢はずれへねらいがつきました」
忠「ふーむ、治郎右衛門まいれ」

治「はっ」
忠「その方は兼房に勝ちを得たというではないか」
治「はっ、幸いにして手前の気合い、吉岡先生の小鬢はずれへ入りました」
三人のいうところがぴたりと符合いたしております。忠直公も三人の言葉を聞いて、なるほどと感心なされ、
忠「さすがは名人と名人の試合、予はよい修業をいたした」とおっしゃった。
これで福井八幡社前の大試合も、一先ず終局をつげましたので、各国から集まって来た武芸者は、みな一様に国もと指して立ち帰ります。

若隠居、柾木坂へ隠遁

こちら柳生十兵衛、吉岡兼房、小野治郎右衛門の三名は、忠直公のお供をいたして福井城内へまかり越し、お盃を賜って、当分は当地に滞在いたすようにとありがたいお言葉がありましたが、吉岡兼房は京都に道場を開いている身であるから、ゆるゆるの滞在心にまかせずとあって真っ先にお暇をつげる。つづいて治郎右衛門は前に申し上ぐる通り、越前少将忠直公ならびに十兵衛先生のお取りなしによって江戸へくだり、三千石をもって将軍家お手直しの一人とあいなりました。

その当時小野治郎右衛門といえば天下だれ知らぬ者はないほどの武芸者、この治郎右衛門は元伊豆の国の出生で、本名を神子上典膳と申し、剣術にかけては実にゆたかな天分を持った人、伊東弥五郎一刀斎について、その極意を許された武芸者でございます。

柳生十兵衛先生には、その後も福井の城下浄光院に逗留しておられると、福井家の歓待は実に至れり尽くせりで、これがかえって先生には迷惑至極、ある日越前少将殿へあてた一封の書面を残されたまま、飄然として福井を出立いたされましたのが、その年の秋の末、木々の梢の黄ばむころでございます。後にてお付きの者が心づき、右の趣さっそく太守へ披露に及びまするとと、忠「さようか、十兵衛も福井はもはや飽いたのであろう、一旦出立いたしたからは、あとを追うて呼び迎えたところでもどるものでない、捨ておけ」

とのおおせでありますから、家来はそのままにいたしております。

十兵衛先生はもとより急ぐ旅ではないから、行く先々の名所旧蹟を見物して、だんだん差しかかって来たのが、越後高田の城下、大河原町の旅籠、信濃屋清兵衛方へ投宿いたしました。時は十一月の下旬で、この地方ではもはや雪の季節、ことに高田は雪の名所、降りはじめるとまたたく間に三尺五尺はつもります。

さすがの十兵衛先生も雪にとざされて出立することが出来ず、しばらくここに滞在いたし、翌年五月なかば、ようやく雪も消えたというので、三国峠を越えて上州に出で、途中道を急いで立ち帰ってまいりました江戸おもて——。

一旦木挽町のお屋敷に着いたし、父但馬守にひさびさにてご対面、その翌日衣服を改めて登城、将軍家へお目通りの上、毛利薩摩をはじめ、諸藩の様子をくわしく申し上げる、家光公のお

喜びひとかたではございません。かずかずのご褒美、お暇を賜って木挽町の屋敷へ帰りましたが、一旦狂人と称した十兵衛、柳生家が継がれませぬ。ここに十兵衛先生、柾木坂へ隠遁の覚悟、父但馬守に別れをつげて江戸を出立、但馬守の落胆はひとかたではございません。

せっかく帰って来た十兵衛は若隠居、三男の又十郎は出奔して行方知れず、落胆するのも無理はない。

十兵衛は途中奈良に宝蔵院覚禅坊をたずねて丑之助をもらい受け、大和柾木坂に帰られました。覚禅坊はなお引きつづいて道場の主人として、元通り多くの弟子たちを取り立てることになりました。

その後十兵衛先生、とかく健康がすぐれませんので、柾木坂のご陣屋において、もっぱら病気静養いたし、かたわら数多の門弟を取りたて、その数一万人を超えたと称されます。中でも宝蔵院からもらい受けた荒木丑之助、後、改名して荒木又右衛門吉村は、後世荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なし、とまで讃えられた方だけあって、師十兵衛先生をしのぐほどの腕前、十兵衛先生のご寵愛はひとかたでございません。

ここに又右衛門に柳生流の極意ことごとくを授けられ、のち又右衛門、ご病身の十兵衛先生名代として、江戸おもてに出府。先生のご舎弟又十郎殿が、放蕩懶惰の夢さめて日光二荒山、磯端伴蔵先生のもとに、骨身をけずる修行をつまれ、目出たく帰参かなって跡目となり、飛騨守宗冬殿となられておりましたが、この飛騨守殿に、柳生流の極意を伝授いたすという奉書試合のお話は、稿を改めて申し述べることといたし、永らく読みつづけました柳生旅日記、これにて大団円といたします。

（おわり）

講談名作文庫　4

柳生旅日記

昭和51年3月10日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替　東京3930
電話　東京(03)945－1111(大代表)
編　集　講談社出版研究所
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社若林製本所

Printed in Japan　©KODANSHA 1976
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

講談名作文庫

1 真田幸村 名将智謀
2 水戸黄門 漫遊洒脱
3 大岡政談 明智度胸
4 柳生旅日記 剣豪一代
5 赤穂義士銘々伝 忠臣苦節
6 太閤記 風雲痛快
7 鼠小僧次郎吉 義賊仁侠
8 いれずみ奉行 天網恢々
9 猿飛佐助 神出鬼没
10 一休和尚漫遊記 頓智飄々
11 由井正雪 正義革命
12 快傑自来也 妖術変幻
13 荒木又右衛門 武勇仇討
14 伊達騒動 波瀾万丈
15 天保六花撰 江戸の華
16 弥次喜多道中記 珍妙失敗

各巻　320円　挿絵多数入り